
光の軌跡 ~ The track of shine ~

夜御倉 龍元

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光の軌跡 〈The track of shine〉

【Nコード】

N7855W

【作者名】

夜御倉 龍元

【あらすじ】

ミッド新暦75年。

第1世界・ミッドチルダ全土を震撼させた凶悪事件（JS事件）。それを解決した管理局のEーヌ部隊・機動六課の運用期間終了までの残り半年、なのは達は比較的平和な時を過ごしていた。

そんなある日、彼女達の前に二人の青年が現れた。

彼らとの出会いが、新たな物語の扉を開く。
そしてその先にあるのは、世界の真実と儂き想い……。

初投稿なのでグダグダかもしれませんが、お手柔らかにお願い致します。

第0話 始まりの夢（前書き）

初めてなのでグダグダですが、どうぞご覧ください。

第0話 始まりの夢

遙か遠い昔のとある世界。

緑豊かな大地、何処までも蒼く澄み渡った海と空。

そして、それらを見渡す青々とした葉を纏う大樹。

その大樹の麓で2つの人影があつた。

一人は金色の髪に蒼い騎士の鎧を身に纏う15・6歳位の少年。

もう一人は銀色の髪に白い僧侶のローブを身に纏う、少年と同年位の少女。

すると突然、少女は大きな声で少年に問いただした。

「それって、どういう事なの!!」

「言った通りの意味だ。あの2つの実りが終わる時、この世界は……終わる。」

少年は少女を諭すように静かな口調で言った。

その顔には、些か悲痛の表情が伺えた。

「そんな……。この世界……」が……終わる……。
そんなの嫌だ!!嫌だよ!!!!!!」

少女は涙を流しながら少年の肩を掴み、少年の体を前後に揺らす。それは泣きじゃくる幼子のように、瞳から流れていく大粒の涙。

少年は初めは少女に身を任せたようであったが、少女が次第に揺さぶるのを止めて泣き崩れそうになるのを見て、咄嗟に少女の腰に自分の手をまわし、少女を優しく抱き寄せた。

「えっ！？な、何／＼／＼」

「…………ごめんな。」

抱き寄せられた事に顔を赤く染めながら驚く少女に少年は小さな声で言った。

その少年の体は、泣いているのであろうか、小刻みに震えていた。

「…………泣いてるの、ライト。」

少女は少年・ライトに尋ねた。

するとライトは小さく頷き、少女に囁いた。

「…………俺が、…………俺がもっと強ければ、この世界を救う事が出来るのに…………。もう、俺には…………。世界の行く末を見守る事しか出来ない…………。お前の好きなこの世界を、俺は…………。」

ライトは涙を流しながら言う。
今まで自分一人で溜め込んだであろう気持ちを、全て吐き出すように。

少女は目を閉じ、ライトの体に手を回し、耳元で優しく囁く。

「うつん。ライトは頑張ったよ。私と一緒にこの世界を何度も危機から救ったじゃない。初めてこの世界に生まれて、「…………」を倒した時も…………。戦争で、たくさんの人が苦しんでいた時も。一杯、世界を、皆の輝きを守ったじゃない…………。」

……だから、こうして大樹が実りを迎えたんだよ。……
……もう、頑張らなくて……。いいんだよ。……
……ライト。」

「……。っ、ガイア。」

少女・ガイアの言葉にライトは一度目を見開き、それからガイアを抱き締めた。

そのまま10分くらいが経ち、二人は抱き合ったまま互いに顔を見合わせた。

「ライト。今だから、ちゃんとさせて。私の……。……
……。ホントの気持ち／＼／＼」

ガイアは潤んだ瞳でライトを見つめ、頬を染めながら告げた。

「私……。貴方が、ライトが……。……」

ガイアの言葉の後、ライトは微笑み、ガイアに告げた。

「……。俺もだ、ガイア。」

二人は微笑み合うと、目を閉じ、ゆっくりキスを交わした。

そしてその二人を祝福するように、大樹は光輝き、天空に二筋の光を放った。

「うつ・・・。。また、あの夢か。」

とある世界にあるとある家。
古い日本家屋のを思わせるような大きな屋敷の一室で一人の青年は目を覚ました。

茶色の短髪に美しい翡翠色の瞳、日に程よく焼けた肌をし、黒い着物を着た青年。

20歳前半位の青年は布団から出ると襖を開ける。
するとそこには広い庭があり、庭の隅には割と大きな池があった。
部屋が東に面しているのか、朝日が燦々と降り注いでいた。

「……………小さい頃からよく見たりはしたけど、最近はずいずい酷いなあ……………」

部屋を出て縁側に座ると置きっぱなしにしてあったのか煙管盆に置かれた煙管を取り、何かを念じると指先から火を出し、煙管の火皿に近づけ、ゆっくりと煙管を吸い始めた。

すると、縁側の向こうから執事服を着た白髪の男性が現れた。男性は青年のやや斜め後ろに座り、青年に話しかけた。

「御早う御座います、龍児様。」

丁寧な口調でお辞儀をする男性に龍児と呼ばれた青年は微笑みながら挨拶を返す。

「おはよう、フレックス。今日は随分来るのが早いな。」

龍児は部屋にある時計を見る。
時間は5時30分をさしていた。

「ええ。実は先程、隠密機動隊の方がお見えになりました、緊急の隊首会を開くとの事に御座います。時刻は、7時だそうです。」

「……………分かった、すぐに馬車の用意を。」

「はは。かしこまりました。」

男性・フレックスは一礼をすると、縁側を通り馬車小屋の方に歩いていった。

その姿を見届けた龍児は、空を見上げた。

「何か、妙な気がするな。」

そう言うと煙管を盆に置き、部屋に戻っていった。

この青年こそが、これから起きる事件の鍵を握る重要人物。

その名を……………〔夜御倉 龍児〕と言つ。

第1話 不穩の預言(前書き)

短いですが、どうぞ。

第1話 不穩の預言

ミッド新暦75年

ミッドチルダ全土を震撼させた大規模首都型テロ事件・「ジェイル・スカリエッティ事件」。またの名を「JS事件」。

世紀の天才開発者ジェイル・スカリエッティとその配下であった戦闘機人集団ナンバーズによる、第1世界ミッドチルダにある時空管理局地上本部の襲撃を先駆けに起きたこの事件は、管理局のエース部隊・機動六課の活躍によって解決。

ミッドには再び平穩が訪れた。

しかし事件の爪痕は深く、特に時空管理局は、地上本部のトップであったレジアス・ゲイズ中将の死、最高評議会の消滅、更には裏の実態の公表などによってその信頼を大きく欠き、ミッドに住む人々は困惑と不安を抱いていた。

それでも局員を始め、多くの人が少しずつ復興の道を歩み始めていた。

そんなある日……。

「……また何や。ゆっくり話したいから来てほしいって……。」

秋の昼下がり。ここ聖王教会本部の一室で紅茶を飲んでいるのは機動六課の部隊長である魔導騎士・八神はやて。そのはやての向かい側に座るは、聖王教会の騎士カリム・グラシエ。

カップを下ろすと、はやてはカリムに今日自分を呼んだ理由を尋ねた。

部隊長室でいつものように書類の整理をしていた時に、カリムが突然聖王教会でゆっくり話をしたいと連絡があったのだが、カリムが急に自分を呼び出すのは殆どないため、はやてとしても気になっていた。

すると少し間を置いて、真剣な表情でカリムは話し始めた。

「……実はね。今日呼んだのは、これを見てほしかったからよ。」

カリムはポケットから一枚の紙を取り出し、広げてはやてに渡した。

「……これは……。」

カリムに渡された紙を見たはやては、信じられないといった表情でカリムを見た。

カリムもまた、それを信じたくはないと言う顔をしていた。

「これは、ホントなんか？」

はやては念の為カリムに確認すると、カリムは静かに首を縦に振る。それを見てはやては真っ青な顔をし、頭を抱える。

「JS事件が終わってまだ1ヶ月しか経ってへんのに……でも、カリムの「預言者の著書」プロフィール・シュリフテンがデタラメな事を示す筈はありへんし……。なあカリム。これは何時から示されたんや？」

「JS事件が終わって、1週間経った頃に突然、ね。ほら、丁度フエイトさんがジェイル・スカリエッティに事情聴取に行ったでしよう。その頃だったわ。」

はやての問いに思い出しながらそう答えたカリム。それを聞いたはやてはある事を思い出した。

それは、機動六課のライトニング分隊長で執務官のフエイト・T・ハラウンがJS事件の首謀者ジェイル・スカリエッティに事件についての聴取に行った際に、ジェイルが言ったとある言葉。

『いずれ君達、時空管理局は報いを受けるさ。75年前に起きた「あの惨劇」の罪への報いを、ね。』

フェイトからそれを聞いたはやてはスカリエッティの戯れ言だと始めは思っていたが、今回カリムの話と紙に書かれた内容から、それが何かしら関係があるように思い始めていた。

はやては一回紅茶を飲み、カップを下ろすと紙に書かれた内容を読み始めた。

「「凄惨たる古の戦乱　永き因縁に幕引くべく　光の大地より
龍魂の術騎士が現れん

されど　それこそ新たな混沌の始まりなり

天駆ける帝と12の精霊の御霊が集う時　古より眠りし母なる大樹
が蘇る

中心なる世界と光の大地の大樹に刻まれし記憶と生命の根源　帝
と12の星騎士により奪われ　生命の躍動にて交わり　大いな
る光の世界が再びこの世にその芽を開く

世界を守護せし法の皆は悉く砕け散り　総ての世界の民は　帝
と大いなる守り人にひれ伏さん」。……………折角平和に
なつて、皆、少しずつ未来へ歩み始めているのに……………」

はやては読み終わると、窓越しに空を見上げた。

その眼は、不安と困惑、そして悲しみに染まりきっていた。

丁度、その頃

「急な招集によつて集まってくれた。感謝する。」

会議室のような広い空間に11人の男女が座っていた。全員白い騎士の衣装を着、マントを羽織っている。その内、白髪に紅い瞳の老人が威厳のある声で他の人達に感謝を述べた。

「今日皆を呼んだのは他でもない。「あの事件」より75年経った今でも相手側からの正式な報告を受けていない現状を受け、世界各国の首脳による会議の結果、相手側の実態調査を開始する事が正式に決まった。よつてこの任を特命とし、我ら隊長格から2名を派遣する事にした。」

その言葉に辺りはどよめく。

すると、金髪に蒼い瞳の青年は手を挙げる。

「すみません。」

「如何した。何か異論でもあるのかの？」

老人は鋭い目で手を挙げた青年を見る。すると青年は立ち上がり老

人に言う。

「異論ではありませんが………実態調査であり特命任務でもある。という事は、潜入せよ、と言う事でしょうか？」

青年は確認するように老人に尋ねると、老人は静かに頷いた。

「……いかにも。この任は潜入調査と考えてくれればよい。相手側が真摯に調査をしてくれているか、改善する傾向があるか、そして………我々「リユニエールの民」を殲滅する可能性があるかどうか。それらを調べてほしいのじゃ。」

老人は静かに、だがしっかりとした口調で答える。

すると今度は金色のロングヘアに赤いの瞳の美女が話し掛けた。

「それでしたら隠密機動隊の方々にお願いすれば宜しいのに、わざわざ隊長格を、しかも2名も異界へ派遣するのは何故ですか？」

「本来ならそうだが、隠密機動隊は先日起きた事件の大規模調査をされていて、殆ど出払ってる。」

「その上、世界を越える力を使える者は1名しか居らんのじゃ。隠密機動隊には居らんじゃろ。」

黒髪に紺の瞳の男性と老人が女性の質問にそれぞれ答える。

そこに、銀髪に水色の瞳の15歳位の少年が何かに気づいたように言う。

「……………という事は、1人は決まっているようだな。」

少年の言葉に全員が一人の人物を見る。

その目線の先には、茶髪に翡翠の瞳をした青年が座っていた。

「成程。つまり、俺が行くと言う事なのですな。総隊長。」

青年は老人を見て総隊長と呼び、納得したような顔をする。

総一郎は「うむ」と頷いた。

「じゃあ、オイラが相棒についていくよ!!」

突然、銀髪に緑色の青年が愉快そうに手を挙げる。

「お前……………。遊びに行く訳じゃないぞ。これは特命だって事を忘れるな。」

「そんなの分かってるよ、相棒!! オイラだって立派な隊長だよ。どんな事があっても大丈夫さ!! それに向こうの情報を扱うんだから、オイラがいた方が便利だろ?」

茶髪の青年は楽しそうな顔をする青年に注意すると、青年はその彼を相棒と呼んで指を差し自信満々に言う。

相棒と呼ばれた青年は小さく溜め息をついている。

「……………うむ。どうやら決まったようじゃの。」

総一郎は全員の顔を見渡すと、一息を置き言つ。

「では、おぬしら両名に相手側「時空管理局」への実態調査の特命任務を申し付ける。準備が完了次第すぐに向かつてくれ。」

「はっ！！」

老人の命令に2人は威勢よく返事をする。それを確認すると老人はゆっくりと立ち上がり、周りを見渡す。

「以上をもって隊首会を閉会する。我らに、剣と大樹の導きを！！」
右の拳を左胸の前に持っていていき、威厳が込められた大きな声で老人は発言する。

それに合わせて、他の10人も立ち上がり老人と同じ構えをして声を合わせて言つ。

「……………剣と大樹の導きを！！！！！！！！！！」

「……………」

第2話 平和な時間（前書き）

1週間ぶりですが、短いです。

ではどうぞ。。。。

第2話 平和な時間

あれから5日。

ここ機動六課の部隊長室で、八神はやては5日前に聞いたカリムの話と預言について考えていた。

「凄惨たる古の戦乱 永き因縁に幕引くべく 光の大地より龍魂の術騎士が現れん……。なんやろ、古の戦乱つて。」

以前のカリムの預言の時は比較的意味は分かりやすかったが、今回に至っては全くと言っていいほど分からなかった。

まず1つは、凄惨たる古の戦乱と言う部分。

古の戦乱だけなら旧暦時代の諸王戦乱期を真つ先に思い浮かべるが、はやての中でジェイルが言った『75年前の「あの惨劇」』という部分が妙に頭に引っ掛かっていた。始めは戯れ言と思ひ、気にも止めなかった言葉が、今では頭の中で永遠と響いている。

75年前の「あの惨劇」

一体、何の事なのか？

今から75年前といえば、時空管理局が本局と地上本部に分かれ、新暦が始まった時期だ。もしかしたら、その時に何かあったのではとまでは思った。

だが、管理局のデータベースといえる無限書庫で親友の一人で司書長を務めるユーノ・スクライヤに協力してもらいながら75年前の資料を隅々まで調べたが、特に変わったモノは発見できなかった。

もちろん、全てそこにならあると言い切れる訳ではない。

管理局にとって不利益になりうる事であればその情報を隠す、あるいは抹消したがるのは当然といえる。

現に、ジェイル・スカリエッティが管理局からハッキングした数々の管理局の実態。それらも隠されていたのだから、その可能性も無きにしてもあらず。

はたまた、本当にそんな事は存在しない可能性もある。スカリエッティが挑発する為についた嘘であるとも思える。

けれど仮に後者だとすると、スカリエッツィの意味深な発言と同時に示されたあの預言。あれは偶然起きてしまったという事となる。

しかし、はやて自身あれが偶然だとは信じがたい。

根拠はないし何故かは分からない。けれど、あれがとても偶然とは思えないのである。

そんな風に考えているせいかな、だんだんはやての表情が暗くなり始めた。

10年前に起きた闇の書事件。

はやてが魔法に出会い、多くの人に迷惑を掛けてしまった事件。

あの時以来、はやては管理局員としてあの事件の贖罪をしている。

そのため、危険な仕事も自ら望んでしていた。

JS事件後、今度は対処・解決にあたった機動六課の部隊長として事後処理やら会議やらが続き、普段以上にこの1ヶ月は多忙を極めた。

あちこちへ走り回り、色々考えたり、実際肉体的にも精神的にも疲れが溜まっているのだ。

そんな状況でこの預言の件が舞い込んできたのだ。はやてとしても、漸く平穏が戻ってきた矢先の出来事なので、内心自棄になりかけて

いる。

「……ちょっと空気でも入れ換えようかな。」

新鮮な空気を吸って、気持ちを入れ換えようと思ったのはやては窓を開ける。

すると、外から男女の楽しそうな話し声が聞こえて来た。

「ねえティア。折角の有給休暇なんだし、この間行けなかった所に行こうよ〜。」

「はいはい、分かったから……。ちょっと、くつつきすぎよ!!!バカスバル!!!!!!」

「痛っ!!!!!!」

「はあ〜、全くアンタは……。」

「まあ、いいじゃないですか。このところ事件後の資料整理とかでゆっくり出来ませんでしたし。」

「なのはさんやフェイトさん達からお休みをいただいたのですし、今日は楽しみましょよ。」

楽しそうな会話をしているのは、どうやらFWの4人のようだ。
久しぶりの有給休暇で、今からミッドの首都クラナガンに出掛ける
ようである。

それを見ていたはやてはクスクスと微笑む。

「……あかなあ。こんな事でくよくよしてても始まらない。
皆が安心して暮らせるよう、頑張らな!!」

はやてはそう言うと、背伸びをしてガッツポーズをとる。

その顔はさつきまでの暗い顔ではなく、いつものはやてらしいやる
気に満ちる生き生きした顔だった。

一方その頃、食堂では六課のスターズ分隊の隊長 高町なのはとラ
イトニング分隊の隊長 フェイト・T・ハラウンが遅めの朝食を
摂っていた。

二人の間には、なのはの養女となったヴィヴィオがいる。

「ねえ、フェイトちゃん。どうだった、例の件は？」

「うん。はやてに頼まれて母さんにも聞いてみたけど、分からない
って……。」

二人は真剣な顔をして言う。

二人もまた、預言とジェイルの言ったあの惨劇という言葉の意味を

知る手掛かりを得る為、管理局員にも何度も聞いたりはいるが、揃って皆知らないと言う回答だった。結果、ほぼ毎日夜遅くまで調べていた。

そのせいか、少し疲れの表情が伺える。

「なのはママ、フェイトママ。大丈夫？」

二人の元気の無さを心配してか、ヴィヴィオが二人を不安そうな表情で見る。

なのはとフェイトは微笑むと、ヴィヴィオに話しかける。

「大丈夫だよ、ヴィヴィオ。ちょっと考え事をしてただけだから・・・。そうだー!!」

「どうしたの、なのは？」

なのはは何か思い付いたように大きな声をあげ、フェイトは首を傾げてなのはに尋ねた。

するとなのははヴィヴィオに笑顔で言う。

「ねえ、ヴィヴィオ？今日、なのはママとフェイトママと一緒にお出掛けしない？」

「お出掛け？」

なのはの突然の提案に、キョトンとした目をするヴィヴィオ。

「そう。このところ何かとお仕事で忙しかったからヴィヴィオと一緒ににお出掛け出来なかったでしょ？ だから、今日はヴィヴィオの行きたい所に連れて行ってあげる。ね、フェイトちゃん。」

「……うん、そうだね。たまには息抜きもしないと、はやてに何か言われちゃうね。じゃあ、お出掛けしようか、ヴィヴィオ。」

「うん、行く!! わ〜〜い!!!」

なのはの言葉にフェイトは頷くとヴィヴィオに優しく尋ねる。

J S事件が終結してからというもの、なのはやフェイトは数日間程休養はあったが、事後処理や事情聴取といった仕事におわれていたさらに、事件の一番の被害者とも言えるヴィヴィオは療養と一時的な保護観察がついてしまっていたため、まともに一緒に出掛ける機会がほとんどなかったのだ。

だが、なのはがヴィヴィオを養子にする事を決めた今だからこそ、この提案をしたのだ。

なのはとフェイトの提案を聞いたヴィヴィオは満面の笑顔で嬉しそうに頷いた。

それから1時間後、なのはとフェイト、そしてヴィヴィオの3人は首都クラナガンに出掛けていった。その笑顔はとても幸せそうだった。

この後に突然の出会いがある事も知らずに・・・。

第3話 突然の出会い（前書き）

かなりブツ飛んでいます。が、どうぞ。

第3話 突然の出会い

なのは達が有給休暇を過ごしていたその頃……。

フオオオオオン……。

ここはミッドチルダ、首都クラナガン郊外にある廃墟地区。

その中にある古びたビルの屋上に突如として光輝く魔法陣が現れた。

しかし、その魔法陣はミッド式ともベルカ式とも違う絵柄のものであった。

円形に幾何学模様が描かれ、縁には黄道十二星座が刻まれている不思議な魔法陣。

そして、光が次第に収まるとその魔法陣のあったところに二人の青年が立っていた。

一人は茶髪に翡翠の瞳をし、もう一人は銀髪に緑色の瞳をした、どちらも騎士を思わせる白い衣装とマントを着ていた。

「着いたようだな。」

「だね……。」

二人は辺りを見渡すと、大きく背伸びをし、茶髪の青年が疲れた表情で言う。

「あ〜〜っ、しかし疲れるなあ、次元移動は。いくらあの人の魔力を使っているとは言え、世界を越えるのは想像以上にキツイものだな。」

「文句言つなよ相棒。任務なんだから仕方ないじゃないか。」

背伸びをしながら溜め息混じりに文句を言う青年に、銀髪の青年は注意を促す。

すると、茶髪の青年は背伸びをやめ銀髪の青年をあきれた目で見ると、

「なあ前々から言おうと思ってたんだが…….
.いい加減、相棒はよせ。騎士学校の時ならともかく、今は殆ど共に戦うって事はしないんだからよ。それに、俺には夜御倉龍児って名前があるんだし、隊長同士ちゃんと名前で呼ばないといけないだろ、セスタ・ベルセリオス5番隊長。」

「そりゃそうだけどさ…….オイラにとっては相棒はいつまでも相棒なんだよ。大体、オイラが相棒を名前で呼んだりしたら逆に気味が悪いだろ、夜御倉龍児2番隊長殿。」

茶髪の青年・龍児は銀髪の青年・セスタにそう伝えるが、当のセスタはそんな事など気にしていないようなお気楽な表情を浮かべ、いたずら気味に龍児を名前で呼んだ。
すると、龍児は小刻みに震えセスタを睨み付けた。

龍児「うう……。やめろ！！なんか気味が悪い……。はあゝ、全く……。思えば、お前は出会った時からずっと俺を「相棒」と呼んでいたな。」

「うん。オイラも……。よく分からないし、何故か知らないけれど……。つい相棒って呼んじゃうんだよなあ。」

龍児は呆れ気味ではあるがどこか嬉しそうに思い出し、セスタは頭をかきあげながら苦笑いしていた。

「……………それより。」

龍児は屋上の柵に寄り掛かると、じつくりと辺りを見渡す。

「例の組織がある世界と聞いていたから、どんな世界かと思ったが……………、予想と違ってるなあ。街が荒れているな。」

「うーん、確かにこの辺りはそうだけど……………、でも向こうの方は結構しっかりしているよ。文明もかなり発達してるようだし……………。多分ここは旧市街地じゃないかな？」

ミッドの風景を見てそれぞれの感想を述べる二人。
龍児はやや意外そうに、セスタは街の様子を分析しながら街を見ていた。

すると、廃墟地区を見渡していた龍児は突然後ろを振り返る。

「相棒、どうしたの？」

「いや……、今助けてって聞こえたような気がしたんだが……」

突然の龍児の行動を不思議に思ったセスタが尋ねると、龍児は真剣な眼差しで誰かが助けを呼んでいる声が聞こえたと答えたのだ。だとすれば大変だと思ったのが、セスタは龍児が見つめる方向を向き、屋上の柵に身を乗り出し辺りに耳を済ますが、助けを求めるような声や悲鳴は聞こえない。

辛うじて聞こえるのは、廃墟の街を駆け抜ける風の音位だ。

「オイラには何も……。。空耳じゃあ……」

セスタが龍児に空耳じゃないのと言おうとした時、

「きゃあああああ……!!!!」

突如として、甲高い悲鳴が辺りに響き渡る。
まだ幼い少女の声のようだ。

「相棒!!今の………って、もついない!?!」

セスタは悲鳴が聞こえた事を龍児に伝えようと振り返るが、さつきまでそこに居た筈の龍児は、既に消えていた。
慌てて辺りを見渡すと、ビルの下の道を声のした方に猛スピードで走る龍児の姿を確認する。

「もう!!やる事が急すぎるって………
も言ってるだろおお!!!!!!!!!!」

やや怒りながらのセスタの心の叫びは、廃墟の街に虚しく響き渡っていた。

一方、廃ビルから飛び降りた龍児は、廃墟地区を声のした方に走っていた。

微かに感じるまだ小さな魔力と気配を感じながら、先程の悲鳴の主を探している。

「（微かにだが感じる。まだまだ小さいけれど、確かに魔力の波動を。．．．．．こっちか。）」

ビルの間の狭い道を抜けると、道幅の大きな道に出た。

大きさからみて、嘗ての大通りと考えれる。

すると、龍児の左側からこちらに走ってくる人影が見えた。そして、その人影は丁度龍児の前で盛大に転んだ。

金色のロングヘアーの見た目からして6歳くらいの少女。

その少女は、徐に顔を挙げた。身体中傷や泥まみれになり、目には涙を浮かべていた。

「君。大丈夫？」

「うう．．．．．」

龍児は少女と視線が同じ高さに合うように屈み少女に優しく語り掛ける。

すると少女は小さな呻き声を上げながら目を開いて龍児を見る。

その瞳は右が翡翠色、左が緋色の光彩異色だった。

「お兄さん．．．誰？」

その少女は龍児に尋ねる。少し怯えているのか、小さな体を小刻みに揺らしている。

そんな様子を見て龍児はより一層優しく語り掛ける。

「お兄さんは龍児っていうんだ。大丈夫。君の味方だよ。助けを求めたのは君かな？」

「……うん。」

優しく微笑みながら龍児は助けを求めた声の主かどうか尋ねると、少女は小さく頷く。

だが、そんな彼女が走ってきた方向から何かが向かってくるのを感じた。

「何か……来る。」

龍児は腰に差した二本の刀の内、銀色の柄と黒い鍔に銀色の牙のような突起物が刃の側に着いた刀に手を掛け、いつでも抜けるように構える。

暫くその体勢で待っていると、1メートル位のカプセルの形をした浮遊体が20機程龍児達に向かってきた。

内何機かは赤いコードのような触手を出している。

「あ、ああ……。」

少女は再び怯えた表情を浮かべ、龍児の後ろに隠れる。

少女の様子の変化を見て、龍児は少女が悲鳴を挙げた理由があの妙な物体である事を確認した。

「相棒!!！」

そこに龍児を追いかけてきたセスタが到着した。

「セスタか。この子を頼む。恐らく、あれがこの子を襲ったのだらう。」

「えっ！？わ、分かったよ。」

龍児は困惑するセスタに少女を委ねると、手にかけてた刀を抜く。

どこまでも透き通った白銀の刀身を持つ刀を静かに前に構えると、刀身に青いオーラが纏われる。

「こんな幼い子を襲うとは、愚劣の極み。覚悟！……蒼破刃！……！」

龍児が刀を大きく真横に振り切ると、蒼い衝撃波が前方の浮遊物に向かって飛んでいき、一機に直撃・爆発を起こす。

「まだまだ！！蒼破追連！！！！絶風刃！！！！」

さらに青色の衝撃波を2発と×印の斬撃を放つ。

それらの攻撃は中空を駆け、向かって来た浮遊物を悉く貫き一斉に爆発を起こす。

爆発が起きた所には先程の浮遊物の残骸のような物が散らばっていた。

だが、その後ろから同じ形の物体が先程とは倍近くの数が出て来

た。

「おいおい、まだいるのか。いいだろう、来い!!」

龍児は刀を両手で握ると、浮遊物に向かって走り出す。

浮遊物は真ん中の円形物から青色のエネルギー弾を放ち、赤い触手を龍児に向かって伸ばしていく。それに対し、龍児は身軽な動きを見せて相手の攻撃を次々かわしていく。

「甘い!!この刀・龍王牙の錆にしてくれる!!!!はああああ!!
!!!!」

龍児は相手の攻撃の隙を上手くつき、3機を一度に斬る。
さらに、華麗な回し蹴りを後ろに居た2機に食らわし、刀を地面に突き刺す。

「面倒だ。まとめて終わらせる!!!!地獄の業火に焼かれて滅せよ!!!!!!!!」

地面に刺された刀の刀身が段々真っ赤に染まり、辺りの地面に亀裂が入る。

「これで、終わりだ！……地龍・獄炎殺！……！」

龍児が刀を一層強く握ると、亀裂の奥底から次第に轟音と地響きが強くなり、そして……、

ドオオオオオオン！！！！！！！！！！

亀裂から深紅に染まった炎が巨大な火柱になって浮遊物を包み込んだ。

巻き込まれた浮遊物は跡形もなく燃え尽き、龍児が刀を地面から抜くと火柱は消滅した。

「ふう〜。簡単だったな。……セスタ、もう大丈夫だぞ。」

刀に着いた埃を払うように刀を縦に大きく振り払うと、静かに腰の鞘に納め、建物の影に隠れたセスタを呼ぶ。

セスタは少女を抱き抱えて龍児の元に向かう。

「相棒。この子怪我してるよ。」

早く治療術を施した方がいいよ。」

セスタは傷まみれの少女を見て、悲壮の顔で龍児にそう伝える。龍児は背負っていた荷物からキャンピング用の寝袋を取り出すと、近くの平らな場所に置き、その上に少女を下ろすようにセスタに指示する。

セスタは龍児に言われた通りに少女を寝袋の上に下ろすと、龍児は少女の横に正座をする。

そして両手を少女の前に出し、手の平を向けると、龍児の足元に桃色の光を放つ魔法陣（T O W R Mシリーズで術を使う時に出る魔法陣と同じ）を展開する。

「……………快方の光よ、集え。ファーストエイド。」

詠唱を終えると、術を発動する。すると少女の身体を柔らかかな光が包む。すると身体中についた傷が見る見る内に消えていく。少女は驚いた表情で自分の身体を見る。

「……………治った。スゴい！！一瞬で治っちゃった！！！！！！」

一瞬にして怪我が治ったのが余程驚いたのか少女ははしゃいでいた。その様子を見て龍児とセスタはホツとした表情を浮かべ、少し笑った。

「ははは。ホントに無邪気だな、子どもって……………。美桜もそうだ

けど、子どもの笑顔ってホントに心が癒されるな。」

「だね。美桜ちゃんも元気一杯で笑顔満開だからね。」

楽しそうに二人は話している。

すると、空から声が聞こえてきた。

「っ、ヴィヴィオ~~~~!!!!!!!!!!」

その声に龍児とセスタ、そして少女は上を見上げる。
すると空から白を基調にしたバリアジャケット姿の茶髪にサイドテ
ールの女性・高町なのはと、紺を基調にしたバリアジャケット姿の
金髪のロングヘアーの女性・フェイト・T・ハラオウンがやって来
た。

「あっ、なのはママ!!フェイトママ!!」

「っ、ヴィヴィオ!!!!!!!!!!」

ヴィヴィオと呼ばれた少女はなのはとフェイトの元に向かって走っ
ていった。

そして、なのはとフェイトと少女は涙目になりながら抱き合ったの

だった。

「ヴィヴィオ。何処も痛くない!!」

「うん!!!!あのお兄さん達が助けてくれたんだよ。」

涙目になりながらヴィヴィオに確かめるのはに、ヴィヴィオは笑顔で答えて、龍児達を指差す。

すると、フェイトは龍児達の前に行き感謝を伝える。

「ヴィヴィオを助けていただき、ありがとうございます。」

「.....」

フェイトがお礼の言葉を伝えたが、当の二人は驚いた表情でフェイトを見ている。

「え.....と、そんなに見つめられると、恥ずかしいノノ」

二人の男性、しかもかなりのイケメンに見つめられ、顔をリンゴのように真っ赤染めるフェイト。

すると龍児がゆっくりと口を開く。

「フェ.....フェイト!!な、何でお前がここにいるんだ!!必ず帰るから、それまで隊を頼むって言うていたのに.....」

「えっ!?!」

「そつだよ!!2番隊副隊長だから隊長不在の間は隊を守るのが当然だろ!!ロイとかはどうしたんだよ!!!!」

「え、ええ〜〜!!!」

龍児とセスタに身に覚えのない事を言われて、フェイトはどうすればいいか分からず、大絶叫するのだった。

そんな光景をビルの屋上から眺める二人の人影がいた。

一人は金色の鎧を身に纏った金色の短髪に紅い瞳をした長身の男性と、黒いドレス姿の紫色の髪に黒い瞳の女性が建物の上から様子を見ていた。

「いいんどすか？あの女の子……。あの天才科学者のジエイル・スカリエッティはんが生み出したそうやありませんか。折角、例の計画に必要なキーを手にしたんどすえ……。それなのに、わざわざ手放すなやんで……。」

「構わん。むしろこうした方が都合がいいのだ。そうすれば、覚醒が早まる……。それが、あの方の望みなのだ。」

女性は怪しげに男性に尋ねると、男性は静かに確信を持った発言に答える。

「……全ては主様の意思のままに……ですやろ……。」

「そういう事だ……。行くぞ。」

二人は静かにベルカ式の魔法陣を展開させると、一瞬にしてその場から消え失せた。

その場所の近くには、血塗れになった管理局員が倒れていた。

第4話 六課との邂逅（前書き）

忙しくて更新が遅れました。
では、どうぞ。

第4話 六課との邂逅

ヴィヴィオの救出から1時間後。

なのはとフェイトから詳しく話を聞きたいと言われ、龍児とセスタは今、クラナガン近くにある機動六課の廊下を歩いている。その中で、龍児はフェイトを注意深く見つめていた。すると恥ずかしくなったのか、頬を赤くしたフェイトが龍児に話しかける。

「あ、あの・・・／＼／＼そんなに見詰められると、恥ずかしいんですけど／＼／」

「あ、ああ。すまない／＼ホントによく似ているから、つい・・・」

フェイトに言われ、龍児は少し頬を赤くしながら静かに笑う。

「にはやは。そんなに似てるんですか？龍児さんの幼馴染みの人に」

「ああ。瞳の色と声が違うくらいで、あとはみんな同じだ。名前もフェイトだしな。・・・ははっ、しかし俺の知ってるフェイトより凛々しいなあ。あいつはもっとほんわかした感じだからなあ。・・・おっちょこちょいで、俺にばっかスゴく甘えてくるけど、根はしっかりした女性だ。その上、剣の腕はなかなかのもので、前なんか10mのモンスターを一人で仕留めたんだぜ。あれは流石に驚いたよ。」

龍児は自分の知っているフェイトについて何処か嬉しそうに話す。それを聞いたなのはとフェイトは、異世界のフェイトとの違いに驚いていた。

「ほんわかだけど、いざとなるとたくましいフェイトちゃん。・・・ふふっ、なんか変な感じだなあ。ね、フェイトちゃん。」

「う、うん。なんか私とちょっと違っていて正直信じられないよ。」

「でも、オイラは凜々しいフェイトもいいと思うよ。なんかカッコいいし!」

フェイトに向かって良い笑顔でそう言うセスタ。

その顔を見たフェイトはさらに顔を赤くし、頭からは湯気が出始める。

「フェ、フェイトちゃん!?!?大丈夫?」

「う、うん／＼／＼／＼」

「・・・どうしたんだよ、急に。」

「・・・お前のせいだよ、絶対・・・。」

何が起きたのか全く分からない様子のセスタに、龍児は呆れた顔をしながら静かにセスタにそう告げたのだった。

そして漸く目的の部屋の前に辿り着く。

そこは六課の隊舎の中でも一番上の階にある場所で、ドアには部隊長執務室と書かれていた。

「高町なのは一等空尉。ガジェットドローン撃破の重要参考人を連れて参りました。」

「どうぞ、はいつてな。」

なのはがドアをノックし、恐らくドアの向こうにいる人に向かってだろうか、ドアに向かって話し掛ける。

するとドアの向こう、部屋の中から訛りの入った女性の返答が返って来た。

その声を聞いた龍児は驚いた顔をする。

「えっ……（そんな……でも、この声は……）」

ドアが開き、なのはは部屋に入る。その彼女に続き、フェイト、龍児、セスタの順で部屋の中に入ると、中には三人の女性が居た。

一人目は朱色の三つ編みに蒼い瞳の少女。二人目は桃色のポニーテールに薄い水色の瞳の女性。

そして三人目は椅子に座り、大きな机に手を置いている茶髪ショートヘアーに青色の瞳の幼さが残る女性。机の上には茶色のカバーの

本が置いてある。

「折角の休暇中にごめんなあ。いきなりの出勤、ご苦労様や。」

「ううん。ガジェットが居たんだもの、仕方ないよ。」

椅子に座った女性はなのはに申し訳なさそうに言うと、なのははゆつくり首を横に振る。

そして、茶髪の女性はなのはとフェイトの後ろに居る龍児とセスタを確認するかのように見る。

「……んで、後ろの二人が通信で言うと思った、ガジェットの撃破とヴィヴィオの保護をしてくれた人達なん？なのはちゃん。」

「うん、そうだよ。」

なのはに再確認をとると、茶髪の女性は椅子から立ち上がり、龍児とセスタににこやかに話し掛ける。

「初めまして。私はここ時空管理局本局古代遺物管理部機動六課の部隊長をしております、八神はやて二等陸佐です。お二人のご協力に、部隊長としてお礼申し上げます。」

茶髪の女性・はやては丁寧な挨拶と深々と頭を下げる。

それを見てセスタは呆気にとられるが、すぐに我に戻り話し掛ける。

「あつ、ええつと……、わざわざご丁寧にありがとう。ただ、運良くあの場に居合わせただけだし……。……おまけに、変な物体に幼い少女が追われていたのを助けただけだから、そ

これまでの事をしていないよ。ねっ、相棒。」

セスタははやての丁寧な接し方に少し慌てて、当然の事をした事を伝え、龍児に同意を求めるが、当の龍児ははやてを見て固まっていた。

その表情は、信じられないといった感じを出しており、まるで有り得る筈もないものを見ているようだった。

「（……………そんな……………そんな、まさか……………
こんな事が……………!!!）」

「……………ぼっ……………相棒!!!!!!」

「あっ……………」

セスタに体を揺すられながら声を掛けられ、ふと龍児は我に返る。

「どうしたの相棒？顔色が優れないよ。」

「あっ、す、すまない。ちょっと立ち眩みがした。」

セスタは龍児の顔を覗き込み、龍児に不調を尋ねる。
すると龍児は右手を額に当てて立ち眩みがしたと伝える。

それを聞いたセスタは不安そうな顔をする。

「相棒、大丈夫？なんか変な顔してたよ。もしかして、次元移動で魔力を使いすぎたんじゃないの？」

「ほんなら、少し横になさったらええと思います。急いで部屋を用意します。フェイトちゃん、シグナム、取り敢えず空きの部屋に案内してな。」

「うん、分かったよ。」

「分かりました、主。」

はやてはフェイトと桃色の髪の女性・シグナムに龍児を部屋に案内するように頼み、二人は了承する。

フェイトは龍児の右肩に自分の左腕を後ろから回して支えると、シグナムが先導しながら龍児を部屋に連れていった。

「相棒……、大丈夫かなあ？このところ準備が忙しかったし、次元移動で魔力を使ったみたいだし……、疲れが溜まっているのかも……。」

龍児が出ていったドアの方を見てセスタは心配そうに言う。
すると、それを見かねたはやてはセスタに話し掛ける。

「大丈夫ですよ。ここには優秀なスタッフが常勤してますから、何かあってもすぐに対応できます。それより……。」

はやてはセスタを真剣な眼差しで見ると、聞きたかった事について話し始める。

「なのはちゃんからある程度、話は聞いていますが、今後の事もありますので、詳しく聞かせてくれませんか？」

そう、はやてが聞きたかった事。それは、二人の事について。

龍児とセスタは既に、自分達の情報と、自分達がミッドとは異なる世界から来た事をなのはとフェイトに話していたが、その報告を受けたはやては、詳しく聞きたい部分が多々あった為、二人をここに連れてくるようになのは達に告げたのだ。

さらには、あの預言の事も何か分かるかもしれない。はやて自身、そう考えていたからと言うのもあった。

はやてのその考えを知ってか知らずか、セスタは笑顔で頷く。

「うん。分かった。でも全部話せるとは限らないけど、構わないかな？」

「構いません。」

セスタの問いに、はやては快く返事をした。

話せない事があるとは言え、少しでも分かる事があれば良い。そうはやては考えていた。

「() ……ここで変に嘘をついても直ぐにバレちゃうだろうし……
……、それに、もしオイラの勘が正しければ……。」

一方セスタも、自分達の事を話す事を了承したのには考えがあつた。管理局のような組織であれば、上手に嘘をついても、簡単に見抜かれてしまう恐れがある。そうすれば、追及を受けて自由に行動できなくなる。ならわざわざ嘘をつかなくても、敢えて真実を教えていた方が、仮に調べられても本当の事なので追及といった自由の束縛を受ける事をされなくても良くなる。それに、組織であるが故の特性もある。そうセスタは考えていたのだ。

「じゃあ、まず互いに自己紹介からしようよ。基本の情報交換は必要だろ？」

セスタははやてにウインクをしながらそう言う。それにははやては呆気にとられるが、気を取り直し、セスタに言う。

「……それもそうやな。私は時空管理局本局古代遺物管理部機動六課の部隊長の八神はやて二等陸佐です。」

「じゃあ次は私だね。私は時空管理局航空戦技教導隊教導官で、今は機動六課スターズ分隊の隊長を努めています高町なのは一等空尉です。先程一緒にいたのはライトニング分隊長のフェイト・T・ハラオウン執務官と同じく副隊長のシグナムさんです。」

「あたしは機動六課スターズ分隊副隊長のヴィータだ。」

はやて、なのは、そして赤毛の少女・ヴィータが自己紹介をする。それを聞いたセスタは笑顔でお礼を言い、自分と龍児について話す。

「ご丁寧ありがとうございます。……………オイラはセスタ。セスタ・ベルセリオス。世界国家騎士団5番隊長を務めている騎士だよ。さつき出ていったのは相棒の夜御倉龍児。オイラと同じ世界国家騎士団の2番隊長をしてるんだ。……………」と、ここまでではなのはに話した事だから、じゃあ、そろそろ本題に入ろうか……………」

セスタは笑顔から一転、真剣な眼差しではやてを見る。その青く澄み渡った鮮やかな瞳にはやては息を呑む。

「一つ油断すれば呑み込まれる。そんな感覚をはやては感じていた。」

「……………オイラ達は、君達管理局から第77管理外世界「リュミエール」と言う世界の出身で、オイラと相棒はその世界の国際平和維持組織「世界国家騎士団」で隊長として今在籍している。因みに「リュミエール」っていうのはオイラ達の世界の古い言葉で、「光の大地」って言う意味だよ。」

「世界国家騎士団？さっきも言うつもりでしたが、一体どういう組織なんですか？」

セスタが自分達の事について話していると、はやてはその中の「世界国家騎士団」という組織について尋ねる。

するとセスタはやはりといった表情ではやてを見る。

「……………やっぱり、オイラの思った通りだ。……………「世界国家騎士団」っていうのは、リュミエールで嘗て起きた大戦争の終結後に設立された国際平和維持組織の事だよ。戦争の惨禍を起こさない為に設立されたこの組織は、全国家に対して大きな影響力を持っているんだ。勿論有事の時だけ行使できるものだけだ。」

ね。」

「まあ、それはそうやな。そんなのいつも行使されたら権力の暴走やし……。」

セスタが苦笑いして話すと、はやても同じように苦笑いをする。

そして、セスタは話を続ける。

「で、世界国家騎士団には1番隊から11番隊まであって、それぞれに特色や専門の施設を持っているんだ。大体こんな感じだけど、分かったかな？」

話し終わるとセスタがはやて達に理解したか確認する。それに対しはやて達は頷く。

「はい。ご丁寧にありがとうございます。それで、隊長のお二人が何故わざわざミッドチルダに来てるんですか？」

はやてはセスタにお礼を言うと、一番聞きたかった事を聞く。

龍児とセスタがミッドチルダに来た理由。

任務のためとは聞かされていたが、詳しくは知らなかったのだ。

それにセスタは少し間を置いて話し始める。

「……それについては、詳しく話せないんだ。オイラ達の今回の任務は、総隊長から直々に出された「特命」だから、その内容は隊長格以外には「Top secret」……最高機密なんだ。」

セスタのその発言に、なのはは意見する。

「それは困ります。何の為にここに来ているのか分からないとお二人の保護が難しくなります。さらにお二人はこちらで保有が禁止されている兵器を持っている以上、事によっては身柄を拘束させていただきますが。」

真剣な眼差しでセスタを見るのは。

そう、龍児とセスタが持つ武器は魔導師のデバイスではなく、管理局法で保有禁止兵器と呼ばれる「質量兵器」。
故に、龍児とセスタはその時点で管理局に拘束される理由が出来てしまっているのだ。

このままでは任務に支障が出る。そう考えたセスタは、一つ良い方法を思い付いた。

「あれ、おかしいな。話せない内容もあるけどって言って、構わないうってそつちが言ったんだよ。矛盾してないかなあ……。それとも、そんな事は知らないと言つつもり？」

「うっ……。」

イタズラそうな笑みを浮かべ言うセスタになのはは押し黙る。
確かに先程、セスタが「話せない事もある」と予め宣言して、はやてが了承していた。

つまり、その時点で口約束ではあるけれど互いに同意している状況である。

部隊長が了承した状況で話が進んでいる今、任務について話す事ができないセスタを責める事は出来ない。

それを知ったのは、はやてにどうするのか尋ねた。するとはやては一つ溜め息をついて話す。

「しゃあない事や。私が同意している以上、話せない事があってもな……。」

「じゃあ、一先ずオイラが話せるのはここまでかな。……
……で、オイラ達はこの後どうなるの？」

はやてにセスタは自分達の今後の処遇について尋ねる。

一応、機動六課に任意同行の形になっているが、この後どうなるのかセスタ自身気になっていた。何より、龍児があの様子では野宿という訳にもいかない。

魔力を回復するためにも、せめて環境が整った場所が良い。そうセスタは考えていた。

するとはやては暫く考え込み、ゆっくりと口を開く。

「……お二人の今後ですが、質量兵器の保持と目的の不透明さ、それと今回の活躍を考えて、お二人には民間協力者としてここ機動六課で保護という形になりますが、かまいませんか？」

はやては手を組み、セスタを見て言う。
何か裏がある、そんな風にセスタははやてから感じた。

「分かった。それでいいよ。じゃあ、オイラは相棒の所に行くね。
それと、オイラ達には敬語使わなくて良いから。宜しく！！！！」

セスタは軽くウインクをしてそう言うと、軽快な足取りで部屋を出ていった。

それを見届けたはやて達は一呼吸置き、二人について話し始める。

「……なんだかいいように丸め込まれちゃったね、はやてちゃん。」

「……せやな。でも、あの二人には何か裏がありそうや。現に、カリムの預言にあつた光の大地って言葉。あの二人の出身世界のよ
うやし……。もしかしたら、リュミエールと管理局との間に何かあつたのやもしれへんな。その辺りを重点的に調べる必要がある
ようや。」

はやてはそう言うと、窓越しに蒼い空を眺める。
その瞳には、微かに光が宿っていた。

一方、龍児が休んでいる部屋に向かって歩くセスタは先程のはやて達との会話を思い出しながら情報を整理していた。

「……やっぱりオイラの予想通りだ。オイラ達騎士団の事を話しても反応が無かった。……あの事件の事を管理局員が全部知っている訳じゃないみたいだな。いや、敢えて知らせてないんだな。まあ、当然と言えば当然か……。さて……。これから、どうするか……。」

セスタは意味深な笑みを浮かべ、廊下を歩いていった。

まるで、戦略をじっくりと練っている策士のように、その瞳は鋭く光っていた。

主人公&amp;オリキャラ紹介(リユミエール編)(前書き)

少し早いですが、主人公達の紹介です。

こちらは徐々に増えていく予定です。

主人公 & amp ; オリキャラ紹介 (リユミエール編)

・主人公

名前：夜御倉 龍児

イメージCV：赤羽根 健治

年齢：23歳

身長：187?

体重：70?

種族：????

性格：

沈着冷静だが困っている人がいるとほっとけない優しさを持つ。

容姿：

茶髪に鮮やかな翡翠の瞳。

鋭い目付きに引き締まった顔のイケメン。

好きな事及びもの：

煙管を吸う事、美しい自然を愛でる事及び酒を飲む事、家族、最愛の人、仲間、等

嫌いな事及びもの：

目の前で大切な何かを失う事、命を奪う事を肯定する者、力に溺れる者、最愛の人を傷つける者

武器：

龍王牙（刀）

無月（刀）

夜天の書（魔術書）

悩み事：

最愛の人とのこれから。

役職及び立場：

世界国家騎士団 2番隊 隊長

???国??? 夜御倉家第64代当主

???国 王家神官

資格& amp; 称号：

???国???証、国家騎士証、世界国家騎士団隊員証、???魔

術師

魔力値：SS+（陸戦能力S+）

本来の魔力の半分

特殊能力：

1．靈魂解読

2．????

効果：

1．物体または大気中の思念及びエネルギーを読み取る。

2．????

本作の主人公。

第77管理外世界（リュミエール）の国際平和維持組織（世界国家騎士団）の2番隊隊長を務める。騎士団のとある任務でリュミエールからミッドチルダにやって来た。意味深な発言や年相応に思えない言動をするなど年齢以上に大人な男性。その実力は高く、模擬戦では剣術と魔術を上手く使い分けている。

セスタ曰く、「リュミエールで一番強い魔術師」との事。

・リュミエールの人々

名前：セスタ・ベルセリオス
イメージCV：阪口 大助

年齢：22歳

身長：191？

体重：69？

種族：ヒト

性格：
お気楽でお調子者。けれど誰よりも熱い心を持つ。感情は龍児よりも豊か。

容姿：
銀色の短髪にサファイアのように深い蒼の瞳。
やや童顔だけれども整った顔。

好きな事及びもの：
龍児の相棒でいる事、木陰で本を読む事、楽しい事、家族、姉、龍児、仲間、等。

嫌いな事及びもの：
家族や仲間を悪く言う者、姉や龍児が悲しむ事、命を弄ぶ者。
武器：
ルーンブレード（両手剣）

悩み事：
姉の破天荒振り。

役職及び立場：
世界国家騎士団5番隊長
情報統括局第8代目局長

資格& amp・称号：
国家騎士証、世界国家騎士団隊員証、情報統括局局員証

魔力値：AAA+（陸戦能力S）

特殊能力：

風の気まぐれ（正式名称は違う）

効果：

攻撃・機動力強化（本来と違う）

龍児の戦いにおける相棒^{バライ}の青年で、現在、世界国家騎士団5番隊長、兼情報統括局第8代目局長を務める。

龍児と同様、任務でミッドチルダにやって来た。

龍児とは騎士学校時代からの親友で、相棒と呼称し、龍児の右腕として活躍していたが、隊長になってからは龍児と共に仕事をすることがなかなか無い。身の丈ほどの大剣を軽々と使いこなし、細身な体からは想像できないパワー全開の大技を使う。また姉と同じく魔術に精通している。

名前：フェイト・L^{ルス}・ムーン

イメージCV：工藤 晴香

年齢：23歳

身長：170？

体重：52？

種族：ヒト

性格：

ほんわかして、落ち着いた雰囲気。滅多に怒る事は無い。
龍児にスゴく甘えるが、戦闘時や危機的状況には勇敢に戦う。

容姿：

金色の長髪をツインテールにし、木々のように深い緑の瞳。
「リリカルなのは」のフェイトに似ているが、目が大きく可愛い
言葉がぴったりな顔をしている。

好きな事及びもの：
???

嫌いな事及びもの：
???

武器：
???? (????)

悩み事：
???

役職及び立場：

世界国家騎士団2番隊副隊長
???国??? ムーン家次女

資格&称号：

国家騎士証、世界国家騎士団隊員証、国家神官

魔力値：????

特殊能力：????

効果：

????

龍児とセスタが知っている女性。話から龍児の副官であるようだが、詳しい事は不明。

名前：月光院スバル

イメージCV：斎藤千和

年齢：18歳

身長：157?

体重：45？

種族：ヒト

性格：

丁寧な口調。臆病で引っ込み思案。人見知りが激しく、自分から話す事はかなり稀。

容姿：

「リリカルなのは」のスバル・ナカジマと同じ容姿だが、性格故か、いつもフードを被っている。

武器：

???? (????)

役職及び立場：

世界国家騎士団 5番隊副隊長

情報統括局副局長

総合大資料室司書長

???国 月光院家次女

資格及び称号：

国家騎士証、世界国家騎士団隊員証、情報統括局局員証、司書長証

魔力値：????

特殊能力：????

効果：

????

セスタの副官にあたる少女。
詳しくは不明。

第5話 模擬戦・龍児& a m p・セスタvsシグナム& a m p・ウィータ(前書

やっと第5話です。

また飛びに飛んでいます。

ではごっげ。

第5話 模擬戦・龍児& a m p・セスタvsシグナム& a m p・ウィータ

.....

ゴオオオオオオオオオ。

輝く満月の夜。

とある山奥の大きな湖の畔に大きな古い屋敷がある。
手入れが行き届いた、歴史を感じさせる御屋敷。

その屋敷から突如爆発が起き、次々と火の手が上がる。
全てを焼き付くさんと、煌々と燃え盛る深紅の炎。
その炎を必死で消さんと多くの人々が消火に全力を尽くしていた。

その炎が燃える中、屋敷の廊下を必死に走る一人の人影があった。

「はぁ……、はぁ……、はぁ……、はぁ……、はぁ……、
……くっ！」

右肩を左手で押さえながら、身体中に軽い火傷と傷を付けた茶髪に
翡翠の瞳の少年は、時折転けながらもひたすらに走っている。

「はぁ……、はぁ……、何処……ですか？……
……何処に……居られるの……ですか？」

その少年は誰かを探しているようで、息を乱しながらも震える声を
絞り出している。

そして少年が大きな部屋に入ると、そこには……。

「……！！父様！！母様！！」

血塗れになりながらも白銀の刀身の刀を持っている茶髪に深緑の瞳
の男性が、自らの後ろに居る茶髪に蒼色の瞳の女性を庇いながら、
白髪に仮面を付け、見るからに禍々しい作りの剣を持つ者と対峙し
ていた。

「!?何している!!早く逃げなさい!!」

少年の存在に気づいた茶髪の男性は、少年に避難するように大声で言う。

すると、仮面の者は少年の方を見て、静かに笑う。

「ゲゲエ、ゲゲエ!!漸く見つけたぞ。我らが主君が長年求めてきた、光の守り人よ。さあ、我々と共に来るのだ!!!」

仮面の者が指を鳴らすと、背後から武器を持ったマスクを付けた黒装束の男共が数人現れ、少年に襲いかかる。

「〔龍児〕!!!!!!」

茶髪の女性は少年の名前を叫ぶ。

「あ、うあああああ!!!!!!!!!!!!」

.....

「はあっ!!!!!!はあ.....はあ.....」

朝日が差し込む部屋。その部屋に置かれている二段ベッドの下の段で龍児は目を覚ました。

呼吸は乱れ、額からは汗が滲み出ていた。

龍児は右手で額に付いた汗を拭き取ると、ゆっくりと上体を起こし自分の服装を見る。

黒を基調に、白色の蝶が大胆に舞うような絵柄の和装。

どうやら、龍児が何時も寝る時に来ている寝間着のようだ。

それを見た後、龍児は静かに溜め息をつく。

「……この部屋に案内されて、着替えて少し横になっただけだったが、……いつの間にか眠っていたようだ。まあ、次元を越える為に大量の魔力を使ったんだ。それも仕方ない、か。」

また一つ大きな溜め息を付くと、先程まで見ていた夢の内容を思い出す。

「久しぶりに見たな、あの時の出来事を、夢で……。昨日、「あの方」にあつたからだな……。最初一目見た時は驚いた。よく似ていたからな……。」「母様」に……。」

静かに目を閉じ、龍児は夢の事と昨日の出来事を思い出していた。その顔は、とても懐かしそうに、そして悲しそうな表情を浮かべていた。

すると、そんな龍児に話し掛ける声があった。

「あ~~~~いぼう。おはよう!~!~!~!」

「うお!~?」

突然セスタが話し掛けると龍児は油断していたのか、ビックリする。

「なんだよお。。。そんなに驚かなくても良いだろ。」

「いきなり逆さのお前の顔を見たら誰だつて驚くぞ!~!~!~!」

「痛!~!~!~!」

怒りの形相でセスタの顔面に右ストレートを食らわす龍児。
セスタはパンチを受けて、二段ベットから落っこちる。

「いたたた。。。もう、相棒!!力加減してよ!」

ベットから落ちたセスタは涙目になりながら、鼻を擦る。そして龍児に抗議するが、当の龍児はセスタを余所に着替えていた。

黒い和装を脱ぎ、代わりに白い服と鎧を着る。そしてその上に真ん中に何かの紋章と2が描かれた白いマントを羽織る。
この世界にやって来た時と同じ、騎士団の正装だ。

着替えを進める龍児は、ふとセスタに尋ねる。

「……そう言えば、昨日あの後どうなった？」

龍児はセスタに自分が不調で部屋を出た後の出来事についてセスタに聞き、セスタは、龍児に昨日の話の内容を詳しく且つ分かりやすく説明する。

数分後、セスタが話し終わると龍児は暫く考えた後、セスタに話し掛ける。

「……成程な。全ての管理局員が知っている訳ではないか……。好都合の反面、少し厄介だな……。」

「……管理局員が知らないということは、文献とかに残されている可能性が低い、からだね。」

「ああ。」

セスタの確信に満ちた発言に龍児は相槌を打つ。

それから、二人は何やら含みのある笑みを浮かべる。

すると……。

トントン。

誰かがドアをノックする音が聞こえる。

龍児がドアを静かに開けると、管理局員の制服を着た青いショートヘアに緑色の瞳の笑顔の少女が立っていた。

「おはようございます。朝食のお時間ですので、お迎えに上がりました。私はスターズ3、スバル・ナカジマ二等陸士です。」

輝く無垢な笑顔に龍児は一瞬呆気にとられる。

「あつ、ああ。わざわざすまない。準備は出来たから、案内を頼めるか？」

「はい！！任せてください！！」

スバルと名乗った少女は活気ある笑顔で答えると、龍児達二人を案内し始める。二人もスバルについていく。

暫く廊下を歩いていると、突然スバルはセスタに話し掛ける。その顔は少し赤かった。

「…………あの、そんなに見つめられると恥ずかしいです／＼／」

「えっ？…………ああ、ごめん。オイラの副官の子にそっくりだから…………つい。」

セスタは苦笑いしながらスバルに謝る。それを見て龍児は気がついたような顔をする。

「ああ。そう言えば誰かに似てるなあって思ってたけど、確かにそっくりだな。〔月光院スバル〕副隊長に。」

「うん。ほらさっきの無垢な笑顔とかスゴくそっくりじゃない。でもこっちのスバルは活発そうだねえ。オイラの隊のスバルは結構臆病だからなあ。隊任せてきたけど、大丈夫かな？」

セスタは不安そうな表情で自らの隊の副官の事を思う。すると、スバルは龍児に尋ねる。

「あの、リュミエールでしたよね。龍児さんとセスタさんの出身世界なのは……。その、向こうの私ってどんな感じですか？」

スバルはどうやら、異世界のスバルについて気になる様子だ。すると龍児は暫く考えた後、微笑みながら言う。

「そうだな……。俺達の知っているスバル。月光院スバルって言うんだが、君に良く似ているな。ただ、臆病で人見知りが激しくて、騎士団でも俺達みたいにごく親しいメンバー位にしか話さないからな。一番良く話すのは従兄弟にあたるセスタだな。良く「お兄ちゃん。」って呼ばれてたな。」

「そうなんですかあ。なんだか不思議だなあ……。会ってみたい
!！」

龍児からリュミエールのスバルについて聞いたスバルは、自分と違う自分に不思議な感覚と会いたいという期待を膨らましていた。

それから三人は食堂に着き、龍児達は食事を選んでいた。龍児とセスタは、管理局の食堂のメニューの多さに驚いている。

「う〜ん。何にしようかな？こんなにがあると悩むなあ……」

「。。。」

腕組みをしながらメニューをじっくり見て、頼む品をひたすら悩んでいる。

「……言つとくが、バランス良く食べるよ。お前肉ばっか食うけど、ちゃんと野菜も食えよ。」

「は~~~~い。」

お盆を持ち、メニューを注文する龍児は隣のセスタに食事の内容について注意し、セスタはそれに返事をする。

そして、二人は注文を終えると窓辺の空いているテーブルにお盆を置き、椅子に座る。

「いただきます。」

二人は静かに手を合わせ、食事の挨拶をし、朝食を食べ始める。

因みに龍児の朝食のメニューは、白米に鰯の焼き魚、白菜と大根の漬け物にお味噌汁、それと少量の野菜サラダ。飲み物は暖かい緑茶。セスタは、焼きハムのトーストにコーンスープ、野菜サラダにヨーグルト。飲み物はアップルジュース。

二人がリュミエールで良く食べる朝食のメニューを頼んでいたのだ。

二人が朝食を食べていると、龍児達に話し掛ける人がいた。

「おはよう。龍児さん、セスタさん。」

「お兄ちゃん達、おはようございます。」

「二人とも、おはよう。」

「ああ、おはよう。」

「おっはよ〜〜う!!!!!!」

龍児とセスタが振り返ると、そこには局員の制服を着たなのはとフェイトが朝食が乗ったお盆を持って立っていた。なのはの足元には同じようにお盆を持ったヴィヴィオが満面の笑顔で龍児達を見ている。

龍児は微笑みながら、セスタはにこやかに挨拶を返す。

なのはとフェイト、ヴィヴィオはテーブルを挟んで龍児達の向かい側の椅子に座る。

「もう大丈夫ですか？体調の方は。」

昨日、体調の悪さから六課に来て早々部屋で安静にしていた龍児にフェイトが具合を尋ねる。

すると龍児は微笑みながら答える。

「ああ、おかげさまですっかり良くなった。結構魔力が少なくなっていたみたいだったから、安静にしていたら今日は好調だ。」

そう言うと龍児はお茶を啜る。

すると、なのはは龍児達にこう切り出した。

「あの、実はお二人の戦闘値を調べたいので、この後訓練場に来てくれませんか？」

なのはは、龍児とセスタの戦闘能力を調べたいと言います。民間協力者として機動六課に世話になる二人が、どれだけの力を持っているか測る為に、どうやら訓練場で模擬戦をするようだ。

それを聞いた二人は暫く考えてから、二人揃って了承する。

「分かった。訓練場だな。さっきスバルって子から教えてもらったから、1時間後位でいいか？」

「はい。ではお待ちしています。」

龍児の答えに、なのはは笑顔で頷いた。

それから1時間後……。

ここ、機動六課の海上訓練場でなのは達は龍児達の戦闘値を測る為の準備をしていた。

測定の機器の配置も終わり、後は龍児達が来るのを待つだけのだ。

すると、隊舎の方から龍児達が走ってくる。

龍児は左横腹に二振りの刀を、セスタは背中に大剣を持っている。

「……すまない。遅れたか？」

呼吸を整えながら龍児はなのは達に遅刻したかを尋ねる。

それになのはは首を横に振る。

「ううん。時間通りですよ。取り敢えず、準備はいいですか？」

なのはは模擬戦の開始を龍児達に尋ねると、龍児は手を挙げて待ったの仕草を取る。

龍児はセスタに背中に背負った武器を出すように促し、セスタはその通りに武器を取り出す。

それを確認すると、龍児は自身の刀を鞘から抜き、自らの足元に白色に輝く魔法陣を展開し詠唱を始める。

「母なる大樹よ。彼のモノから他を殺める力を封じよ。アンチ・キル。」

詠唱が完了すると、龍児は空いている左手を自分とセスタの武器に翳す。

すると、翳した左手から白い光が武器に向かって注がれ始め、段々武器が白い光を帯びる。

暫くすると武器が帯びていた光が消え、まるで何事も無かったかのように日の光を受け輝いている。

「……これで良い。さて、模擬戦を始めてくれて構わない。宜しく頼む。」

刀を鞘に戻し、大剣をセスタに返すと龍児はなのはに模擬戦の開始を促し、軽く一礼する。

それになのはは頷き、模擬戦の説明を始める。

「あ、はい。ええつと、ルールはこの訓練場内での2対2の模擬戦をしてもらいます。相手はシグナムさんとヴィータちゃんです。二人とも準備は良い?」

なのはの質問に後ろでバリアジャケットに身を包み、デバイスを持った状態で待機していたシグナムとヴィータはなのは達の前に立つ。

「いつでも準備は出来ている。」

「ああ、構わないぜ。」

「……宜しく頼む。」

「お手柔らかに〜。」

上からシグナム、ヴィータ、龍児、セスタが言い、訓練場に入っていく。

そして、ほぼ中央でシグナムとヴィータ、龍児とセスタが対峙する。既にお互いデバイスと武器を構え、戦闘準備完了である。

「それでは、レディー……、ゴオオオオオ!!!」

なのはの模擬戦開始の合図が聞こえると同時に、龍児とセスタは地面を勢い良く蹴り、シグナムとヴィータに向かう。

「俺はシグナムって人を相手する。お前はヴィータって子を頼む。」

「了解!!!」

龍児の指示にセスタは威勢良く返事をし、それぞれの相手に向かう。そして相手との距離が5mになった時、二人は武器を鞘から抜き技を放つ。

「蒼破刃!!!」

「魔神剣・改!!!」

龍児は蒼破刃を、セスタは魔神剣・改という巨大な衝撃波を放ち、それらは真っ直ぐにシグナムとヴィータに向かって飛んでいく。

シグナムとヴィータは龍児達の技を紙一重で交わし、龍児達に打ち

込む。

「はあああああ!!！」

「ふん!!！」

「うおおりゃあああ!!！」

「よっこいしょ!!！」

シグナムのデバイス・レヴァンティンと龍児の刀・龍王牙。ヴィータのデバイス・グラーファイゼンとセスタの大剣・ルーンブレード。互いのデバイスと武器がぶつかり、激しく火花が散る。副隊長で古代ベルカの騎士と、異世界の若き騎士。

騎士の肩書きを持つ者達の戦いの幕が、今切つて落とされたのである。

第5話 模擬戦・龍児& a m p・セスタvsシグナム& a m p・ウィータ（後書

今回は、セスタvsウィータが中心です。

第6話 鉄槌の騎士と風の貴公子（前書き）

グイータvsセスタの戦いです。

割とあっさりかもしれませんが、どいぞ。

第6話 鉄槌の騎士と風の貴公子

ミッド新暦75年10月25日

機動六課・海上訓練場。

そこで戦う四人は互いの武器をぶつけ合っては離れ、また激しくぶつかる。
その様子から、まだ互いに相手の出方を伺いながら戦っているようだ。

では、彼らの戦いをそれぞれ詳しく見てみよう。

S i d e セスタvsヴィータ

「つおりゃああああー!!」

「よっこいしょおおおー!!」

ヴィータのグラーフアイゼンとセスタのルーンブレードが勢い良くぶつかり、激しく火花が散り、乾いた金属音が辺りに響き渡る。

そんな中、セスタの、オパールのような不思議な輝きの刀身を持つルーンブレードを見て、ヴィータはセスタに言う。

「ふーん。なかなか綺麗な剣じゃねえか。ずっと使ってたのか？」

「うん、騎士学校の時からね。オイラのお気に入りの剣なんだ。褒めてくれて、ありがとう。………そっちの武器。それが君のデバイスってやつ？見た感じハンマーだね。なかなかカワイイ見た目の武器じゃん。」

「ふん。褒めてくれるのはありがてえが、………
………見た目に油断してつと、痛い目に会っぜ！ーっおりゃあ！！
！！」

ヴィータはセスタと距離を開けると、左手を前に出す。
すると銀色の魔力弾が4つ現れ、ヴィータはそれをグラーフアイゼンで射出する。

「わあ！！あぶなっ！！」

セスタは慌てて突然現れた魔力弾を必死でかわす。

「まだまだ行くぜ！！！！！」

ヴィータはそれを良いことに、次々と魔力弾を射出しセスタを追い詰めていく。

一方のセスタは、ヴィータの打ってくる魔力弾を時にはかわし、時にはルーンブレードで受け流しながらヴィータとの距離を開けていく。

「くっ、詠唱省略。クラッシュガスト！！！」

このままではまずいと思ったのか、瞬間的にセスタは青色の魔法陣を展開し、術の威力に影響する詠唱を破棄して、青と紫の疾風・クラッシュガストを放つ。

放たれたそれは、魔力弾とぶつかり爆発を起こす。

だが、そのうしろから次々と魔力弾が打ち込まれていく。

うち何発かはセスタに直撃し、セスタは大きく吹き飛ばされる。

「うわああああ！！！！！」

なんとかバランスを取り直し、上手く着地できたが、まだ魔力弾はやって来る。

「……このままじゃまずいな。仕方ない、あれを使うか……」

セスタは小声で言うとルーンブレードを持ち上げ、魔力弾に剣先を向ける。

「?……なにやるんだ。」

ヴィータはそのセスタの行動に疑問を感じるが、距離的に見てもセスタのいる場所から自分のいる場所まで攻撃は届かないし、仮に届いたとしても守れば良い。そう思っていた。

セスタの口元がつり上がっているのを見るまでは……。

「はあああああ……!……!」

セスタはその構えのまま、何やら力を込め始める。すると、ルーンブレードの刀身から真っ赤な炎が上がり、瞬く間に

それを防ぐのは、まさに至難の技と言えよう。

「ぐっ！……もう無理だ……！」

そのような事実を知らないヴィータでも、このまま守っていたらマズイと思い、慌ててジェノサイドブレイバーから抜け出す事に成功する。

だがあまりに威力が高かったらしく、バリアジャケットは所々ボロボロに焦げている。

ヴィータが出てきたのを見て、セスタはヴィータとの間合いを一気に詰め、ルーンブレードを降り下ろす。

しかしヴィータは間一髪の所でグラーフアイゼンで防ぐ。

すると、セスタはヴィータに一瞬笑顔を見せるとルーンブレードを強く握る。

「喰らええ……！」

「なっ！？」

鏝迫り合いの状態からセスタはルーンブレードを真横に尻ぎ払い、ヴィータはその勢いでパーチャルの廃墟の壁まで吹き飛ばされる。

「まだまだよ！！魔神剣・改！！光龍一閃！！更に、烈空刃！！」

隙ができたヴィータに、巨大な衝撃波・光の斬撃・空気の刃といった遠距離からの攻撃を次から次と浴びせる。

攻撃が直撃した場所は砂煙りを上げ、ビルはバランスを崩し、崩壊していく。

「てつめええええ！！！！」

だが、ギリギリのところまで攻撃を避けたヴィータは崩れゆく瓦礫の中から飛び出し、セスタに向かって先端がドリル状になったグラブ・ファイゼンで攻撃する。

「よつと。ふう、・・・・・・・・・・・・・・・・ていりゃああああ！！」

ヴィータの奇襲を紙一重でかわし、一旦距離を置いたセスタはルーンブレードを構え直し、間合いを詰めヴィータに向かって降り下ろす。しかし、ヴィータはベルカ式の魔法陣を出し防御する。

けれど威力が大きかったのか、防御したのにも関わらずヴィータは顔を歪める。

「くっ！！（なんだコイツ！！華奢な体してる割に、さつきから無茶苦茶一撃が重えじゃねえか！！）」

このままではマズイと思ったのか、ヴィータは辛うじてセスタの攻撃を弾き返すと、バックステップで距離を置く
防御した左手の手袋は少し破れている。

更にバリアジャケットは所々土埃が付き、少し裂けている。

「てめえ、華奢な体の割に大した力じゃねえか。」

「そうかな？オイラはただルーンブレードを振ってるだけだから・・・。それに、これくらい扱えなきゃ隊長格の名が泣くしね。負けるわけにはいかないんだ。」

冷や汗を流しながら少し乱れた呼吸を整えるヴィータがそう言うと、セスタはニコニコしながら答える。

まるで模擬戦を楽しんでいるようだ。

するとヴィータがグラーフアイゼンを構え直し、ベルカ式の魔法陣を展開する。

「そんなのあたしだって同じだ。鉄槌の騎士・ヴィータと鉄の伯爵・グラーフアイゼン。揃えば、この世に壊せねえ物はねえ。いくぞ、

アイゼン！！！！」

G i g a n t f o r m

ヴィータの合図と同時にグラーフアイゼンから4発ほど薬莢が飛ぶ。すると、グラーフアイゼンの頭の形状が小型から大型のハンマーに変わる。

ヴィータのデバイス4形態の1つ、「ギガントフォーム」と呼ばれるこの形態は、破壊力抜群。

まさに鉄槌の騎士に相応しいものと言える。

一目見れば誰もが驚くその形態を見たセスタは、何故か目を見開いてじっと見ている。

「か……………か……………。」

「……………？どうした？」

セスタの様子の変化に疑問を持ったヴィータは、理由をセスタに聞こうとする。

するとその時……………。

「か、カッコいいイイイイ!!!!!!」

「ええええええ!?!」

突然セスタは目を輝かせながらヴィータのギガントフォーム状態のグラーファイゼンを見て興奮しだす。

「スツゴイイイ!!!!!!あんなカワイイデバイスがこんなにカッコいいものになるなんて、「魔法」の力って凄いや!!!!!!「魔術」と全然違う!!!!きつと姉さんに教えたらビックリするだろうな~~~~」

「あ.....」

完全に一人だけで盛り上がっているセスタに啞然とするヴィータ。模擬戦とはいえ、戦いの最中にあんなに盛り上がっているのを見れば、当然の反応だが.....。

「.....でも、だからってオイラは負けないよ!!!!スツゴいもん見せてくれたお礼に、オイラのとおき見せちゃうよ!!!!」

興奮気味のセスタはヴィータを指差してそう言うと、右手にルーンブレードを持ち、左手で刀身に触れる。

すると、徐に眼を閉じ何やら詠唱を始める。
足元には黄緑色の魔法陣が展開される。

「我は風と共にあり、我が意思は風の如くある。時に優しく吹き、時に激しく吹く。万物を包み込む翡翠の風よ、我が意思の元に集い、その奔放なる力を我に与えたまえ！！！！」

詠唱が完了すると、セスタはルーンブレードを高く天に翳す。

すると周辺から風がセスタに向かって吹き始め、刀身に風の渦が出来る。それは次第に大きくなり、轟音を発てていく。

「なんだ、こりゃあ。」

一方ヴィータは目の前で起きている現状を理解しきれていないようだ。

まあ、目の前で大きな竜巻を纏った大剣を、華奢な体のセスタが平気な顔で持っているのだから、通常であれば有り得ない光景を目の当たりにして理解しろって言うのが無理な相談ではあるが。

とにかく、ヴィータはセスタにこの状況について尋ねる。

「おい！！なんだこれは！！一体どうなってんだ！！！！」

ヴィータの大声の問いに、セスタは不適な笑みを浮かべ告げる。

「これがオイラのとっておき。「風の気まぐれ」、オイラが生まれつき持っていた力だよ。風を纏う事で攻撃能力と機動性を上げる。」

そう言うとセスタはルーンブレードを担ぎ、ヴィータに言う。

「何を恐れてるの？来なよ、鉄槌の騎士さん。この世に壊せない物なんてないんだろ？………恐れている余裕はないよ、掛かってきなよ！！！！」

セスタに言われ、ヴィータは自分の手を見る。
小刻みにカタカタと震えている。

「（あたしが怖がつてる？………ふざけんな………私ははやての守護騎士だ。鉄槌の騎士だ。風だろ？が何だろ？が打ち砕いてやる！！！！）」

ヴィータは自分を震いだたせ、グラーフアイゼンを担ぎ、魔法陣を展開する。

「行くぜ、セスタ！……鉄槌の騎士ヴィータ、てめえを倒す！！」

「いいよ、ヴィータ！……風の貴公子セスタ、お相手する！！」

二人は互いに名乗ると、一気に地面を駆け出す。

そして、

「豪天・爆砕！……ギガント……シユラーク！！！！」

「吹き荒れる、終焉を告げる疾風よ！！……シユルスヴィント！！！！」

互いにデバイスと武器を勢い良く振り下ろす。

巨大な鉄槌で全てを砕くギガントシユラークと、巨大な疾風で全てを飲み込むシユルスヴィント。

二人の力が大きくぶつかり、反発し合う。

「うおりやあああああ！！！！！」

「よおりやあああああ！！！！！」

ただひたすら互いの力をぶつけ合い、決して譲らない二人。

力と力、魔力と魔力、鉄槌と疾風。

激しくぶつかるその場所は凄まじい覇気が満ち、何人たりとも近づけない雰囲気になっている。

二人の力が長い間ぶつかり続け、そして、それが限界に達した。

「うああああ！！！！！」

「ぎゃあああ！！！！！」

二人が激しくぶつかり合ったために、互いの技が爆発を起こし、二人は爆風で吹き飛ばされそうになる。

だが、咄嗟にセスタがヴィータを自身の風属性魔術「ウィンドベル」で助けた事で、ヴィータは大きく吹き飛ばされることはなく、セスタ自身もルーンブレードを地面に突き刺して何とか耐えきった。

「……………けっ、なかなかやるじゃねえか。」

「そつちもね……………」

二人はお互いを称え合つと、そのまま気を失う。その表情は互いにいい笑顔であった。

模擬戦・ギターV S セスタ

結果・引き分け

第6話 鉄槌の騎士と風の貴公子（後書き）

特別企画・キャラクター交流会

龍児「どうも、世界国家騎士団2番隊隊長の夜御倉龍児だ。」

セスタ「やつほ〜。世界国家騎士団5番隊隊長のセスタ・ベルセリオスだよ。」

フェイト（L）「初めまして、私は世界国家騎士団2番隊副隊長のフェイト・L・ムーンです。」

スバル（L）「初めまして、その……私、世界国家騎士団5番隊副隊長の、月光院スバルです。」

龍児「というわけで、作者龍元の要望で重要大事様とキャラクター交流会を始めました!!!」

セスタ「前は重要大事様のユーノと一護さん、それとナーノが質問を送ってきてくれたんだよね。」

フェイト（L）「ということは、私達もまず色々質問するって事だね。」

スバル（L）「はい。では、早速質問をします。まずは、重要大事様に……。この小説「光の軌跡」The track of

shine」とオリキャラ達の印象はどうですか？もし、こうした方がいいのでは、こういう所は大事に、等ございましたらお聞かせください。」

セスタ「じゃあ次はオイラからサムライ・ドラさんに。リュミエールで訓練指導するならどのようなメニューにしたいですか？ちなみに、皆体力には自信があるみたいです。」

フェイト（L）「私からはナーノ君に。最初の感想で私と親しみもてそうって言うてくれてありがとう。とっても嬉しかったよ。まだ私は本格的に出ていないけど、どんな所が親しみ持てるのか教えてください。」

龍児「最後は俺か。俺は、同じ主人公であるユーノと師匠の一護だ。ユーノと一護にとって、戦うとはどういうものか？また、命とはどういうものであるべきか？……そして、護るとはどういう事なのか？それを聞かせて欲しい。あと、皆さんに質問です。この作品の一番最初、「始まりの夢」で出てきた二人の男女について、本作のキーを握っているのですが、彼らが一体何者だと思いますか？」

セスタ「返答は、感想・活動コメントなどで構いません。」

フェイト（L）「素晴らしい返答をお待ちしています。」

スバル（L）「これからも、仲良くいたしましょう。」

龍児「それでは、今回はBACK・ONさんの「流れ星」をBGM

にお別れです。ではまた次回にお会いしましょう……！」

第7話 烈火の将と龍魂の術騎士（前書き）

今回はシグナムvs龍児戦です。

ではごきげん。

第7話 烈火の将と龍魂の術騎士

ヴィータとセスタが激しく戦いを繰り広げている丁度その頃。

Side シグナムvs龍児

龍児とシグナムはヴィータとセスタが戦っている場所から少し離れた所で対峙している。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

二人は武器を構え静かに佇む。
その瞳は互いの姿を写し、一瞬たりとも視線を離す事無く、相手の出方を伺っている。

そんな二人の間を、潮の香りがする海風が静かに吹く。
すると二人は勢い良く地面を蹴り出し、間合いを詰める。

「はああああああ!!」

「ふんっ!!」

シグナムのレヴァンティンと龍児の龍王牙がぶつかり合う。

「虎牙破斬!!!!!!!!」

龍児は鏢迫り合いから一旦離れると、シグナムに斬り上げと斬り下ろしの2段攻撃を与える。

鋭い太刀筋でシグナムに斬り掛かるが、そこは騎士であるシグナム。レヴァンティンで上手くなやし、逆に龍児に斬り掛かる。

レヴァンティンから葉莢が飛び、刀身に紫に近い色の炎が纏われ、シグナムは自身の得意技で龍児を攻撃する。

「紫電……一閃!!!!はああああ!!!!」

「くっ!まだまだ!!」

シグナムの見事な剣さばきと強力な技に翻弄されながらも、体勢を

立て直してシグナムの紫電一閃を龍王牙で受け流す。

それでもシグナムは相手の隙を突こうと龍児にひたすら斬り掛かるが、龍児はシグナムの攻撃を最小限の動きでかわす、或いは受け流し、シグナムに隙が出来れば逆に守りから攻撃に転じ、シグナムに斬り掛かる。

右からの斬り下ろし、左への斬り

上げ、渾身の突き、等。

右手に持った龍王牙を必死に振るい、シグナムと互角の戦いをする。

互いに一步も譲らない戦いを演じる二人は、まさに騎士同士の、はたまた好敵手^{ライバル}同士の戦いを思わせるもので、その姿はいつも以上にとても凛々しいものであった。

そんな二人が互いに攻撃し合い、鏝迫り合いの状態になると、シグナムが微笑しながら龍児に向かって言う。

「……ふっ、大した腕だな。無駄な動きが寸分もない。流石は騎士団の隊長だ。」

「そつちこそ。剣さばきといい身のこなしといい、どれをとっても洗練されている、いい騎士だ。世界国家騎士団に欲しい人材だ。」

「ふん。」

鏢迫り合いの最中で、二人は互いの腕の良さを褒め合う。互いを強者と認めたかのような表情をし、その瞳は、あるで煌々と燃えたぎる烈火の如く闘志に燃えていた。

すると突然二人の周りを強風が吹き抜ける。

やがて、その風は次第に勢いを増し暴風のようになる。

「くっ!!」

「うっ!!」

二人はあまりの風の強さに一旦鏢迫り合いを解き、互いにバックステップで下がり距離を置く。

そしてシグナムが風下の方を見るとそこには、ビル間に巨大な竜巻が発生していた。

「……………なんだ、あれは？」

目の前の竜巻に疑問を持つシグナムに龍児は静かに呟く。

「セスタの奴……………あの力を使ったみたいだな。全く……………ノリがいいというか、無鉄砲というか……………」

「？あの竜巻はベルセリオスが起こしているのか？」

シグナムの質問に、龍児は呆れた顔で頷く。

「ああ、セスタの特殊能力だ。アイツは感情が昂ったり、危機的状況になったりすると、周りの風やマナに自分の魔力を作用・干渉させて、風の鎧を身に纏うんだ。……まあ、ハロルドの開発した魔法文字を刻んだルーンブレードのお陰で、今じゃ自分の思うままに使えるようになったがな。」

そこまで言うと龍児は竜巻の方を見て、セスタの魔力を感じとる。

「魔力がきちんと作用されている。やっぱり、自分で発動させたんだな……。まあ、あんな力無意識に使われたら、こっちまで危ういか……。さてと……。」「

龍児は竜巻の方からシグナムの方に向き直る。

すると赤色の魔法陣を展開し、詠唱を始める。

「焰よ、猛追。ファイアーボール。」

詠唱が完了すると、龍児の上方に炎の塊が3つ現れ、シグナムに向かって真っ直ぐ飛んでいく。

「ふん、甘い!」

だがシグナムは龍児の方にすぐに向き直し、レヴァンティンを横に振り、ファイアーボールを3つまとめて尻ぎ払う。

すると龍児はシグナムに向かって一気に間合いを詰め、強力な突きを繰り出す。

「そこだ!空破衝!」

「ぐっ!」

どうやらファイアーボールでシグナムの注意を引き付けている隙にシグナムに近づき、ファイアーボールが消えた瞬間に、シグナムの一瞬の隙を突いたようだ。

いくらシグナムでも、隙を突かれればただではすまない。

強力な突きを喰らったシグナムは後方に大きく吹き飛び、ビルに直撃する。

「そろそろこつちも本番といきますか。……」

「刃に更なる力を。シャープネス。あとは……」

龍王牙に付いた土埃を振り払い、自身の攻撃力を上げる無属性強化系魔術シャープネスを使い、龍王牙の力を上げる。更に、何やら術を発動させる。

「げほっ！……はあ、はあ、はあ……。くっ、何という威力だ。こうもあっさり吹き飛ばされるとは……。」

「行くぞ、シグナム。はあああああ！！！！！」

瓦礫の中から埃まみれになりながらシグナムは突かれた腹部を押さえて出てくる。それを見た龍児は龍王牙を構えて、シグナム目掛けて走り出す。

「………いいだろう。なら私も行かせてもらう！！レヴァンティン！！！」

Schlange from

「連結刃！！！！はあああああ！！！！！」

シグナムの叫びに応じ、レヴァンティンから数発の葉莖が飛ぶ。そして、シグナムのデバイスである炎の魔剣レヴァンティンは第2形態であるシュランゲフォルムになり、シグナムは蛇腹刀のように

なったレヴァンティンをまるで鞭のように容易く扱い、龍児に攻撃する。

「何!?ぐっ!!」

連結刃を見た龍児は、まさか剣が形状を変えろとは思っていなかったらしくひどく驚くが、その間にも自分に迫ってくる連結刃を龍児の牙で受け止める。

「これで決めさせてもらおう!! 剣閃烈火!! 飛龍
. 一閃!!!!」

だが、シグナムはレヴァンティンから葉莖を数発排出させ、自身の大技・飛龍一閃を繰り出し、龍児を攻撃する。

「くっ!! かはっ!!!!」

その予想外の攻撃に翻弄されたのか、はたまた予想以上に強かったのか、龍児の牙を撥ね飛ばされ飛龍一閃をまともに喰らった龍児はビルの壁まで吹き飛ばされる。

その体は弾丸の如く早く吹き飛び、ビルの壁に叩きつけられる。直後ビルの外壁が崩れ、龍児の上に降り掛かる、その際に発生した土埃で、龍児の姿は覆い隠される。

それをシグナムは腹部を押さえながらただ静かに見ている。
すると、右手のレヴァンティンの剣先をゆっくりと地面の方に向け、大きく深呼吸をする。

「ふう………。危なかった。もう一瞬使うのが遅かったら、私がやられていた……。……。さてと、早く出してやらねばな。」

自分の連結刃をまともに受け、しかも瓦礫に埋まってしまったのだから、もう戦えまいと考えたシグナムはゆっくりと龍児が埋まっている瓦礫の方へ歩き出す。

だが、その油断こそが罠であった。

「ぬっ！？なんだ!？」

シグナムは急に自分の体が動かなくなった事に驚く。

体に何かがまとわりついている感覚に襲われ、自身の体を良く見る。

だが、体には何かバインドされている様子はない。
しかし、現に体は動かない。

まるで、目に見えぬ力で縛り付けられているようである。

「やれやれ、まだ勝負は着いていないのに相手に不用意に近づくのは命取りだ。勝負が着くまでは、決して気を抜くな……
……って、如月隊長の教えなんだがな。やっぱり言う通りだったな。」

シグナムの後方から静かに語る声がする。

シグナムがゆっくり後ろを向くと、そこには連結刃を受け、ビルへと吹き飛んだ筈の龍児が微笑を浮かべながら立っていた。

「な、何！？夜御倉、何故お前がそこに居る！！！！確かに私の攻撃を受けて、瓦礫の中に……。」

シグナムは今、目の前で起きている事が信じられずにいる。
確かに、シグナムの飛龍一閃は龍児を捉え、龍児はビルまで吹き飛んだ。

なら、今も龍児は瓦礫の中に居る筈である。

しかし、現に龍児はシグナムの後方。龍児が埋まった筈の場所とはシグナムを挟んで反対側に居る。

これは、一体どういう事なのか。・・・とシグナムは思っている。

そんなシグナムの様子を見て龍児は静かに言う。

「・・・それはな。お前がさつき空破衝で吹き飛んだ時に少し仕掛けていたんだ。・・・お前が攻撃した後に発動する魔術をな。」

龍児はそう言うと、徐に腰に装着してあったバックに手を入れ、何かを探す。

すると、バックから黒い表紙の本を取りだし、本を開く。

「!?!?な、なんだそれは!?!?」

シグナムはその本を見て、信じられないといった表情をし、驚愕する。

何故なら、その黒い本の見た目が、シグナムの主であるはやての持つ魔導書「夜天の書」にそっくりだったのだ。

唯一違つとすれば、表紙の色が黒いという事であるが、それ以外は

全く夜天の書そのままだったのだ。

「これか？我が夜御倉家に代々伝わる家宝。リュミエールの魔術について記された魔術書……」
・「夜天の書」だ。」

「なっ!？」

静かに魔術書と呼ぶ本を持ち言う龍児にシグナムは目を見開き驚愕する。

「何を驚いているか分からないが……、お前が俺に攻撃すると、相手の体の動きを内部から封じる魔術「スピリットバインド」と、瞬間的に移動する魔術「クイック」の2つを使った。特にスピリットバインドはこの夜天の書にしか記されていないから、丁度良かったか。まあ、さっきのはかなり効いたがな……。」

龍児はシグナムの飛龍一閃が直撃した腹部を押さえるが、すぐに手をはずし、鞘に納めている龍王牙を抜く。

「折角、大技を見せてくれたんだ。こちらもお得意の技を見せな

ければならないな。」

龍王牙を天高く掲げると、大きく深呼吸をする。

「すう………。はあああああああ！！！！！！！！」

腹の底から大きな気合いを入れて叫ぶ龍児。

すると、龍王牙の刀身が徐々に光を放ち、同時に雷を帯びる。

次第にそれは強くなっていき、龍児は光と雷を纏った龍王牙を構え直す。

それと同時に拘束が解けたのか、シグナムはレヴァンティンを構え直し、薬莖を数発排出させると、レヴァンティンは炎を帯びる。

「決着と行こうか、シグナム……。」

「そうだな、夜御倉……。」

二人は互いに名を呼び合うと、同時に走りだし、互いの武器を勢い

良く振る。

「天龍……雷光斬!!!!!!」

「紫電……一閃!!!!!!」

雷と炎の斬撃がぶつかり、大爆発が辺りを包む。

激しい爆風と凄まじい砂埃が起き、暫く二人の姿を包み隠す。

すると、海風が訓練場に吹き込み砂埃をかき消していく。

そして、そこには……。

「……………くっ、無念。」

レヴァンティンを落とし、傷だらけのシグナムが力無く倒れる。

「はぁ……………はぁ……………はぁ……………はぁ……………。辛うじて……………だな。」

龍王牙を地面に突き刺し、その場に座り込む。

龍児自身も騎士服の所々がボロボロに裂け、息はかなり乱れている。

「……………世界には、まだまだ俺の知らない強者が居ると、祖父様から聞いていたけど……………まさにもその通りだな。」

そう染々と言いながら清々しい表情で、青く澄み渡ったミッドの空を眺めている龍児であった。

模擬戦・シグナム V S 龍児

結果・龍児の勝利

第7話 烈火の将と龍魂の術騎士（後書き）

特別企画・キャラクター交流会

フェイト（L）「どうも！！2番隊副隊長のフェイト・L・ムーンです。」

スバル（L）「こ、こんばんわ。5番隊副隊長の……月光院スバルです。」

フェイト（L）「始まりました、キャラクター交流会第2弾！！！
！今回もガンガン行くよ。」

スバル（L）「夜御倉隊長とベルセリオス隊長は模擬戦の影響で今回は来れませんので……その、フェイト様と私で頑張ります。」

フェイト（L）「やっぱり、キャラクター同士の交流とかコラボって大切だよな というわけで、今回は私たちから3つの質問と、1つの提案をさせてもらいます まず私からユーノに質問です。「ユーノから見て同じ主人公である龍児の第一印象とそう思った理由は何ですか？また、次の中で使いたい物がありますか？」

- 1・龍王牙「龍児愛用の刀」
- 2・黒い刀「龍児のもう一振りの刀」
- 3・煙管「銀と蒼の装飾」
- 4・魔術書「夜天の書にそっくり」

の4つです。勿論、理由付きでお願いします」

スバル（L）「次は私ですね……。私からは一護さんに質問です。「BLEACHに出てくる浅野けいごさんと言うキャラクターがいますが、……。その人とベルセリオス隊長のここが似ているやここが違う等がありますか？もしありましたらお答えください。」

フェイト（L）「最後の質問は作者・龍元から皆さんによ。「実は先日、夢の中でユーノ・スクライヤ外伝と絆に出演しているユーノ君達がリュミエールに観光旅行に来て、龍児達と過ごす夢を見ました。スゴく感動しました。そこで、これからあげるリュミエールの名所で行きたい所がありましたら教えてください。因みにどこも夢の中でユーノ君達が行った場所です。」

1・春に桜が満開の街道。「桜華国・千本桜街道」

2・美しい桜並木と大きな池が特徴の桜華国の名門。「桜華国・夜御倉邸」

3・300年の歴史を誇り、リュミエールの平和と人一人一人の幸福を守る騎士達の総本山。「シャイン王国・世界国家騎士団総本部」

4・火山熱と火の精霊の加護を受けた温泉の聖地。「フレア連邦共和国・イフリート温泉郷」

5・悲惨な歴史を今に語る戒めの塔。「グリーンマーク王国・戦禍の塔」

6・イタリアのベネチアを思わせる、水と水路の都市迷宮。「アク
ナビート共和国・首都マリーナ」

7・世界と生命発祥の地。全ての母たる大樹と古の豊かな自然が残
る神秘と信仰の島。「世界樹島」

以上の7つからお選びください。後、選んだ理由もあわせてお願い
します。」……………との事です。」

スバル（L）「そして最後に、私達二人から……………その、一
つ提案があります。」

フェイト（L）「実は……………、ユーノとなのはの結婚
式のために、スーツとウェディングドレスの製作を私達にお任せで
きませんかでしょうか？」

スバル（L）「私達、結構こういうのは得意なんです。前にも、夜
御倉隊長の弟様の結婚式の際も作りました。」

フェイト（L）「お二人にぴったり、且つ素晴らしい逸品に仕上げ
て見せます！！！！どうか、ご検討ください。」

スバル（L）「最後となりましたが、これからもよろしくお願い致
します。今回はmissionさんの「tales」でお別れです。
ではまた、……………ごきげんよう。」

第8話 動き出す運命（前書き）

今回は色々と混ざりに混ざっています。

ではいっしょ。

第8話 動き出す運命

龍児とセスタの戦闘値を測るための模擬戦から2カ後。

ここ機動六課・部隊長室ではやてを始めとした六課隊長陣と六課の通信主任兼メカニックのシャリオ・フェニーノ、愛称シャーリィー、そしてはやてのユニゾンデバイスのリインフォース？（ツヴァイ）が集まっている。

全員、その顔は真剣そのものだった。

すると、はやてはシャーリィーにゆっくりとした口調で話す。

「……………それは、ホンマなんかシャーリィー？」

「……………はい。間違いありません。何度も解析し直しましたが、結果はこの通り……………」

「リインもお手伝いしましたから間違いはないですよ。」

はやての問いに対し、シャーリィーは手元の資料から一枚の紙を取り出す。

それは、「魔力値及び戦闘値測定結果」と書かれた紙であった。

「……………あれほどの激しさやったから、もしかしたらとは思
うとったけど……………まさか、ここまでやなん
て……………」

はやてはシャーリーが出したその紙を手に取り、内容を読むと、
大きくため息をつく。

そこには、こう書かれていた。

・魔力値及び戦闘値測定結果

被験者・夜御倉龍児

出身世界・第77管理外世界リユミエール

リンカーコア反応・無し

魔力値・推定SS+

陸戦能力・推定S

空戦能力・測定不可

総合魔導師ランク・推定SSS-

被験者・セスタ・ベルセリオス

出身世界・第77管理外世界リュミエール

リンカーコア反応・無し

魔力値・推定AAA

陸戦能力・推定S+

空戦能力・測定不可

この間の模擬戦で測定した龍児とセスタ、二人の戦闘値のデータだった。

それを見て、なのはは苦笑いする。

「にははは……。。二人ともホントにスゴかったけど、やっぱりいざ数値で見ると、その強さが再確認できるね……。」

「うん。剣術も魔法もスゴいの一言だね。」

龍児達の戦闘値を見て、そのスゴさに啞然とするなのはの感想に隣で見ていたフェイトも頷く。

それを聞いて、はやては実際に龍児達と戦った自身の守護騎士のシグナムとヴィータの方を見て尋ねる。

「二人はどうやった？龍児さんとセスタさんの強さの程は？」

はやての質問に二人は静かに頷く。

「はい。流石、隊長と言うだけの事はあります。あの剣さばきに咄嗟の判断力と行動力。夜御倉は……かなりの実力者です。悔しいですが……」

「セスタもだ。あいつ……、華奢な体に似合わずギガント重え攻撃してきやがる。戦い方は粗えが、とんでもねえ力持つてるぜ。くっそ……!!!!今思い出ただけで、すげえ悔しい!!!!」

シグナムとヴィータはそれぞれ戦った龍児とセスタの戦い方を話す。二人ともボロボロにされたのが相当悔しかったらしく、その顔は悔しさと執念に満ちていた。

その様子を見てはやては微笑みながら二人に話し掛ける。

「まあまあ、済んでしもうた事を何時までも気にしててもしゃあない。それに、二人ともようやったよ。ご苦労様や。」

「主……。」

「はやて……。」

はやての優しい言葉に慰められ、二人ははやてに感謝し、少し元気

を取り戻す。

すると、はやては小さく溜め息をつき、なのは達を見渡してから話し出す。

「……………さて、これからが本題や。」

「「「「「……………」」」」」

真剣な眼差しでそう告げたはやてに、その場にいるもの全員の視線が行く。

はやては一つモニターを出すと、全員に見えるように調節する。

「……………シグナムから聞いた話によると、模擬戦の最中、龍児さんが腰に付けてあったバッグから黒い本を取り出した……………その本は表紙が黒い以外は、夜天の書そっくりやって、名前も同じ「夜天の書」やった……………。そう言う事で間違いはないな、シグナム。」

「はい。間違いありません、主。確かに夜御倉は黒い本を「夜天の書」と呼んでいました。」

はやてが確認するとシグナムは頷いてそう告げる。

そう、本題とは模擬戦の際に、龍児が取り出したあの黒い表紙の一冊の本・魔術書「夜天の書」についてだ。

「夜天の書」

それは、遙か昔に作られたとされる魔導書。

元々、所有者である主と共に世界を渡り、偉大な魔導師の知識や技術を記録・研究していく為の収集蓄積型のストレージデバイスであったが、歴代の主であった者の何人かが、世界を支配する野望の為に、その能力を改変したため、元々あった旅をする機能が転生機能に、復元機能が無限再生機能に変化。

後に第1級ロストロギア「闇の書」と呼ばれるようになった代物。

そして、10年前に第97管理外世界・現地惑星名称「地球」で起きた「闇の書事件」の核であり、八神はやてが魔法と出会い、かけがえのない家族・初代リインフォースを失うその大元となった代物。

そんな夜天の書は今はやてが持っている。

だが、それと同じ名、同じ作りの色違いの存在が現れた。

その事についてはやて達は話し合うことにしたのである。

「まさか……、夜天の書の複製品とかじゃないよね……
あれだけの代物なら、複製品があってもおかしくないし……
」

まずなのはが龍児の夜天の書について、はやての夜天の書の複製品ではないかと仮説をたてる。

確かに、夜天の書は幾度と無く主を変え、長い時と世界を越えて、今はやての手にある。

その力を欲した者達はその夜天の書を元に同じ物を作った。その「可能性」はある。

だが、それをシグナムは否定した。

「いや、夜天の書には主以外の人間がもしシステムに干渉すれば、持ち主を取り込んで転生する機能があるから、複製など不可能だ。」

「第一、もしそうなら少なからずアタシらが覚えてるぜ。」

シグナムの言葉にヴィータが同意する。

闇の書には、真の持ち主以外の人間がそのシステムにアクセスはできず、無理に干渉すると、主を取り込んで転生する転生機能が備わっていたため、少なくとも闇の書の状態での複写は不可能。

また、もし仮に闇の書になる前に複製されたとしても、守護騎士であるヴィータやシグナム達4人が辛うじて覚えている筈。

もっとも、記憶を消されていればまた別の話ではあるが………

136

兎に角、少なくとも絶大な破壊の力を持っていた闇の書の状態での複製はあり得ないという事である。

すると、フェイトがシグナムに尋ねる。

「ねえシグナム……。龍児さん、夜天の書について他に何か言っただけですか？」

フエイトに龍児から他に何か聞かなかったのか尋ねられ、シグナムは暫く考えると、何か思い出したらしく、ふと話す。

「……………そう言えば……………昨日、夜御倉と昼食を摂っていた時に……………」

遡る事、約24時間程前……………

機動六課の食堂で、偶然シグナムと龍児が共に昼食を食べていたときの事。

「……………そう言えば夜御倉。昨日の模擬戦で私に見せた黒い本だが、一体どうして手に入れたのだ？」

「ん？……………あれか。あれは夜御倉家の家宝で、代々当主になるものが先代から受け継ぐ物だ。俺は先代、第63代当主の母様から受け継いだ。確か……………45代目が手にしてからずっと続いているかな……………。不思議な本なんだよな。本に魔術が当たると、それを吸収して、次の瞬間にはそれがページに書かれているんだ……………」

「……………と話していたな。」

「……………なんか、元々の夜天の書と同じだな、それ。」

シグナムは昨日の会話を思い出しながら話し、それにヴィータは闇の書になる前の夜天の書と同じ力に驚いている。

それを聞いたはやては顎に手を添えて考えると、暫くして呟く。

「どうなっているかは一先ず置いといてや……………。今、私らが気にする事は、その夜天の書、そして、二人の能力をどう説明するかや。」

はやてがそう言うと、全員の顔が一気に強張る。

実を言うと、時空管理局は万年人員不足で貴重なオーバースランク魔導師である者は管理局に属する魔導師の5%未満。

総合的な魔導師ランクがオーバース、しかも龍児に至っては幻のS

SSランクの実力者。

それだけで十分管理局、特に上層部からは格好の標的にされやすい。そこに合わせて、はやての夜天の書と同じ名の本を持っている事。そして何より、なのは達魔導師の使う「魔法」とは異なる力「魔術」を使う事。

この3つのある意味危険な要素を持っている龍児とセスタは、管理局からすれば……まさに「鴨が葱を背負っている」……そんな状態である。

今は民間協力者という事で通してはいるが、何時この事実が上層部に漏れるかはやて達からすれば気が気ではないのだ。

「……で、その肝心のお二人は何処ですか？」

リインがふと、龍児達の居場所をなのはに尋ねると、なのはは時計を見ていう。

「あ、多分この時間なら……」

同時刻・機動六課食堂

「まずは、そこをそう折って……………」

「……?」

「そうそう。それで次は……………」

天気の良い昼下がり。

ここ機動六課の食堂で、龍児とヴィヴィオは椅子に腰掛けている。そのテーブルの上には色とりどりの紙が置かれている。

どうやら、ヴィヴィオに折り紙を教えている。

「……で……………出来た!!」

「お、上手上手 綺麗な鶴だね。」

二人の向かいに座って、分厚い本を読んでいたセスタはヴィヴィオの手の上に乗っている鶴を見て、ヴィヴィオを褒める。

「ああ、初めてにしては良く出来てる。」

ヴィヴィオの隣に座っている龍児も、鶴の出来映えを見て、ヴィヴィオの頭を優しく撫でる。

「えへへえ〜〜。」

頭を撫でられたのが余程嬉しいのか、それとも褒められたのが嬉しいのか、ヴィヴィオは顔を綻ばせ、満面の笑顔を見せ、龍児とセスタも優しく微笑んでいた。

「なんか、凄く和んでない？」

「ええ……。というか、近寄りづらい……。」

「龍児さん達、凄く馴染んでますね。」

「ヴィヴィオも凄く嬉しそう。私も交ざろうかな……。」

そんな光景を通路の影から、FW陣の、スバル、ティアナ、エリオ、キヤロが眺めているのであった。

一方その頃……。

「……失礼します。総隊長。フェイト・L・ムーン2番隊副隊長、および月光院スバル5番隊副隊長が到着しました。」

「……うむ。通せ。」

ここは第77管理外世界・現地名称「リュミエール」。

その世界に存在する国・シャイン王国王都フロアライトに古いお城のような建物がある。

旧王城であり、今は国際平和維持組織「世界国家騎士団」の総本部兼1番隊隊舎がある施設。

その総本部の、町が一望できる大きな部屋に2人の女性が入る。

一人は金色のロングヘアをツインテールにした、翡翠の瞳の美女。もう一人は、青いショートヘアに濃い緑の瞳のまだ幼さが残る可憐な少女。

二人とも龍児とセスタが着る白い服に鎧を着け、左二の腕には長方形の白い板状の物にそれぞれ「2」・「5」と書かれている。

二人はしっかりと足取りで大きな机の前方に立ち、左胸の前に右手の拳を持っていき（イメージ的にTOGの騎士の挨拶のような感じ）、名前を名乗る。

「2番隊副隊長、フェイト・L・ムーン。」

「5番隊副隊長、……月光院スバル。」

「「只今、参上いたしました。」」

二人が挨拶をすると、机を挟んだ反対側の椅子に座る、白髪に赤い瞳の老人が静かに頷く。

「……うむ。二人ともわざわざ来てくれた事、誠に感謝する。……実は、2番隊並びに5番隊に頼みたい事があつての……。」

「頼みたい事……ですか？総隊長。」

フェイト（Ｌ）（便意上、リュミエール側のなのは達には名前の後ろに「Ｌ」を入れる。）は白髪の老人を総隊長と呼び、確認をとる。

「左様。明日お主らには隊を引き連れ・・・・・・・・グリーンマーク王国にある「例の事件」の決戦地に向かって欲しいのじゃ・・・・・・・・。少々気になる事があつての・・・・・・・・頼めるかの？」

「はい。了解しました。」

総隊長はそう言うと二人を交互に見る。

そして、フェイト（Ｌ）とスバル（Ｌ）は声を揃えて、了承するのだった。

そして、ここは何処か別の空間。

辺りを闇が包む中、テーブルの上に置かれた蠟燭が怪しく光を放つ

ている。

そのテーブルの周りには、14人の人影があった。姿は暗くて良くは見えない。

「我らの悲願成就の計画は第2ステップに入りました。」

「ああ、ここまで長かったが……漸く仕込みは済んだ見てえだな。」

「ふふ。漸く本格始動だね。」

「ふふ。そうだね。」

「漸く……ですか。」

「ああ。既に聖王の器は確認した。」

「ええ。確かにおりましたえ……。」

「我らと彼らのバランスは……我らの方が大きい。」

「けっ！んなのはどうでも良いんだよ！！邪魔する奴はじわじわ殺すだけなんだからよ！！！！」

「貴方は少し頭を冷やした方が良いのである。」

「げげっ！げげっ！そうだ。静かにしろ。」

「でも、そんなあなたも素敵……。」

「姉さん……。」

13人の男女がそれぞれ話す中、一人だけ、白い仮面に黄色と白色のドレスを着た者は、ただ静かに呟いた。

「皆。」

その声を聞いた他の人達はその者を見る。

「私達の悲願の成就。必ず果たそう。……」
「大いなる光」と共に……。

「Yes!!!! My Lord!!!!」

「!!!!!!!!」

静かに、だがはっきりと運命は回り始めた。今それぞれの思いが交錯し、世界は……
……混沌に包まれる。

第8話 動き出す運命（後書き）

特別企画・キャラクター交流会

龍児「どうも、好きな事は自然を愛でる事。夜御倉龍児だ。」

セスタ「どうも、好きな事は読書。セスタ・ベルセリオスだよ。」

龍児「というわけで、今回も質問を送りたいと思う。是非考えてほしい。」

セスタ「まずはオイラから、ユーノに！！・・・オイラ達の使う魔術について、魔法とどんな違いがあると思いますか？また、魔術を習得したいですか？理由つきでお願いします。」

龍児「次は俺か・・・俺からは一護さんに・・・
・今まで戦ってきた中で一番強いと思ったのは誰ですか？理由つきでお願いします。」

セスタ「最後は、ナーノに・・・良く曲に合わせて踊ったりしているけど、一番踊りやすい曲は何ですか？理由つきでね。」

龍児「今回は割りとおっさり目な質問だけど、是非答えてほしい。」

あと、ユーノとなのは。スーツとウェディングドレスだが、今6割りぐらいは出来ている。後ブーケも用意してあるから、きちんと結婚しろよ。応援してるからな。」

セスタ「では、今回は坂本真綾さんの「ループ」でお別れです。ではまた」

第9話 浮かぶ疑惑（前書き）

今回もなのは達が中心です。

ではどうでしょう。

第9話 浮かぶ疑惑

模擬戦から1週間が過ぎた、ある日の昼下がりに。

ここは時空管理局、機動六課の屋上。

潮の香りがする海風が優しく吹くそこに二人の人影があった。

「う~~~~ん。今日も潮風が気持ち良いね~~~~。やっぱり風通しが良い場所は最高だよ。」

「ああ、そうだな。ここならゆっくりと煙管が吸える。~~~~。
・ふうー!。」

海風を全身に受け、バルコニーにあるような椅子に座ってくつろぐセスタと、その傍の柵に軽く手を置いてもたれ掛かり、銀と蒼の装飾が施された煙管を吸っている龍児。

二人は六課の屋上でくつろいでいる。

「ふあ~~~~。にしても~~~~。あんな朝早くからの訓練は流石に参ったよね~~~~。FWの皆がスゴいよ~~~~。」

「おいおい……あの時間から起きているくらい平気だろ……
……騎士学校の早朝訓練や、騎士団の3ヶ月に1回やる朝4時
からの合同訓練会とか、嫌って程経験しただろ。」

背伸びをし、欠伸をかきながら六課の早朝訓練について感想を述べ
るセスタに、龍児は煙管をくわえながらセスタに呆れた感じの声で
話す。

それを聞いたセスタは、龍児の方を見て言う。

「そりゃあ相棒やフレンはいいよ。朝早くから剣や魔術の自主練を
してるから!! オイラは遅くまで調べものとか読書とかしてるから
朝は苦手なんだよ!!!」

「自慢して言う事が、それ?」

恨めしそうな目で龍児を睨むセスタに、龍児は小さくため息をつき
ながらセスタに言う。

更に、龍児は続けて言う。

「それに、お前の調べものって言ったら、大概はハロルドの研究の
手伝い関係だろ。読書に至っても、そう言う関連ばっかだし……
……。全く……。いくら姉の為とはいえ、ハロルドに良いよう
に使われ過ぎじゃないか?」

「いいんだよ!! 確かに姉さんのあの破天荒振りにはオイラも驚い

ているけど、姉さんは天才科学者なんだよ。グランマニエの専属科学者として色々忙しいし、せめて、オイラが姉さんを支えないと……。」

龍児の発言に、セスタは反論し、自身の姉であるハロルドを自分が支えると言い切る。

それを聞いていた龍児は暫くセスタを見ているが、また小さく溜め息をつくくと、空を見上げ静かな声で言う。

「はあ……。やれやれ。自分が支える……か。龍真と同じ事を言いやがって……。でも、それだけ、自分の姉を……。ハロルド・ベルセリオスを大切にしているんだな、セスタ……。ハロルドの奴も、いい弟を持つて幸せ者だな……。」

「それは相棒も……。でしょ。」

「ふっ……。」

ハロルドが幸せ者だと言う龍児に、セスタが微笑みながらそう言うのと、龍児は煙管を一回吸うと、空に向かって煙を吐き出してから、微笑する。

その表情は、何処か嬉しそうな顔をしていたのだった。

一方、部隊長室では……。

「……以上が、無限書庫にあつたリュミエールについて判明した事だよ。」

「おおきに。わざわざ来てくれてありがとな、ユーノ君。」

椅子に座っているはやては、目の前にいる金髪に翡翠の瞳、そして眼鏡をかけた青年、ユーノ・スクライヤ無限書庫司書長にお礼を述べる。

実はこの1週間、はやては自分やなのは、フェイトの親友であるユーノに龍児とセスタの出身世界・第77管理外世界リュミエールの事についていろいろと調べてもらっていたのである。

勿論、その世界の住人である龍児やセスタにもある程度は聞いていたが、下手に聞き過ぎると不審に思われる可能性がある。

そこで、管理局のデータベースである無限書庫。

あそこなら、リュミエールの事を少しでも知る事が出来ると考えたはやては司書長であるユーノに情報を集めてもらっていたのだ。

「はぁ……………しかし、なんや不思議な世界やな、リュミエール
つて……………」

はやては溜め息をつくど、ユーノから受け取ったリュミエールに関
する資料を一枚一枚確認する。

「第77管理外世界、現地名称・リュミエール。総合文化レベルは
C、魔法文化レベルはA。……………多くの自然と豊かな
土地があり、世界にある国の多くは王制国家。科学技術に関しては
緩やかな発展段階。世界全体的に緩やかな世界の成長を望む声が多
い。……………ミッドや地球と正反対な世
界やな……………」

「うん。それに、この世界樹って名前の樹。神話なんかで出てくる
けど、実際にあるみたいだね……………」

「それだけじゃないよ。この世界の生物……………
……………魔物やモンスターがいるって、ファンタジーみたいだよ。」

資料を見ながら、はやて、なのは、フェイトが順にリュミエールに
ついでに感想を述べる。

そこにユーノが補足を加える。

「さらに言えば、僕達が使う魔法とは異質な力があるみたいだよ。．．．．．確か、「魔術」って現地では言うみたいだね。どういうメカニズムなのは、詳しく書かれていないけど．．．．．あと、世界国家騎士団についても書かれていたよ。昔に起きた世界的な戦争の終結後に設立された国際的な組織で、「世界国家騎士団活動規約」っていう、僕達の管理局法に似た法と国際法で活動してるみたい。．．．．．にしても、この世界の情報、どうしてこんなにあるのかな？」

「それってどういう事、ユーノ君。」

ユーノの言葉になのはが質問する。
するとユーノは調べていて気づいたことを話す。

「管理世界の事なら、沢山の情報があっても不思議じゃないけど．．．．．管理外世界、特に77番目のこの世界だけ、他の管理外世界よりやたらと詳しく書いてあるんだよ。しかも、調べている時にちょっと気になる事があつたんだ．．．．．」

数日前……。

本局にある無限書庫で、ユーノはリュミエールについて調べていた。するとその時、丁度管理局の航空隊の将校が無限書庫に来ていたらしく、ユーノに話しかけた。

『……おや、これはスクライヤ司書長。随分熱心に調べているようだね。』

『あつ、これは少将。はい、知り合いから頼まれてまして、今リュミエールと言う世界の事について色々と……。』

『何!?!?』

リュミエールについて調べていると話したユーノにその将校は一瞬顔色を変え、ユーノにこう言った。

『……悪い事は言わない。その世界には関わらない方がいい。……その世界は……。……我ら時空管理局、いや次元世界全体を脅かす危険性がある。君はまだ若い……。無駄に命を危険には晒さない方がいい。では私はこれで……。』

「……って言われたんだ。」

なのは達にその時の事を話すと、なのは達は互いの顔を見て、難しい顔をする。

「……どういう事？」

「リュミエールが………管理局や次元世界を脅かす？」

「………よう分からんな……。第一、もしそうなら何らかのデータがある筈や。なのに、一切そんなもんはないで？」

なのは、フェイト、そしてはやてはその将校が言った事の意味が分からない様子でいる。

確かに、もしその将校の言う通りであるなら、はやて達が預言について調べた時に気づく筈である。

だが、そんな記録が残っている文献やデータは一切見つかっていない。

なら何故、その将校がそのような事を言ったのか。はやて達はその

意図が全く分からないでいる。

「……確か、「凄惨たる古の戦乱 永き因縁に幕引くべく
光の大地より龍魂の術騎士が現れん」……だっけ。騎士カリム
の預言の冒頭は……。」

思考に沈むなのは達にはユーノはカリムの預言の冒頭部分を言い、な
のは達に確認する。

それになのは達は頷く。

「それで、スカリエッティは75年前のあの惨劇の罪を管理局は償
うと言った……。そして、龍児さんとセスタさんは特命でこ
の世界に来た……。仮に、何だけどさ……。75年前の惨
劇と凄惨たる古の戦乱が、龍児さん達がこの世界に来た理由で、7
5年前に管理局とリュミエールの間で戦争が起きた……。て
いうのはどうかな？」

ユーノの仮説になのは達は目を見開き驚く。

もし仮にユーノの仮説が正しいのであれば、リュミエールにとって
自分達時空管理局は完璧な「敵」であり、憎まれる対象であるとい
う事になる。

つまり、また戦争が起きる可能性があるのだ。

戦争と言うものは、どんな些細な事でも、口実があれば何時どんな

時にも起きてしまうものであるからだ。

だが、なのは達はそれを信じたくなかった。

「……違うよ。もしそうなら、龍児さん達があんな態度で私達に接したりしないよ。」

そう、この1週間。龍児とセスタは六課の隊舎でなのは達と同じ屋根の下で過ごしていた。

その間、なのは達への龍児達の態度は憎しみや恨みを持っているとは全然思えない態度だったのだ。

早朝の訓練には、FWと一緒に訓練に参加し、食事の時はなのは達と楽しく談笑。

よくヴィヴィオの遊び相手になったり、FWの訓練のアドバイスをしたり、自主練に付き合ったりと、どちらかと言えば、なのは達に友好的に接しているのだ。

そんな龍児達がなのは達を憎んでいる。

そのような事、なのはは思いたくなかったのである。

「うん。私も、龍児さん達はそんな事を思っていない。」

「……せやな。私等への態度は、そんな風なもんやない。」

なのはの意見に共感を持ったらしく、フェイトとはやてはなのはに
続いて言う。

龍児とセスタは私達を憎んでいない。

3人は揃ってそう言う意思表示をしたのだ。

そんな3人を見て、ユーノは啞然とするが、くすすつと小さく微笑み言う。

「くすすつ……。相変わらずだね、なのは達は……。なのは達がそう言うんなら、僕も信じるよ、その龍児さん達を……。」

「うん。ありがとう、ユーノ君。」

「あ、いや……／＼／＼／＼／」

ユーノの龍児達を信じると言う言葉になのはは頬を赤く染めて微笑む。

その可憐な笑顔にユーノは顔を真っ赤にして俯く。頭からは少し湯気が出ている。

「（……………相変わらず、友達以上恋人未満だね。なのはとユーノは……………）」

「（せやな……………ちゃんと進展するんやろか？）」

そんな二人のやり取りを、フェイトとはやては念話をしながら少し呆れ顔で見ているのであった。

「……………どうもごめんやす。お呼びでっしやるか、陛下。」

163

とある空間。黒いドレスを着た黒髪の女性は、窓の外を見る白と黄色のドレスを着た銀髪のロングヘアの白い仮面の女性に話しかける。

すると女性は、黒髪の女性を見て告げる。

「……………これから、行ってきて欲しい所があるの。これからの計画のために…………。」

「行ってきて欲しい所……………どすえ？」

「……………そう。彼を……………迎えに行つて欲しいの……………
アルハザード
「失われた都」の技術を持つ、

彼を……………」

「…………了解致しました。一緒に彼女も連れて行って宜しいのですか？」

「うん。その方が……………彼が私達につきやすくなる……………」

「はい。ではごめんやす……………」

黒髪の女性は軽くお辞儀をすると、踵を返し静かに去っていく。

「…………そう。アルハザード……………。彼らはそう呼ぶようだけど……………本当の名前は……………」

銀髪の女性は窓の外を再び見る。

そこには、様々な光が渦巻いていた。

第9話 浮かぶ疑惑（後書き）

特別企画・キャラクター交流会

龍児「どうも、尊敬する人は総隊長。夜御倉龍児です。」

セスタ「やつほ〜。尊敬する人は、オイラの姉さん。セスタ・ベルセリオスだよ。」

フェイト（L）「こんばんわ。尊敬する人はお母さん。フェイト・L・ムーンです。」

スバル（L）「どうも……。尊敬する人は……。私の先生。月光院スバル……です。」

龍児「私共からの企画は今回で4回目になりますが、互いに文化交流が出来て、色タインスピレーションが掻き立てられると龍元は喜んでいきます。」

セスタ「確かにねえ。こうやって交流するのが楽しくて、作品が早く書けるから物語が早く進むね。……。と言う訳で、例により、今回もまた質問をしちゃいます。」

フェイト（L）「まずは私からなのはへ。同じ女性で、婚約した身だから改めて聞くけど、ユーノのどんな所が好きになったの？……。因みに私は、龍児のクールで優しい所が大好き。」

龍児「……／＼／＼。ごっほん。つ、次いくぞ。次は俺から重要大事様へ。コラボ企画ありがとうございます。コラボに先駆けて、リュミエールについて知りたい事はありますか？出来る範囲でお答えします。」

スバル（Ｌ）「最後は私から……です。私は、ナーノさんに……。その……、今までの戦いや修行で、一番死にかけた時はどんな時ですか？……あと……、よかつたら、この唐揚げ弁当……。私が……作りました。た、食べて欲しいです／＼／＼／＼」

セスタ「……ス、スバル（Ｌ）？大丈夫？顔赤いけど……。」

龍児「……ありゃあ、惚れたな……。ナーノに。」

フェイト（Ｌ）「みたいだね。……後、１週間でドレスとスーツが完成します。楽しみにしてください。では、今回は坂本真綾さんの「風待ちジェット」でお別れです。それでは、ごきげんよう。」

用語集（リユミエール編）（前書き）

用語集です。

こちらにも随時更新します。

用語集（リュミエール編）

・リュミエール

時空管理局からの正式名称：

第77管理外世界・現地名称「リュミエール」

総合文化レベル：C

魔法文化レベル：A

龍児とセスタの出身世界。

緑豊かな大地と蒼く澄み渡った海、そして青々とした若葉を纏った世界樹（母なる大樹とも呼ばれる）が存在する。

現在100近い国々が存在し、中でも「桜華国」・「アクナビート共和国」・「シャイン王国」・「グリーンマーク王国」・「フレア連邦共和国」は5大国と呼ばれ、政治・経済・文化的に発展し、国民の生活水準も高い。（といってもミッドや地球程ではない。）

世界の気候は独特で、桜華国とその周辺では桜が開花しやすい環境であり、一方アクナビートやフレアでは温暖な環境、シャイン王国では寒冷と春夏秋冬、四季折々の気候がみられる。

理由は現段階では不明だが、一部の上層部の局員から要注意世界として認識されている。

・世界国家騎士団

第77管理外世界「リュミエール」を守護する国際平和維持組織。

元々は320年前に勃発し、20年間に渡り繰り広げられた第1次世界戦争の終結後に組織された「国際青年騎士団」通称・国際騎士団だったが、今からおよそ150年前に騎士団改編を行った際に名称も変更したことで生まれた。

昔は1番隊から20番隊までであったが、改編やとある事件などにより、現在は1番隊から11番隊までの計11部隊によって構成されている。また、「BLEACH」の護廷十三隊と同様に各隊毎に特色と隊章を持つ。

世界国家騎士団全体としての団旗は剣と双翼をモチーフにしており、「世界の守護と飛躍」を意味する。それぞれの意味としては、剣の上に描かれた円は世界、剣は騎士と守護、双翼が飛躍を象徴している。

また隊によつては、専門の部署や部隊と協力関係にある場合がある。

入団するには1つの必須項目と2つの入団条件を満たす必要がある。必須項目は、必ず国家騎士証と言う騎士に関する資格を持っている事。

入団条件は2つの内どちらか一方を満たす必要がある。

1・年に1度開かれる入団試験で合格する事。

2・リュミエール11ヶ所に置かれている騎士学校での8年分の力リキュラムを全て修了した上、卒業最終試験で1000点満点中850点以上で合格する事。(卒業認可点数は700点以上。)

そして、時空管理局における管理局法にあたる「世界国家騎士団活動規約」（通称・騎士団規約）と言われる条文があり、中でも、「自由」・「平等」・「共存」・「繋がり」の4つを4大原理と呼んでいる。

ただし、時空管理局のように独自に司法機関を有しているわけではなく、はたまた国際裁判所に従属しているわけでもない。あくまで国際法と騎士団規約に基づき活動する完全独立執行部隊としての色合いが濃い。

〔各隊隊長、隊章及び協力部署、拠点場所〕

1 番隊

隊長：????（????）

隊章：大樹

協力部署：無し

拠点場所：

シャイン王国・王都フロアライト

2 番隊

隊長：夜御倉龍児（23）

隊章：龍

協力部署：世界樹教会

拠点場所：

桜華国・首都ソメイ

3 番隊

隊長：???? (???)

隊章：闇

協力部署：隠密機動部隊

拠点場所：

フレア連邦共和国・首都イフリート

4 番隊

隊長：???? (???)

隊章：光

協力部署：世界樹総合救急センター

拠点場所：

グリーンマーク王国・王都シード

5 番隊

隊長：セスタ・ベルセリオス (23)

隊章：風

協力部署：情報統括局

拠点場所：

グランマニエ皇国・首都ユリス

6 番隊

隊長：???? (???)

隊章：水

協力部署：無し

拠点場所：

アクナビート共国・首都マリーナ

7 番隊

隊長：???? (???)

隊章：地

協力部署：無し

拠点場所：

ガルバンゾ王国・王都シデス

8 番隊

隊長：???? (???)

隊章：雷

協力部署：無し

拠点場所：

ガリア皇国・首都ベルセルク

9 番隊

隊長：???? (???)

隊章：氷

協力部署：古代遺物保全局

拠点場所：

カルト国・首都フリーレン

10 番隊

隊長：???? (???)

隊章：無

協力部署：科学技術研究所

拠点場所：

銀狼国・首都アイゼン

11番隊

隊長：????（????）

隊章：火

協力部署：無し

拠点場所：

倭国・首都京

・世界国家騎士団活動規約

世界国家騎士団のあり方と制度を示した条文。時空管理局における管理局法に近いもの。通称・騎士団規約。

第1条から第100条まであり、中でも第2条から第10条、第11条から第40条、第41条から第57条、第58条から第70条は騎士団における4大原理（自由・平等・共存・繋がり）と呼ばれる内容が書かれている。

4 大原理

自由：（第2条より）

全ての生命は自らの意思で選択・行動する権利を有し、また常に己のする事に責任を有する。

平等：（第11条より）

全ての生命は母なる世界樹より生まれ、育まれしもの。故に、全ての生命は等しく世界樹と世界の子であり、何人たりともそれを否定する事は許されない。

共存：（第41条より）

世界樹の恩恵は全ての生命に与えられ、生命もまた世界樹と共に生きてきた。

故に人々は他の生命及び世界と調和を成しながら共に生きなければならぬ。

繋がり：（第58条より）

全ての生命は他の命と心身共に交わり繋がる事で繁栄を続けてきた。それは決して消える事無く、過去・現在・未来へと永久に続く生命の営みである。

龍児達の世界で使われている術。

世界樹より供給されている生命の根源である「マナ」と人々の魔力によって使用できる。

その発動には「特定の術式詠唱」と「魔力によるマナへの干渉と術式の作用」の2段階のプロセスを経る必要がある。

なのは達の魔法と違い、超自然的な力を持つとされている。

また、魔術には全て11種類の「属性」と9種類の「系統」が存在する。

〔属性〕

火・水・風・地・雷・氷・光・闇・無・龍・大樹

〔系統〕

攻撃：相手にダメージを与える

殲滅：広域の相手を滅ぼす

砲撃：長距離にいる相手を倒す

防御：攻撃から身を守る

捕縛：相手を拘束する

治癒：傷や痛みを治す

強化：対象の能力を強化する

儀式：召喚や呪殺を行う

特殊：自然に干渉する

また、詠唱には大きく分けて5種類の方法がある。

〔通常詠唱〕：

口で詠唱しながら念じる詠唱法。

魔力消費・普通

詠唱時間・標準

〔高速詠唱〕：

高速で詠唱する事で、掛かる時間を短縮する詠唱法。

魔力消費・1.5倍

詠唱時間・3分の1～半分

〔暗黙詠唱〕：

頭で詠唱を行う詠唱法。

魔力消費・1.5倍

詠唱時間・標準

〔二重詠唱〕：

異なる2種類以上の魔術を同時に詠唱する詠唱法。

魔力消費・通常

詠唱時間・1.5倍～1.8倍

〔詠唱破棄〕：

詠唱を破棄して発動する方法。

魔力消費・半分〜3分の2
詠唱時間・無し

・特殊能力

別名・魔力能力

リュミエールにおいて、魔力自体に存在する能力の事。

そもそもリュミエールにおける「魔力」とは、大気や食物から生命はマナを体内に取り込み、そして、取り込まれたマナが体内で生命維持のエネルギーとして消費される際に、稀に生命維持のエネルギーとは別のエネルギーが生成される。このエネルギーを一般的に魔力と言い、さらにごく稀に能力が付加されている場合がある。これが、特殊能力と呼ばれるものである。

どのように能力を持つのかは不明だが、一部の学者は、精霊の加護を受けた為ではないかと仮説を立てている。

第10話 訓練・龍児VSFW（前編）（前書き）

今回は龍児VSFWの模擬戦前半です。

では、ごきげん。。。

第10話 訓練・龍児VSFW（前編）

朝日が差し込む早朝。

機動六課の海上訓練場でなのはによる六課前線部隊FWの教導訓練が行われている。

「ほらみんな。あと、5分で残り30体のガジェットを倒してね。」

「「「はい！！」「」「」

「キユク〜！！」

なのはの声に、バリアジャケット姿でバーチャルのガジェット・ドローンを追い掛けるFW4人とキャロの飛竜フリードリヒは元気に返事をする。

いつも六課の風景だ。

それをなのはの隣で見る龍児は、FWの様子をじっくり眺めている。

「……………やっぱり良い動きをするなあ……………おまけに各々自分の役目をしっかり全うしている。ティアナは敵の状況を把握し、スバル達に的確な指示を……………。スバルとエリオは高い機動力と一撃クラスのパワーで切り込み。キャロは補助系の魔法と竜で支援……………。全体的に良いバランスがとれている。」

そんな龍児の発言と姿勢を見てなのはは静かに思う。

「（・・・なんか、とても私達より4歳年上の人とは思えない・・・。スゴく大人で凛々しいなあ・・・。）」

なのはは龍児の大人な感じに驚いていた。

確かに、龍児の言動や態度はとても大人で紳士的で凛々しい。これでなのはやフェイト、はやてより4つも年上の23歳とはとても思えない雰囲気醸し出しているのだから、なのはがそう思うのも無理はない。

「（おまけに、私達にとっても親切にしてくれる。・・・）
・・・うん。龍児さんやセスタさんが私達を恨んでいる訳無い。きっと、犯罪組織を追ってきたんだよ。」

同時に、昨日のユーノの仮説を思い出したが、その時と同じように龍児達は憎んでいないと自分に言い聞かせるのは。

そんななのはに龍児は話し掛ける。

「おっ、FWのみんな全部倒したみたいだな。」

「えっ！あ、ほんとだ。」

龍児に言われてなのは下の様子を見る。

すると、丁度FWがガジェットを全部倒していた。

「下に行こう。最後の締めがあるんだろ。」

「あっ、ちょっと待ってください。というより、ビルから飛び降りないで下さいよぉ〜〜！！！！！！」

勢い良くビルから飛び降りる龍児に、なのはは啞然とし、心の叫びをあげたのだった。

「はい、皆。一回集まって。」

「」「」「はい！」「」「」

広い通りに集合するFW一同。

相当激しかったのか、全員バリアジャケットの至る所に土埃が付き、息は少し乱れている。

そんな彼女らの前になのはと龍児が立ち、4人に話し掛ける。

「今日は少しハードだったかな？」

「息の乱れ様からそれなりに厳しかったのは明白だな。まあ、あれだけ動き回っていたら仕方ないが……。」

二人はFWの様子を見て、訓練内容のキツさを再確認する。

「それじゃあ今日の早朝訓練最後の一本行こうか。」

なのはの一言にFWの4人は身を引き締め、龍児は苦笑いする。なのはの教導訓練の最後の締めに行われるのが、実践型の模擬戦。大体、相手はなのはやヴィータだったりするのだが、今日はどうやらいつもと違うようだ。

なぜなら、なのはがバリアジャケットを身に纏っていないのである。いつもなら、訓練終盤にはバリアジャケットを身に纏い、模擬戦の

準備をするのだが、今日に限っては教導隊の制服を着たままである。

「なのはさん。今日はなのはさんがやるんじゃないんですか？」

それにスバルは疑問を持ち、なのはに話し掛ける。
すると、なのはは首を縦に振り、話す。

「うん。今日は特別に………龍児さんにお
願いしようと思ってね。」

「俺がか……。」

なのはは龍児を見て言い、龍児はそれに静かに驚く。
そんな龍児になのは頭を下げる。

「龍児さん。FWの皆と模擬戦をしてくれませんか？」

なのはの頼みに龍児は暫く考えるが、微笑みながら答える。

「ああ。分かった。………FWの皆。今日は
俺が相手をする。手加減は出来ないから本気で来い。」

「……あつ、はい！……！」

通りの真ん中で、龍児とFW4人は武器とデバイスを構える。

「それじゃあ、先にFWか龍児さんのどちらかが全滅したらそこで終了。それじゃあ……レディー……ゴオオ！
！！！！！！」

なのははルールを説明した後、模擬戦の開始を告げた。

「先手必勝。蒼破刃！！さらに、蒼破追蓮！！！！」

その合図と同時に龍児は龍王牙を横に勢い良く降り、刀身から蒼色の衝撃波を一発、更にその後から二発放つ。

「させない！！はああああ！！！！！！」

「やあああああ！！！！！！」

その衝撃波をスバルとエリオはリボルバーナックルとストラダーで弾く。

だが、そこに龍児が一気に間合いを詰め、斬り掛かる。

「行くぞ!!!はあああ!!!」

スバル達に向かって斬り掛かるが、咄嗟にティアナの拡散の指示で全員逃れる。

そこに、スバルが殴り掛かる。

「うおおおお!!!」

「いいだろう。来い!!!!」

スバルは強烈な右ストレートを龍児にぶつけるが、龍王牙で受け止められる。

更にスバルは、自身の得意なストライクアーツで殴りや蹴りを龍児に繰り出すが、当の龍児も龍王牙で受け止める、または受け流し、スバルに斬り込む。

「はあああ!!!虎牙破斬!!!虎牙連斬!!!!猛虎連撃破!!!
!!!!!!」

「うっ!!」

龍児の隙の無い連続斬りにスバルは防御魔法を張って凌ごうとするが、予想以上の正確さに防御が弱くなっていく。

だがそこに、エリオが猛スピードで近づき、龍児の背後にまわる。

「はああああ!!!!」

そしてストラダを高く持ち上げ、龍児目掛けて振り下ろす。

刃筋はしっかりと龍児を捉えており、おまけに龍児はまだ気付いていない。これが当たれば間違いなく大ダメージを与えられる、まさに絶好の機会。

しかし、そんな簡単に攻撃を許す龍児ではない。

エリオの攻撃を察知したように、龍児は腰に差してあるもう一振りの刀を抜き、エリオのストラダを受け止める。

「えっ!?!」

「嘘っ!?!」

エリオとスバルはその行動に驚いていた。背後にまわったエリオは、龍児からすれば確実に死角に入っている。おまけに、龍児自身は目の前のスバルへの攻撃で背後まで気がまわらない筈。

それなのに、龍児は容易くエリオの攻撃を片手に持った刀で受け止めたのだから、二人が驚くのも無理はない。

するとそこに、ティアナとフリードに乗ったキャロが攻撃を仕掛ける。

「二人とも下がりなさい!! クロスファイアー……………」
「……シュート!!!!!!」

「フリード、ブラストレイ!!!!!!」

スバルとエリオが一旦離れると二人は龍児を攻撃する。

龍児はそれを見て、バックステップで後ろに下がって攻撃を回避する。そのステップも無駄な動きはなく、軽快に下がっていく。

4人は次の攻撃に備え、いつでも動ける体勢をとる。

すると龍児は先程抜いた刀を鞘に納めると小さく深呼吸をする。

「すう……………はあ……………。いや、驚いた。今のはなかなか

かの連携だった。まさかもう一本を抜かないといけなくなるとは・・・いい動きをするし、よく鍛えられている。」

龍児はスバル達FWの実力の高さを改めて評価する。

動きの切れの良さや連携などを客観的に見て判断している。

「伊達にFWやってませんから。」

「なのはさんや隊長達に毎日鍛えられているので、これくらい出来ないといけません。」

「そうです。」

「はい。」

それにスバル達は生き生きした顔で答える。

彼女達の表情を見て、龍児は小さく微笑むと、足元に白い魔法陣を展開し、魔術の詠唱体勢に入る。

それを見たスバル達は動き出す。

「詠唱中は動けない筈だから、スバルとエリオは一気に詰めて詠唱の妨害。キャロは二人を援護。念のためにあまり固まらずに。」

「任せて!!!ウィングロード!!!」

「はい！！はああああ！！」

「分かりました！！」

ティアナの指示でスバルとエリオは龍児に向かい、キャロは魔法陣を展開し二人の援護をする。

「猛きその身に、力を与える祈りの光を。ブーストアップ・ストライクパワー！！！！」

キャロが魔法を発動させると、スバルとエリオのデバイスに光が纏い、二人は一気に間合いを詰める。

「うおおおおお！！！！」

「たあああああ！！！！」

未だ詠唱を続ける龍児。片手で二人の攻撃を受け止める事は難しい。倒せなくても、ダメージを負わせる事が出来れば……。そう思い、二人は拳と槍をぶつける。

だが、その攻撃は防がれた。
しかも二人とも……。

「「えっ!?!」」

「「嘘!?!」」

スバル達はその光景を見て驚いている。

何故なら、龍児の前に突然透明の波立つバリアのようなものが現れたからだ。

それがスバルとエリオの攻撃を防いでいたのだ。

「いつの間にこんなバリアを……。」

エリオは先程まで無かったバリアに驚き、龍児に尋ねる。
すると龍児は微笑み答える。

「何。二重詠唱と暗黙詠唱を使って発動させたからだ。」

「二重詠唱に暗黙詠唱?」

龍児の答えにスバルは首を傾げる。
すると、龍児は冷静に答える。

「俺の世界での魔術は、その殆ど全てが「特定の言霊による詠唱」と「魔力によるマナへの干渉と術式作用」の二段階のプロセスを行う事で発動する事が出来る。ただしその際、詠唱による時間のロスや隙が出来る。そこで編み出されたのが、2つ以上の異なる魔術を詠唱する「二重詠唱」と、念に込める事で口で詠唱しなくても魔術を発動出来る「暗黙詠唱」の2つだ。あと他にも「詠唱破棄」や「高速詠唱」があるが、いずれにしてもそれを行するのに多くの魔力を消費する上、威力や効果が通常時の3分の2から最大で8分の1まで減少するから余程の事が無い限り、使おうとはしないが……。今回は多数相手にやるから、丁度良いつて訳だ。」

龍児は説明すると、足元の魔法陣を再度展開する。その光は白から黒に変わる。

「歪められし扉、今ここに開かれん。ネガティブゲイト!!！」

詠唱が完了すると、スバルとエリオの頭上の空間が徐々に歪み始める。

「!?!二人とも引いて!!!!!!」

ティアナの叫びに二人は素早く応じ、龍児から一回離れる。

するとその直後、歪んだ空間が黒く染まり直径3メートル程の蠢く真つ黒な球体が現れる。

それは数秒間居続け、静かに消滅していった。

「…………ふむ。なかなかの判断力だ。なら、これはどうかかな？…………蒼溟たる波涛よ、戦禍となりて厄を呑み込め。タイダルウェイブ！！！！」

龍児はティアナの判断能力を確認すると、蒼色の魔法陣を展開し、水属性攻撃系魔法「タイダルウェイブ」を放つ。すると、ティアナ達の足元が水に溢れ、渦潮が発生する。

辛うじてスバル達はビルの上に避難したが、少し巻き込まれたようでダメージを受けていた。

「はあ……びつくりした。」

「ええ…………まさか渦潮を起こすなんて…………魔術って何でもありなの？」

ティアナは魔術の起こす現象に疑問を抱く。

確かに、バリアを張るぐらいなら魔法でも簡単であるが、空間を歪めたり、渦潮を起こしたりと魔法の出来る範囲を逸脱している。

そう、まるで魔術が魔法より優れているかのように…………。

その様子を見ていた龍児は静かに近づき答える。

「はははっ。魔術にだってやれる事に限度はある。そもそも、「魔術」はこの世に存在する非物質エネルギーであるマナを用いて、自然界の現象を起こせるようにしたのが始まりだ。故に、自然界の理を破る事が出来ない。おまけにマナがなければ使用すら出来ない。まあ、ミッドにはマナがあるから魔術が使えるんだがな……」

龍児が龍王牙を担いで説明すると、キャラコがそれに疑問を持つ。

「マナ……ですか？そのようなもの、初めて聞きました。」

「なに！？この世界には世界樹があるんじゃないのか？」

「世界樹？異世界の神話に出てくる樹の事ですよ。いいえ、そのようなものはミッドにはありません。」

キャラコとエリオの言葉に龍児は啞然とする。

実は、龍児達の「魔術」は世界樹と呼ばれる巨大な樹から供給される、全ての生命の根源である非物質エネルギー・「マナ」に人の魔力を通して術式を作用させる事で発動する力であり、自然の理に影響された超自然的性質を持つ。つまり、なのは達が使うプログラムのような超科学的な性質が強い「魔法」とは性質的にも形式的にも

全く異なる代物であるのだ。

閑話休題

龍児はスバル達から聞いた事を受けて、少し考えている。

「（……………どういう事だ。何故世界樹の無い世界にマナがあるんだ？マナは世界樹の恵み。だが、この世界には、微量であるがマナがある。一体これは……………。）」
「うおおおおお！！！！！！……………って、くっ！！？」

龍児が考えている隙をついたのか、スバルはリボルバーナックルで龍児を攻撃する。

しかし、龍児は咄嗟に後ろに下がり攻撃を紙一重にかわす。だが、その横からエリオがストライダーで一気に近づき攻撃する。

「はあああああ！！！！！！」

「くっ！！！！」

龍王牙でエリオの一突きを受け流し、エリオと鏝ぜり状態になる。
そこへ、ティアナが魔力弾を数発撃ち込み、キャロがフリードに指
示し、炎を放つ。

「クロスファイアー……、シュー……ト……!!!!」

「フリード、ブラストレイ……!!」

「何!? かはっ……!!」

流石の龍児も4人の連続攻撃に晒された為、バランスを崩し、数メ
ートル吹き飛ばされる。

だが、空中でバランスを立て直しうまく着地する。

「くっ!! はぁ……はぁ……はぁ……油断した。やっぱり多
人数相手は少しばかりキツイか……。仕方ない。足止めで
もするか……。」

そう言うと龍児は再び詠唱体勢に入る。

「……我を取り巻く六つの星よ万物を阻む光の盾となれ。バリ
アブルヘキサ……!!」

龍児の周りに6色に輝く光が現れ、盾のように龍児を取り囲む。

すると更に、白色の魔法陣を展開し、詠唱を始める。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。落ちよ、石化の槍。ミストリティン！！！！」

龍児がそう言うと、空から数発の槍状の光が降り注ぐ。

スバル達はそれを必死に避けるが、刺さった所からどんどん石化が起こつていき、一同は困惑する。それを見計らつて、龍児はエリオに向かい、斬り掛かる。

「はあああああ！！」

「くっ！？しまっ……。」

龍王牙を上手く使い、ストラダを巻き上げ、エリオの後方に飛ばす。

飛ばされたストラダは地面に勢い良く突き刺さり、乾いた音が響き渡る。

龍児は剣先をエリオの喉元に突き立て、降伏を促す。

「どつする？まだやるか？」

「……………ま、参りました。」

龍児の冷たい視線を受けすっかりやられたのか、エリオは参った顔をして、自身の負けを認めたのだった。

訓練・龍児VSFW（後編）に続く。

第10話 訓練・龍児VSFW（前編）（後書き）

特別企画・キャラクター交流会・第5弾

BGM「Catch you Catch me」byグミ

フェイト（L）「どうも、2番隊副隊長のフェイト・L・ムーンです。」

スバル（L）「こんばんわ、……………5番隊副隊長の、月光院スバルです。」

フェイト「今回で交流会も5回目を迎えた訳なのですが、今回はいつもと違い、重要大事様、ならびにユーノ・スクライヤ様、高町なのは様に重大報告をさせていただきます。」

スバル「では、発表します……………
・実は、ユーノ様となのは様専用にあ案・製作してました結婚式の衣装ですが……………
この度、漸く完成いたしました!!!!!!」

フェイト（L）「本来であれば、完成画をお見せしたいところなんです、あいにく、作者である龍元は絵が描けないと言う事なので、どういったものであるか、詳しく説明させていただきます……………
……………まずは、ユーノ・スクライヤ様のタキシードについて。ま

ず、タキシードに白色の伸縮性に優れた生地で作られています。全体のイメージとしては、「劇場版カードキャプターさくら 封印されたカード」にてお芝居で小狼が着ていた衣装の上着の背中の裾が膝裏まで長い感じですよ。さらに、龍児様が施した魔術により、3割程度軽くなっています。胸ポケットには白いバラをあしらひ、上着には桜をイメージした刺繍を施しています。高貴なイメージを思わせつつ、機動性に優れたタキシードになっております。」

スバル（L）「次になのは様のウェディングドレスです。ドレスは肩が露出し、下のスカートはフワツとしたタイプの、俗に言うお姫様ラインと呼ばれるドレスを採用し、スカートは上から何層にもフリルを重ねる事でよりフワリとした感じを出し、……
……胸の中心には大きな白いバラとダイヤをあしらひ、腰には大きな白いリボンを付けております。……
……纏うベールですが生地にはシルクを使用し、桜の刺繍をあしらひ、ダイヤモンドと桜華国原産の^{オリジナル}鉦石の桜石をあしらったティアラと神木の桜を髪飾りにしています。手袋は二の腕までの長さに手の甲に白いバラをあしらっております。他にも純白のヒールや桜の華のブローケを用意しました。」

フェイト（L）「誠心誠意、作りました。これからそちらへ転送いたしますが、ここで龍児より手紙を預かっております。えっと……
”ユーノ、なのは。少し早いけど、結婚おめでとう。フェイト（L）やスバル（L）は寝る間も惜しんで必死に作業していたから、是非着てほしい。あと、俺からは二人にお祝いの言葉と二人の未来への願いの言葉を送ります。「どうか、彼らの幸せと未来に、母なる大樹の御加護が有らん事を……」……
……”……です。龍児らしいね……。」

スバル「では、転送します。最後に、お二人とも……。」

「末永く、御幸せに
」

第11話 訓練・龍児VSFW（後編）（前書き）

模擬戦後半です。

ただし、最後の方で問題が発生します。

では、ごうぞう……。

第11話 訓練・龍児VSFW（後編）

龍児に剣先を突き立てられたエリオが降伏すると、龍児はその剣先をゆっくりと外し、エリオに手を差し伸べる。

「ほら、手を……。」

エリオはゆっくりと手を出し、龍児に手を握られると龍児によって起こされる。

だが、あまりの龍児の強さとその凄まじい視線に腰を抜かしているようなのが、立ち上がるうとしても、すぐに倒れ込んでしまう。

「……どうやら、少しやり過ぎたか。悪いな、エリオ。」

「い、いえ。模擬戦なので仕方ありませんから、頭を挙げてくださーい!」

エリオの様子を見て龍児は自分の行動を少し反省し、軽く頭を下げて謝る。エリオは少し慌てて、龍児に頭を挙げるように懇願する。そして二人は顔を見合わせると、互いに小さく笑い合う。

「さてと、残りは3人か……。しばらくそこで休むといいじゃあな。」

龍児はエリオにそう言うと、龍王牙を持ち直し、微かに感じる魔力と気配を追って、スバル達の居る所に走って向かう。

一人その場に残ったエリオは、その背中を見つめ思う。

「（・・・僕じゃあ、まだ龍児さんの足元にも及ばない。でも、絶対に強くなる！！龍児さんに負けなくらいに・・・！！）」

持つ力は違うけれど、同じ騎士の道を行き、志を持つ二人。
その先を歩む龍児を見て、エリオは密かに龍児への対抗心を燃やすのであった。

一方、スバル達はというと・・・。。。

「はぁ……、はぁ……。ビツクリしたあ〜。いきなり空から槍みたいなのが降ってくるなんて……。」

エリオが居る場所から少し離れたビルの影にスバル、ティアナ、キヤロとフリードはいた。

3人とも先程の無属性砲撃系魔術「ミストリティン」の雨のような攻撃から辛うじて逃れてきたようで、息を乱し、バリアジャケツトは少し砂埃で汚れている。

スバルは息を整えながらそう言うと、二人もそれに頷く。

「ほ、ホントよね……。それにあの魔術……。あれって八神部隊長のと同じものよね……。一体どういう事よ……。……!?!?」

ティアナはそこまで言うと、急に上体を起こしてビルの影から辺りを見渡す。

「どうしたんですか？ティアナさん……。」

「しっ。静かに。……来たわ。」

ティアナの行動に疑問を持ったキヤロがティアナに尋ねると、ティアナはそれを制し、通りを見るように促す。

スバルとキャロはゆっくりと通りを見ると、龍王牙を片手に持ち、辺りをキョロキョロと見渡しながら走る龍児が居た。

どうやら、スバル達を探しているようだ。

「どうしようティア。このままじゃあ見つかったちゃうよ……。」

このまま隠れていても見つかってしまうと思ったスバルはティアナに助けを求める。

するとティアナは何か思い付いたらしく、スバルとキャロに言う。

「私に考えがあるわ……。二人とも協力して……。」

「……恐らく、この近くに居る筈なんだが……。」

一方、龍児はスバル達の気配を追って来たが、先程から感じる妙な気配に少し困惑している。

沢山の何者かの視線を感じるのだ。

まるで、自分の行動を監視されているかのように……。

「……………これは一体……………!?」

そんな事を考えていた矢先、突然足元に何かか撃ち込まれる。それに龍児は数歩下がりに撃ってきた方を見る。

するとそこには、銃型のデバイス・クロスミラージュを構えたティアナがビルの屋上に立っている。銃口には既に魔力弾が溜められている。

「そこか!! 絶風刃!!!!!!」

龍児はすかさず龍王牙を自身の前で×印を描くように振り、高速の斬撃である絶風刃を放つ。

その斬撃はそのままティアナの居る場所に一直線に飛び、ティアナに直撃・爆発する。

粉塵が舞い、ティアナの居た場所は大きく破損したようである。

治癒系魔術を使って、体力を回復しようと思い、一回龍王牙の剣先を下に向けようとした時、後ろから誰かが近づく気配を感じる。しかも複数。

龍児が後ろを振り向くと、そこには想像を絶した光景があった。

「な、何！？スバル達がこんなにたくさん……！！！！！」

そう、そこにはスバル・ティアナ・キャロが複数に居て、一斉に龍児に向かって攻撃を仕掛けようとしていたのだ。

その数、ざっと1000人はいると推測できる。

その数が一斉に、龍児目掛けて攻撃しようとしているのだ。いくら龍児でも、この数の攻撃を一度に受ければただでは済まない。龍児はこのままではマズイと考え、咄嗟に魔法陣を展開し詠唱を始める。

「輝ける力よ、災いを退ける盾となれ。バリア！！……
・我を取り巻く6つの星よ、万物を阻む光の盾となれ。バリアブルへキサー！」

詠唱を終えると、龍児の周りに透明の光の壁と六色の光を放つ透明な壁が張られる。

そこに、スバルのディバインバスター、ティアナのクロスファイアーシュート、キャロのフリードによるブラストレイが龍児に向かって

て放たれる。

しかし、二重に防御系魔術を張ってあるのでその攻撃は龍児には届かない。

だが龍児自身もいつまでも防げるものでもない。

自分の魔力が尽きる、または防御を破られてもしたら大ダメージは避けられない。

何とかしてこの状況を打開しなければならぬと龍児は考える。

「……………恐らく、ここに居るスバル達は幻覚だ。気配は似ているが、魔力までは違う。この魔力の感じは……………
……………ティアナか。」

龍児はまず、魔力の気配から自分を攻撃しているスバル達が本物ではないと断定する。

そこで龍児は、どこに本物のスバル達がいるか探し始める。

「（これだけ多くの幻覚を使えるんだ……………。そんなに遠くは離れていない。感じる、彼女達の魔力を……………。）」

目を閉じ、幻覚のスバル達以外の魔力を探す。

その間にも、結界には少しずつ罅が入り始める。

それでも、ただ静かにスバル達の微かな魔力を感じとり続ける龍児。

すると一ヶ所、ここに居るスバル達とは明らかに違った魔力を感じる。それも2つ。場所もスバル達の後方にあるビルの中。

それを確認した龍児は目を見開き、展開していた白い魔法陣から、紫色に光る魔法陣に切り替え、龍王牙を地面に突き刺し、詠唱を開始する。

「……………見つけた!!……………天光満る所に
我は在り、黄泉の門開く所に汝在り……………
……………出でよ、神の雷。」

龍児が詠唱を終えると、目標のビルを中心にいくつもの魔法陣が天高くまで出現する。そして、天空を暗雲が覆い、紫色の稲光が走る。

「これでとどめだ!!インディグネーション!!!!!!」

龍児の叫びと同時に、暗雲から紫色の雷が魔法陣の間を縫いながら、ビルに向かって落ちる。この魔術こそ、数ある魔術の中でも、龍児

の得意とする魔術の一つ。

空から雷を落とす事で広域に渡り敵を殲滅できる、雷属性殲滅系魔術「インディグネーション」だ。

雷属性の中でもこの魔術は別格の力を持つとされている。

そんな魔術は一直線に目標のビルに落ちていき、轟音をあげて直撃・大爆発を起こす。

ビルは砂埃をあげながら崩れていき、それと同時に龍児を襲っていた幻覚のスバル達は静かに消えていく。

すると崩れたビルから、ふらふらになりながらスバルとティアナ、キャラが出てくる。

3人ともバリアジャケットが所々破れ、息が乱れている。

「うわ〜。なんて威力なの……………」

「な、なんなのよ。今の……………避けきれなかったわ……………」

「……………ひくつ……………こ、怖かったです……………ひくつ……………」

「き、キュクルウウ……………」

スバルとティアナは右腕を押さえながら先程の雷撃の率直な感想を言い、キヤロは雷撃に恐怖を抱いてしまったのか、しくしくと泣き、そんな彼女をフリードは必死に慰めている。

そんな彼女達の様子を見た龍児は頭を掻きながら苦笑いしている。

「あつ……また、ちょっとやり過ぎたな……。(全快の時と同じように使おうとするから、魔力が半減しているとどうも、そのあたりの感覚が鈍る。)」

そう言うと龍児は左手で右目の周りの皮膚を触る。

「(やっぱり、次元を越える為とはいえ、視力と魔力を半分渡したのは大きかったか……。いや、これがあの人が言っていた「対価」と言うモノか……。)」

この世界に来る遙か前、世界を越える力を手にするために右目と魔力を対価にした時の事を思い出しながら、そう考えている龍児。

すると、スバルは龍児に話し掛ける。

「……やっぱりスゴいです！！ティアナの幻覚や私達の居場所を見破るなんて……。しかも遠近どちらでも対応できる。でも、近接なら、私も負けません！！！！行くよ、ティア！！キャロ！！」

「……………ええ。やられっぱなしなんてさせません！！！！」

「……………うう……。わ、私も精一杯頑張ります！！」

スバルの掛け声に、ティアナとキャロは揃って返事をし、デバイスを構え直す。

それを見た龍児は静かに小さく微笑み、地面に刺した龍王牙を抜き、構える。

「いいだろう。そろそろ終わりにしよう。はあああああ！！！！！！」

龍児はそう告げると、スバル達目掛けて走り出す。

刀を下に構え、いつでも斬り上げが出来る状態でその間合いを詰めていく。

一方のスバル達も行動を開始する。

「残り魔力は少ない……………私とキャロで龍児さんの足止めをするから、スバルは砲撃で一気に勝負を決めなさい！！！！」

「了解！！」

「はい！！」

ティアナの指示で、スバルは魔力を右腕に溜め始める。
それを見た龍児は顔色を変える。

「（ん？魔力が集まっている……。あれは……。……
……デカイのが来る！！）」

スバルが魔力を溜めている様子から、恐らく一撃系の大技が来ると
予想した龍児は、それを使わせまいとスバルに向かって走っていく。

「行かせない！！シューート！！！！！！」

「いきます！！アルケミックチェーン！！」

「くっ！？魔神剣！！！！！！」

だが、その行く手をティアナの魔力弾の雨とキャラコの鎖が塞ぐ。
それを弾くために、龍児は下から斬り上げる感じで地面を這いなが
ら進む衝撃波を放つ。
互いの攻撃は見事にぶつかり爆発を起こし、龍児はその歩みを完全
に止める。

そこにすかさずティアナとキャラコがクロスファイアーとブラストレ
イを撃ち込み、龍児はそれをまともに喰らう。

「ぐっ!? マズイ!!」

龍児はなんとかバランスをとろうとするが、そこにスバルがウイングロードを出して、一気に詰め寄る。

「うおおおおおおお!!!!!! 一閃必中!! デイバイ————
ン……………バスター————
!!!!!!!!」

右手のナツクルから数発薬莢が飛び、右手に溜めた魔力を一気に砲撃・デイバインバスターに変え、龍児の腹部目掛けて撃ち込む。狙いは正確に捉えていて、しかも二人の距離はたった1メートル未満とかなり近く、外す事はまず無い。

これで、決着。

そうスバルやティアナやキヤロは思った。

その次の瞬間までは……………。

「……………え？」

スバルは自分の目の前で起きている出来事を理解できなかった。

確かに、撃ち込んだ。精一杯、全力で砲撃を放った筈だ。

なら……………。

何故、いまだに龍児は自分の目の前にいるのか？

「……………ふう、危なかった……………」

そう、スバルが全力の砲撃を放つたのにも関わらず、龍児は平気な顔でスバルの前に立っていたのだ。
スバルは自分の拳をゆっくりと見る。

スバルの拳は、確かに当たっていた。

だが、それは腹部ではなく、先程背後からのエリオの攻撃を受け止めた刀だった。

黒色の刀身に紫の柄と鞘。金色で満月のように真ん丸な鐔に柄頭には同じように満月のように金色の宝玉が取り付けられている。

すると、龍児はスバルを見て言う。

「……………いい砲撃だったが……………残念だったな。コイツの前じゃあ、どんな砲撃も……………いや、どんな力も通じない。なぜなら……………」

龍児はスバルの拳を受け止めた刀を一回見て、そのまま続ける。

「コイツは……………」
「闇と無を司る魔刀」だから

な・・・・・・・・。」

「闇と、無を司る魔刀？」

龍児の言った言葉を復唱するスバル。そんな彼女を見て龍児は首を縦に振る。

「ああ。コイツの名前は「無月」。この龍王牙と同じ俺の刀で、リユミエールで恐れられている3つの妖刀の1つだ。・・・・・・・・・・。コイツには、不思議な力があつてな。「刀身に触れた、生命力以外の有りとあらゆる力を吸収する事」が出来る。・・・・・・・・・・。つまり、先程の砲撃は、すべてこの無月が吸収したんだ。」

龍児はそこまで告げると、スバルを押し返し、無月を納め龍王牙を構える。

すると、黒色の魔法陣を展開し龍王牙をスバル達の方に向ける。

「折角砲撃を見せてくれたから・・・・・・・・こつちも得意の砲撃系魔術を見せよう。・・・・・・・・・・。響け、終焉の笛。・・・・・・・・・・。ラグナロク《ブウー！！ブウー！！》ん！？なんだ。」

砲撃を放とうとした矢先、突然六課全体に警報が鳴り響く。

表示されたモニターには「アラート」と書かれている。

すると、ロングアーチのシャーリーが訓練場の龍児やスバル達を始め、六課に居る者全員に、ある事を告げる。

《皆さん。大変です！！！！現在、スカリエッティが収容されている軌道拘置所が・・・・・・・・・・・・・・・・何者かに襲撃を受けています！！！！！！》

その言葉に、六課にいる全員が驚愕したのであった。

第11話 訓練・龍児VSFW（後編）（後書き）

特別企画・キャラクター交流会

第6弾

龍児「どうも、夜御倉龍児だ。」

セスタ「その相棒のセスタ・ベルセリオスだよ。今回も始まりました、キャラクター交流会！！！！もう6回目か……………。随分続いてきたけど、毎回熱いトークが楽しいよね、相棒。」

龍児「ああ。今回は報告会になっていたから、ましては盛り上がっていたな。では、今回はいつも通り質問に入らせてもらいます。ただ今回は……………少し頭を捻った内容になっています。所謂クイズのようなものと考えてください。では1つ目。これはユーノに。”作中で語られる「75年前の惨劇」に関して、一体どういったものであるでしょうか？また、俺達がミッドに來た目的は何でしょうか？”です。」

セスタ「続いて2つ目はナーノに。こっちは普通に作者が気になった事を聞くよ。”ナーノ君は未来から來たそうですが、未来のリュミエールの事は知っていますか？もし知っているのなら答えられる範囲でお願いします。”……………だつて。」

龍児「最後3つ目は皆さんに。”今回の話で、俺の魔力が半減して

いる事とその理由が明らかになりましたが、では、誰がそうしたんでしょうか？”……です。今回はかなり際どいものばかりですが、どうかよろしくお願いします。」

セスタ「今回は、牧野由衣さんの「つきのしじま」でお別れです。ではまたよろしく」

第12話 動き出す影（前書き）

今回は、ついにあのマッドサイエンティストが登場です。

ではじいねい……。

第12話 動き出す影

龍児がスバル達と模擬戦をしている丁度その頃。

第9無人世界・グリユーエン軌道拘置所

旧暦の時代に次元世界を安定に導き、後に時空管理局最高評議会となった者達が生み出した希代の天才技術者であり、新暦75年にミッドチルダを未曾有の大混乱に陥れた大規模首都型テロ事件「J・S事件」の首謀者である広次元犯罪者ジェイル・スカリエツティが収容されている軌道拘置所。

その施設に今、緊急事態が発生している。

《ブウーーーーー！！！！ブウーーーーー！！！！ブウーーーーー！！！！緊急事態発生！！緊急事態発生！！総員、厳戒態勢に入れ！！繰り返す！！総員、厳戒態勢に入れ！！》

「おい！！何が起きた！！」

「分かりません！！突然、何者かの襲撃を受けて、グアアアアア！！！！！！！！」

「おい！！どうして、グアアアアア！！！！！！！！」

拘置所内をデバイスを持って走る局員だが、突然現れた何かに切り刻まれ倒れ込む。

その場所には血塗れになって倒れた局員と、その周りを優雅に飛び回る赤色の蝶々がいる。

そこに靴音を響かせながら2つの人影が現れる。

一人は紫色のショートヘアに黒色の瞳、漆黒のドレスを纏った女性。

もう一人は白髪に紅い瞳、上半身裸に白色の長ズボンを履いた、3

メートルはある大男。

女性の周りには黒い蝶々が数羽舞い、大男は身の丈ほどの巨大な斧を担いでいる。

「がははは！！！弱えー弱えー！！！！オメエらそれでも看守かあ？弱すぎて話になんねえな、があはははははは！！！！！！！」

斧を振り回し、向かってくる看守を次々と尻ぎ払う大男。

すると、黒いドレス姿の女性は掌の手袋から橙色の蝶々を呼び出し、看守達に飛ばす。

「な、なんだ！？」

「・・・・・・・・・・ほな見よし・・・・。
エクスプロード・バタフライ
「爆破蝶」。」

自分達の周りを舞う蝶々に困惑する看守達に対し、ドレス姿の女性は静かな口調で言うと、橙色の蝶が一斉に光り、大爆発を起こす。爆発に巻き込まれた看守達は粉々に吹き飛び、その場には、巨大なクレーターがいくつも出来ていた。

「がっははは！！！相変わらずえげつねえ攻撃をしゃがるなあ、オメ

「エは。」

「……………そうでっしやるか？私は蝶の召喚師。美しく、そして可憐に空を舞う蝶を使役する者どすええ……………。時に優雅に、時に激しく戦う……………。それがこの私の……………、召喚師の戦い方どすええ……………。」

大男の言葉に女性は静かに微笑しながらそう言うと、ゆっくり歩き出す。

「こんな所で時間を費やしても仕方ありません……………。ほな行きましょか。あの方のお迎えに……………。」

「そうだな。他の連中も、作戦を実行してる頃だしな……………。じゃあ、さっさと終わらせようぜ……………、がははは。」

二人は軌道拘置所の全体図を表示したモニターを見ると、暗闇に向かって歩き出した。

一方、軌道拘置所

ジェイル・スカリエツィ独房

希代の天才技術者でJ・S事件の首謀者ジェイル・スカリエツィが収容されている独房で、ただ一人眠っていたジェイルは、拘置所からの轟音を聞いてゆっくりと目を覚ます。

「……………なにな。この騒音は……………」

ジェイルは目を擦りながら、その音を聞く。

すると爆発音が収まり、代わりに誰かの足音が聞こえてきた。次第にその音は大きくなっていく。

ジェイルは音のする方を見ると、暗闇の中から大男とドレス姿の女性が見れる。

「がははは。漸く見つけたぜ。天才技術者、Dr・スカリエツィ。」

「ええ……………やっと見つかりましたわ……………」

二人はジェイルを見ると、怪しそうな笑みを浮かべる。それを見たジェイルは、怪訝そうな顔を話しかける。

「誰だね。君たちは……。」

ジェイルは、素っ気なく言う。折角気持ち良く寝ていた時に突然の轟音で起こされ、さらに自分の方を見て怪しい笑みをうかべられた事で、少しジェイルは頭に来ている。

すると、二人は軽くお辞儀をする。

「……これは申し遅れました。初めまして……。私は「処女宮」のヴァルゴと申します。以後お見知りおきを……。」

「俺あ、「金牛宮」のタウロス。オメエを迎えに来た！！がははは！！！！！」

「私を迎えに……。かね？」

ヴァルゴとタウロスと名乗った二人組の言葉に、ジェイルは驚く。

最高評議会のメンバーによって生み出され、仕方なく利用されながら、管理局への復讐と自身の考案した生命操作技術の成果をミッドチルダのみならず、次元世界全体に知らしめようとして起こしてきた数々の事件や騒動。

そして、ついに本格的に動き出した事で起こしたJ・S事件。それらの元凶であり、人から忌み嫌われ、マッドサイエンティストなどと呼ばれる自分を、わざわざ無人世界の軌道拘置所に迎えに来るなど、ジェイル自身、到底信じられるモノではなかった。

何かの罠か……。

そう思ったジェイルは二人に尋ねる。

「……一体、何の為に私を迎えに来たのかね？わざわざ管理局を敵に回すような真似をしてまで……。」

確かに、ジェイルの言う事には一理ある。

軌道拘置所は犯罪者やテロリストの中でも、再犯の可能性や残虐、非人道的な思想を持つ「危険人物」を収容する施設。

脱走や脱獄などを防ぐため、惑星軌道上に作られ、聴取や面会などは殆どモニター越しで行われる。

そんな場所に侵入するのは容易な事ではない。

もし仮に出来たとしても、それは明らかに時空管理局を敵に回した行為であるのは明白だ。

なら何故、この二人はその危険性を冒してここにジェイル・スカリエッティを迎えに来たのであろうか。

するとタウロスは突然、盛大に笑い出す。

「があはっはっはっはっはっ！！！！！！！！！！面白え事を言いやがるなあ。がああはっはっはっ！！！！！！！！」

腹を抱え、面白おかしく笑うタウロスに対し、ヴァルゴは口元を手で軽く押さえながら上品に笑い、ジェルに告げる。

「うっふふふ。スカリエッティはん……。1つ勘違いしてはりますよ。私らが、管理局を敵に回したんやありまへん……。」「管理局が私らを敵に回した」んどす。。。。。」

「管理局が。。。。。。。。。。。。君達を敵に回した。。？」

ヴァルゴの言葉に、ジェルは更に驚く。

管理局が、この二人を敵に回した。。。。。

一体どう言う事なのか……。

何がどうなっているのか、流石に分からなくなっているジェイルに、ヴァルゴは続けて言う。

「時空管理局は、自分達が次元世界の平和を守る組織やと思うとるみたいですね……。……。……。……。自分達の本当の役割にも気付かずに、哀れなこっちゃな……。。」

「がははは。仕方ねえぜ。その事を知っているあの連中は死んじまつたわけだからよお……。まあいいじゃねえか。どうせ全て終わったら消す訳だったんだから……。、ただその時期が早くなっただけだ。がぁははは。」

ヴァルゴの毒づいた発言に、タウロスは笑いながら答える。

そしてヴァルゴは軽く咳払いをすると、ジェイルにこう言う。

「おっほん……。……。兔に角、私らの今後の計画のために、あんさんの御力が必要なんです……。……。……。私……。私……。私……。ジェイル・スカリエツティはん。」

ヴァルゴの妖艶的な雰囲気と口調に、ジェイルは一瞬我を忘れるが、直ぐに我に返り、口元をやや上気味に答える。

「ふふ……。折角の誘いだが、生憎私は外に出る気はないよ。外に出たところで、亡くした者が帰ってくる訳ではない。もはや、外に出る事など無意味なのだよ。……。帰りましたまえ。何より、君達はいけすかない。」

ジェイルは二人を見て、明らかな拒否を示す。

自分の目的であった管理局への復讐や生命操作技術の成果の披露はほぼ成し遂げた。

ただしそのかわり、大切な娘を一人失ってしまった。

だから、もう外に出る理由はない。

ジェイルはそう言って、再びベッドに戻るつとす。

するとヴァルゴは、ジェイルを引き留める。

「ちょっとお待ちなはれ……。あんさんに、会わせたい人が居るんやけど……。会わんでええんどす？」

ヴァルゴに呼び止められたジェイルは、ゆっくり彼女の方を向く。

それを確認したヴァルゴは黒い蝶を一羽、自分達が入ってきた方へ飛ばす。

「ええどすえ。こつち来なはれ……。折角の再会なんやから・
・・・・・。」

ヴァルゴが暗闇に向かってそう言うと、先程飛んでいった黒蝶が帰ってくる。

ただし、足音が聞こえる。

カッソ、カッソとヒールの足音が暗闇に響き渡る。

そして暗闇の中から、一人の女性が現れる。

金色のストレートに茶色の瞳。全身戦闘スーツを着用し、首のプレートには「？」と刻まれていた。

その姿を見たジェイルは、目を見開き驚愕する。

その様子を見たヴァルゴは微笑しながら、ジェイルに紹介する。

「紹介します。私の配下騎士〔ファロウ・ナイト〕で、……………
……………元ナンバーズ・？2のドゥーエど
す。」

「……………お久しぶりです、ドクター……………」

そう、その女性こそ、ジェイル・スカリエツィが生み出した12
人の戦闘機人集団〔ナンバーズ〕の？2であり、つい1ヶ月程前に
起きたJ・S事件で地上本部のレジアス中將を殺害するが、直後ゼ
スト・グランガイツによって殺害された筈のドゥーエだった。

その姿を見たジェイルは、身体中を震わせながら檻の前まで近づき、
ドゥーエに話しかける。

「……………ド、ドゥーエ……………ホントに、ドゥーエなんだね。
……………」

「……………はい。会いたかったです、ドクター……………」

ドゥーエはジェイルがいる牢に近づき、二人は檻越しに抱き合う。
二人の目からは一筋の涙が、まるで、流星のように淡く輝いていた。

暫く二人は抱き合っていたが、ヴァルゴの咳払いを聞き、二人は一
旦離れ、ヴァルゴを見る。

「…………おっほん。どうですか、大切な娘との再会は？死んだ
筈の彼女を、私らの「王」の御力。…………そして、「大い
なる光」により蘇らせたんです。」

「王？大いなる…………光？」

ヴァルゴの意味深な発言に、ジェイルは気になった単語を復唱する。
するとヴァルゴは妖しい微笑を浮かべ、ジェイルに近づき告げる。

「…………そう。大いなる光。あんさん等と言う「失われた都^{アルハ}
市」の事どすえ…………。私らの王と共に来れば…………。
…………。あんさんの求めるモノが手に入りますええ。
…………。嘗てあんさんが抱いていた…………。
…………。アルハザードに対しての尽きる事無い欲望と…………。
…………。その技術が…………。」

ヴァルゴはジェイルの前まで来ると、左手でジェイルの下顎を撫で
るように触り、彼の左耳の近くまで口を近づけ、静かに囁く。
その瞬間、瞳が血の色のように緋色に妖しく光る。

「……………来ていただけますか？……………私らの元に……………」

そう言うと、静かにジェイルから離れる。

ジェイルは暫く動きを見せなかったが、次第に顔をあげ、怪しく微笑する。その瞳は狂喜に満ちていた

「……………いいだろう。君達に協力しよう。」

「……………おほほほほ！！流石は「無限の欲望」アンリミテッド・デザイヤさんどすわあ。話が早くて助かります……………タウロスはん。よろしゅう頼みますわ。」

「了解！！おりゃああああ！！！！！！！！！！」

ジェイルの答えにヴァルゴは高飛車気味に笑うと、傍に立っていたタウロスに檻を壊すように頼む。それにタウロスは笑みを浮かべ承諾すると、担いでいた黒い両刃の巨大な斧を大きく持ち上げ、一気に振り下ろす。

すると、紙をハサミで切るように容易く檻を切断し、破壊する。

檻の破壊を確認したジェイルは、ゆっくり歩き出し、ヴァルゴに礼を言う。

「……すまないね。助かったよ。」

「構いませんわ……。これであんさんは私たちの同志です。因みに、他の拘置所で囚われとるあんさんの娘さん4人は、他の星騎士の皆はんが助けに行ってます。……」

「ほな、行きまひよか？ 私達の居城へ……」

ヴァルゴはそう言うと、ベルカ式の魔法陣を展開し、タウロス、ジエイル、ドゥーエと共にその場から消え失せる。

そしてそれと同時に、グリューエン軌道拘置所は大爆発を起こし、完全に消滅したのであった。

第12話 動き出す影（後書き）

特別企画・キャラクター交流会

第7弾

龍児「どうも、世界国家騎士団2番隊隊長の夜御倉龍児だ。」

セスタ「やつほう 5番隊隊長のセスタ・ベルセリオスだよ。」

フェイト（L）「こんばんわ。2番隊副隊長のフェイト・L・ムー
ンです。」

スバル（L）「こ、こんばんわ。5番隊副隊長の・・・月光院ス
バル・・・です。また始めました、キャラクター交流会。」

セスタ「今回で7回目だけど、まだまだ続けていくよ〜」

龍児「では早速、質問タイムだ。まずは龍元から重要大事様へ・・・
・・・。」この度、コラボの話を企画していただき、改めてありがとう
ございます。私が考えた世界であり、後に大きな鍵を握るリユニ
エールの世界は、何かと設定が変わっています。そこで1つお聞き
しますが、そんなリユニエールを舞台とした話で苦労しているのは
どのような事ですか？もし、その回答が、私が答えられる内容でし
たら、誠心誠意お答えします。・・・との事です。まあ確かに、
リユニエールはミッドチルダや地球と違って、どちらかと言うと幻
想的な部分が多いからな。その理由は作者・龍元が「テイルズオブ

シリーズ」の影響を受けて作ったから……ですが。」

フェイト（L）「次は私からそっちのフェイトとクロノお兄ちゃんに……。」二人とも、どうしてそんなに堅い考えをしているのですか？もつと柔軟に考えないと、後々に後悔するよ。”です……。……ホントに二人とも真面目と言うか、堅っ苦しいと言うか……。もつと柔軟に構えた方がいいと思うなあ。」

スバル（L）「最後は私から……。ナーノさんにノノノノノ……。”前回のラーメンの御誘い。ありがとうございます……。それ……。私は、味噌味が好きです……。それで……。何時何処に行けば宜しいでしょうか？……。……ですノノノノノ……。……た、楽しみで……。ノノノノノ。」

龍児「さて、いよいよ本格的に動き始めたコラボレーション企画。俺達も出来る限りの事をしますので、宜しく願います。では、今回はいきものがかりの”スピリッツ”でお別れです。ではまた次回。お楽しみに……。」

第13話 龍児の能力（前書き）

今回は龍児の能力が分かります。

ではございませぬ。

第13話 龍児の能力

模擬戦中に入った突然のアラートから2時間後。

機動六課もとい時空管理局全体に軌道拘置所襲撃事件に関して、衝撃の事実が告げられていた。

第9無人世界・グリユーエン軌道拘置所：完全消滅

囚人ジェイル・スカリエツィ：
行方不明

看守ならびに囚人：全員死亡

第6無人世界・キリーク軌道拘置所：完全消滅

囚人トール：
行方不明

看守ならびに囚人：全員死亡

第6無人世界・ゲルダ軌道拘置所：完全消滅

囚人クアットロ：
行方不明

看守ならびに囚人：全員死亡

第17無人世界・ラブソウルム軌道拘置所：完全消滅

囚人ウーノならびにセツテ：
行方不明

看守ならびに囚人：全員死亡

「……な、なんや、これ……」

その報告を受けたはやては愕然とした。

無人世界に置かれた軌道拘置所。その鉄壁はいままで破られた事はなかった。

だがそんな拘置所が4つも完全に消滅し、そこに収容されていた犯罪者ジエイル・スカリエツィとナンバーズ4名が行方不明、更に他の囚人や働いていた看守を始めとした職員が全員死亡という、管理局が予想だにしなかった事態が起きてしまった。

はやてを始め、この部隊長室に居るのは達隊長陣やスバル達FWは完全に言葉を失っている。

「……こんな事になるなんて……。あのスカリエツィが居た軌道拘置所が完全消滅……」

「しかも、スカリエツィとナンバーズの一部メンバーが行方不明……」

なのはは軌道拘置所が消滅した事に、フェイトは因縁の相手である

スカリエツティが行方不明になった事に驚いている。

すると、そこにヴィータとシグナム、そして龍児とセスタが入る。

「あつ、ヴィータ、シグナム。どうやった、軌道拘置所の様子は？」

はやてはヴィータとシグナムに軌道拘置所の事を尋ねると、二人は揃えて首を横に振る。

「モニター越しに見てきたが、あれは酷い……。跡形も残っていないぜ。あれで生存者が居る方が奇跡だ。」

「ああ……。それこそ、転移とかで逃げ切れれば別だが……」

ヴィータとシグナムは自分達が見てきた事を話す。

龍児とセスタもその言葉に頷く。

「ああ、完璧なまでに破壊されている。恐らく、襲撃者の痕跡の1つも見つからない。」

「それどころか、何一つ残っていないよ。多分相当のテロリストの仕業だね……。」

4人からの報告を受けたはやては、力無く椅子に座り込み、落胆する。

「そうか……。J・S事件が解決して人々は少しずつ平和への復興をしとる、そんな大切な時に広次元犯罪者ジェイル・スカリエツティが行方不明になり、軌道拘置所が壊滅……。なんでこんなに平和が乱れるんや!!!!」

歯を食いしばりながらはやては勢い良く机を叩く。

その音とはやての感情の昂りになるのは達は驚く。

考えてみれば、こつも立て続けに騒動や事件が起きれば誰でもそうなるのは当然と言える。

ましてやはやての場合、10年前の事件が未だに尾を引いている面があるので、なおその思いが強い。

そんなはやての様子を見て龍児は一人思っていた。

「……やっぱり、良く似ているな……。人々の幸せな暮

らしを考えていた……。「あの方」に……。「

』……龍児。人の幸せってどういものなのかしら……。

龍児ははやてを見ながら、嘗て自分に人の幸せとは何か尋ねた、龍児にとって大切な一人の女性の事を思い出していた。

そして、龍児ははやてに話し掛ける。

「嘆いていても事態は変わらない。今は、少しでも状況を分析するのが得策だと思います。」

嘆くより今回の事件の分析をした方がいい。

龍児は冷静に言うと、はやては沈んでいた頭をあげ龍児を見る。

そのはやての瞳には微かに涙が浮かんでいる。

それを見た龍児は言い知れない感情に包まれる。

「うつ……（）……どうして、貴方が悲しみを抱かないといけない。「あの方」に似ておられる、貴方が……」

龍児はそう思いながら、奥歯を食いしばる。

龍児にとって大切な人と同じ容姿のであるはやてが自分の目の前で悲しんでいる。

そんな状況は龍児にとって到底耐え難いものであった。

「……兎に角。状況を分析しないといけない。……
……シグナム、映像はあるか？」

「ああ。ここに。」

龍児は気を取り直し、シグナムに見てきたモニターの映像を出すように促し、シグナムはデバイスに記録した映像を全員に見せる。

その映像を見たはやて達は顔が強張らせる。

そこには、跡形も無く壊滅した軌道拘置所の無惨な姿とボロボロになった局員と囚人の服が宇宙空間に漂っている映像が写っていた。

「うう……。実際に見ると……。酷すぎる何てもものじゃないわね。」

ティアナが手で口を押さえ、顔を歪める。

確かに、写し出された光景は酷いで済むような状況ではなかった。全てがバラバラに、何一つ原型を留めてはいない。

人も、建物も……。

その全てが悉く破壊されていたのだった。

それを見て龍児は内心ティアナ達FWに申し訳ない気持ちにはなるが、事件である以上、きちんと分析しなければと自分に言い聞かせ、話を続ける。

「見ての通り、これは事件後の軌道拘置所の映像だ。全て粉々にな

っていて、すでに原型を留めていない。」

「確かに……。これじゃあ、痕跡も残っていませんよ。」

映像を見ながら話を進める龍児に、なのはは言う。

何もかも破壊され、何らかの痕跡があっても、それすら粉々になっているのが普通である。

つまり分析しようにもその証拠が無い以上、不可能ではないかとなのはを始め、皆は思っている。

すると龍児はなのは達に微笑み、こう続ける。

「それなら問題ない。物理的痕跡はないが、物に残った思念やエネルギーを読み取れば、何があったかおおよそは分かる。」

龍児の言葉になのは達は驚愕する。

確かに、なのは達にも残留魔力を調べる方法はある。

だが、それで分かるのはあくまで魔法が使われたかの有無や魔力の強さ程度が限界である。

それに関わらず龍児は、どのような事態があったかが分かると言ったのだ。

その言葉にフェイトは尋ねる。

「それは、どういう事ですか？」

「ああ、そういえば言っただけでなかったな。……
・セスタが特殊能力を持っているように、俺にも特殊能力があるんだ。といっても、セスタのように戦闘向きじゃないが……。
俺の能力は、一般的に「靈魂解読」と呼ばれているんだ。」

フエイトの質問に、龍児は少し苦笑いしながら、それが自分の能力のお陰である事を言う。

それになのはは詳しく聞こうと質問する。

「なんですか？その、靈魂解読って言うのは？」

「まあ簡単に言えば、物体や大気中に存在する思念やエネルギーを読み取る能力だ。物には人の想念や感情、または自然のエネルギーが集まりやすい。それを読み取る事で、そこで起きた事柄や現象を知る事が出来る。といっても、知る事が出来るのはほんの僅かしかないけどな……。」

「そんな事が実際に出来るものなんですか？思念やエネルギーを読み取るなんて……。」

龍児の答えに、なのは信じられないといった表情で言う。

科学が非常に発達したミッドで暮らすなのは達からすれば、思念やエネルギーを読み取るなんて事は非科学的なものであり、信じる事

なんて出来るものではなかったのである。

すると龍児は目を閉じると、静かに言う。

「……確かに、到底信じられる事ではないな……。思念、つまり故人の魂や感情を読み取るなんて事は……。だけれど、〔この世に住まうは人だけに在らず。時に、人の智を越える事有り〕……。って、ある人が言っていた言葉なんだがな。人が感じたり、知れたりする範囲は世界全体からしたらほんの僅かしかない。だから……。信じられなくても、それが真実である事がある。それで……」

龍児は目を開けると、モニター画面を見てなのは達に言う。

「モニター越しにはあったが、微かに読み取る事が出来た。」
……
組が突然現れて、恐らく軌道拘置所で働いている人達を次々に殺めていたらしい。それで、……何処かの牢で囚われていた囚人を連れ出し、その後直ぐに拘置所が爆発した。
……
そう、俺は読み取れた。恐らくは、他3ヶ所も……」

龍児は自分が読み取った事をそのままなのは達に伝える。

それになのは達は驚いていたが、軌道拘置所の状況を考えて、龍

児の読みは当たっている可能性はあると考え、詳しく調べるために、後日本局に向かい、調査報告を聞く事を決めた。

「多分、2日後には報告されるやろうから、そんな時に確かめよう。．．．．．しかしセスタさんの能力といい、龍児さんの能力といい．．．．．リュミエールの人は皆そういう能力を持つとるんですか？」

はやては改めて本局に行く事を決めると、二人の桁違いの能力に驚き、リュミエールでは一般的なのかと尋ねる。

確かに、模擬戦の時の風を自在に操ったセスタの「風の気まぐれ」という能力や先程の龍児の「靈魂解読」という能力。

どれも、なのは達からすればレアスキルと言えるものばかりの力だ。

もし、それがリュミエールでは一般的であつたら．．．．．

そう考えるとはやてやなのは達は少し怖いと思っている。

すると龍児は静かに笑い声を立て、はやて達に話し掛ける。

「ふっ．．．．．全員が全員持っているわけではないですよ。そもそも、魔力自体に能力を持っている人は魔術が出来る人達のほんの一握り程しかいないですし、行使するにも条件や代償があるから、頻繁に使えないんです。現に俺の能力を発動するには、自分の血を

代償にしますし……。」

「血!？」

龍児の言葉にはやては甲高い拍子抜けた声をあげて驚き、なのは達も目を見開き驚く。

「うん。相棒の能力は魔力による思念体やエネルギーへの干渉を行う仕組みになつていているから、代償としてそれ相応の血を使用するんだ。相棒に流れている夜御倉の血はとても強くて、決して薄まる事は無いとまで言われているからね……。あつ、もちろんほんの僅かな間だけならたいした事はないよ。」

なのは達の様子を見かねたセスタは、龍児の説明の補足をする。するとシグナムは難しい顔でセスタに尋ねる。

「なら、なぜベルセリオスは能力を使つてもなんともないんだ。」

そう、龍児やセスタの言う通りなら、少なからず能力を持つ者はその行使に一定のリスクを伴っているという事である。

だが、だとすればセスタが模擬戦で見せたあの能力を使った時も、何らかの代償を支払った筈である。

だが、セスタに特に変わったところはない。シグナムはそれが気になっていたのだ。

すると、セスタは納得した表情を見せると、背中に背負っていたルーンブレードを鞘から抜くと、刀身をなのは達に見せる。

そこには、何やら文字のようなものが書かれている。

「それは、この魔術文字がオイラの力を制限しているからさ。これで、オイラは自分の力を代償が生じない範囲で扱えるんだ。」

セスタは自慢気に言うと、なのは達にその文字を見せびらかす。それを見ていた龍児は、小さく溜め息をつくと、はやてに言う。

「……とりあえず、俺達は休ませてもらいます。少しとはいえ、能力を使ったため、休養が必要ですから……。」

「あ、はい。分かりました。わざわざ、どうもありがとうございます。」

はやてが二人にお礼を言うと、龍児とセスタは部隊長室を出る。

すると部屋を出た直後、セスタは龍児に尋ねる。

「相棒、良かったの？もう一つの能力を教えなくて……。まあ、別に教える必要もないけど……………」

セスタの問いに、龍児は歩きながら答える。

「……………教える時ではないだろう。あの能力は、この世界では使う機会はないだろうし、……………あの能力は、元々俺が持っていたものではないしな……………それより、何か分かったか？」

「全然……………。やっぱり文献にも残さないようにしたみたいだよ……………。75年前のあの事件に関する事全て、ね。」

255

セスタは首を横に振り龍児に告げると、龍児はそうかと答え、小さな声で言う。

「……………なんとしても、真実を突き止めないと……………75年前の……………「7・7事件」を……………」

第13話 龍児の能力（後書き）

特別企画・キャラクター交流会

第8弾

龍児「どうも、好きな花は桜。夜御倉龍児です。」

フェイト（L）「どうも、好きな花は桜とコスモス。フェイト・L・ムーンです。今回も始まりました、キャラクター交流会」

龍児「今回は俺達2人でお送りします。まずは、例により質問タイム。では早速1つ目、俺からユーノに質問。」ユーノは遺跡や本に詳しいよな。そこで、今まで見てきた遺跡や本で興味が湧いたものを3つ、理由付きで答えてほしい。」です。」

フェイト「2つ目は私から一護さんに。」一護さんはお医者さんとお聞きしましたが、石田さんの事は同じ医者としてどう思いますか？」です。」

龍児「最後は俺からユーノ達皆さんへ。」この作品では、俺ははやて様に対しては敬語で接していますが、その理由はなんだと思いますか？」です。」

フェイト（L）「あと、もう1つ。ナーノ君に報告があります。」スバル（L）が龍児の力を借りて、数時間前にミッドの方へ向かったからエスコート宜しくお願いします。」です。ホントにお願いね

！！！！あの子、臆病でかなりの人見知りで、おまけに方向音痴だから、迷子になるといろいろ大変なの！！前なんか、危うく変な人達に連れ去られる所だったから……。あの子、スゴく可愛いから・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
」

龍児「ああ。本人たつての希望で行かせたけど、やっぱり心配なんだ。身勝手は承知で頼む。では、また……。あと、リュミエール篇頑張ってください！！！！」

第14話 本局での真実(前書き)

今回は龍児達の目的の片鱗が分かります。

ではどじょう……。

第14話 本局での真実

あれから2日後。

ここは、次元空間に浮かぶ時空管理局本局。

時空管理局の2大勢力の一方で、次元世界全体の平和安定と、ロス
トログアの回収管理を目的としている。

次元航行部隊などを保有し、管理局のほぼ中枢を担っている場所
である。

そんな本局の通路を歩く3人の姿が見える。

「うーん。数回来たけど………やっぱりすごい施設
だよなあ、ここ。」

「ああ。時空管理局本局………。まさに次元世界を守護する
組織の事だけはあるな。」

先日の軌道拘置所襲撃事件の中間報告を聞くためにはやてと共に本
局を訪れていたセスタと龍児は、てくてく歩きながら本局の設備を

見渡している。

因みに、二人が本局に来たのは今回だけではない。

龍児は軌道拘置所襲撃後の映像を確認するために一回、セスタにいたっては前に六課に来ていたユーノと気が合ってしまった、無限書庫を訪れるために数回来ていたのだ。

二人とも初め驚きはしたが、順応性が高いのか、今回はそこまでは驚いてはいなかった。

閑話休題

そんな二人を見て、はやては小さく笑う。

「クスクス。お二人の世界には無いような設備ですか？」

すると龍児が丁寧な口調で答える。

「ええ……。世界国家騎士団10番隊や、銀狼国といった場所には似たような設備は在りましたが、ここまで充実はしていません。やっぱり、管理局の科学技術の水準はかなり高いですね。」

龍児は自分達の世界における科学技術が最も発達している国際部隊である世界国家騎士団の10番隊や科学技術の聖地とも呼ばれる技術国家・銀狼国と比較するが、リユミエールでもトップクラスの技術力を有しているそれらでもミッドや時空管理局の足元にも及ばないと話す。

それを聞いたはやては、成程っと小さく言うと、龍児に不思議そうな顔をして尋ねる。

「あの、前から気になっていたんですが……
……なんで私には敬語で話すんですか？私の方が4歳年下なんで、ちよつと気になりまして……」

「あ、いや……」

はやての問いに龍児は言葉を詰まらせる。

そう、確かに言われてみれば龍児とセスタがミッドに来てから約3週間。

龍児は年上の相手以外に、4歳も年下のはやてに対しても敬語で接している。

朝の挨拶や労いの言葉を送る時、何気ない会話の時も全て敬語ではやてに話す。

その理由は何なのか、はやては聞くところとする。

一方の龍児はその問いに対し何と言おうか考えているのか、言葉を詰まらせている。

「そ、それは・・・（ぐっ！！やっぱり普通に接するべきだったか・・・）。だが、どうしてもそうなるんだな・・・かあ。」「あら、はやてちゃんじゃないの。」「!？」

龍児が考えていた丁度その時に、はやてに話し掛ける声が聞こえる。龍児とセスタ、そして呼ばれたはやてが声がした方を振り向くと、通路の先から管理局員の制服を着た一人の老婆が二人の管理局員を引き連れて現れる。

その彼女を見たはやては驚いて敬礼をする。

「!」、これはミゼット提督!!ご無沙汰しております!!」

「ふふ。そう畏まらなくて構いませんよ、はやてちゃん。」

老婆ははやての畏まった態度に対し、微笑みながら言葉をかける。すると、セスタははやてに尋ねる。

「ねえはやて。この人は誰？」

「ちよっ、セスタさん!!失礼ですよ!!!!この方は、時空管理

局黎明期を支え、今は本局統幕議長を務めておられるミゼット・クローベル提督なんですよ！！！！」

セスタの何気ない問いにはやては焦りながら失礼な発言のセスタに注意する。

するとミゼットは優しい声で言う。

「まあまあはやてちゃん。そんなに声を荒らげなくても……。」

「しかし……。」

「いえ、知らなかったとはいえ、初対面の年上の方に失礼な態度をとった事は、明らかにこちらの不注意であります。失礼しました。……ほら、セスタ。」

「う、うん。すみませんでした。」

龍児は丁寧な口調でミゼットに頭を下げると、セスタにも謝るよう促す。

セスタもその通りに頭を下げ、謝意を示す。

「いえいえ、お気になさらずに。貴方達のはやてちゃんが言った、リユニエールの世界国家騎士団の隊長さんですね。」

ミゼットは物腰柔らかな口調で二人に話し掛ける。

「あ、はい。初めまして。私は世界国家騎士団2番隊隊長を務めています、夜御倉龍児です。」

「初めまして、同じく5番隊隊長のセスタ・ベルセリオスです。」
「まあ、ご丁寧にありがとうございます。」

龍児とセスタが自己紹介と軽くお辞儀をすると、ミゼットも同じようにお辞儀をする。
その三人は互いに微笑みを浮かべている。

丁度その時、はやてに通信が入った。
はやてが慌てて通信を開くと、その相手は無限書庫の司書長ユーノ・スクライアだった。

《はやて、今いいかな？教えたい事があるんだ。》

「な、何や、その教えたい事って？」

《今は言えない。兎に角、無限書庫に来てくれるかな？》

何か切羽詰まった表情でユーノははやてに言うと、そのまま通信を

切ってしまう。

はやては、ユーノの様子に疑問を持つ。

あまり驚く事がないあのユーノがあそこまで取り乱すという事は、余程の何かがあったに違いない。さらに今言えないという事は、龍児やセスタに聞かれたくない、若しくは聞かれたらまずい内容である可能性がある。

はやては一回時計を見る。

目的の中間報告開始の時間まではまだ余裕がある。
はやてはそれを確認すると、龍児達に言う。

「すみません。急に人と会う事になりました……………」
、報告会までには戻りますので、先に向かっててください。」

「ああ、了解した。」

「オツケ〜。」

「それではミゼット提督、私はこれで失礼します。」

「ええ。また遊びに来てね、はやてちゃん。」

はやては龍児、セスタ、ミゼットの3人に一礼すると、ユーノの居る無限書庫に向かって走り出していった。

そんなはやての後ろ姿を静かに見つめる龍児は、一人思っていた。

「（やっぱり……………良く似ている。あの後ろ姿……………
……………）母様……………）相棒。大丈夫？泣いてる
の？」「え？」

セスタに言われ、龍児は手で目を拭く。
すると手には冷たい涙が付いていた。

「あ、ああ。何ともない。大丈夫だ。」

龍児は心配そうな顔で自分を見るセスタにそう言つと、ポケットの
ハンカチで涙を拭う。

そんな彼らを見てミゼットは先程までの穏やかな表情から、真剣な
表情になり、二人にこう切り出した。

「……………はやてちゃんが居なくなつたのは都合が良いわね……………
……………貴方達（リュウミエール）の人からしても……………」

その言葉の真意を読み取ったのか、龍児とセスタは真剣な表情でミゼットを見る。

「…………やはり、貴方なら知っていると思いました。ミゼット・クローベル提督。」

「オイラ達を見た時、納得したような表情をしたもの。つまり、オイラ達が来るのを知っていたって事ですよ。」

龍児とセスタはそれぞれの考察を言うと、ミゼットにお辞儀をして言う。

「…………教えていただけますね、75年前に起きたあの事件……………」
「7・7事件」について……………」

「…………ええ。お話しします。この75年間調べ続けたあの事件の事を……………」

ミゼットは静かにそう言うと、二人を連れて本局の上層の階に向かったのだった。

一方、ここは時空管理局本局無限書庫。

管理局のデータベースとも言われる場所ではやてはユーノに会っていた。

ユーノはいつになく真剣な眼差しではやてを見ている。その手には2冊の本が抱えられている。

「どうしたんやユーノ君。何かあったんか？」

はやては少し息を乱しながらユーノに聞く。

するとユーノは小さく頷くと、手に持つ2冊の本の内、やや分厚い本をはやてに見せる。

その本は良く見ると、沢山の資料がプロファイリングされたファイルだった。

タイトルには「最重要機密事案」と書かれている。

「実は、昨日もう一度無限書庫を調べ回っていた時に使われていない古い部屋があったんだ。そこで埋もれていた中から見つけたんだ。中を読んでみて……。」

ユーノはそのファイルをはやてに渡し、はやての中に書かれている

事を読むように促す。

はやては恐る恐るファイルを開き、中に綴じられた数多くの資料を見ていくと、だんだん顔が引きつり、言葉を失う。

まるで、信じられないものを目の当たりにしたような驚愕の表情をしていた。

「ユ、ユーノ君！これって……！！」

「……うん。僕も始めは信じられなかったよ。でも、JS事件で公になった管理局の裏の実態を考えると……可能性は十分過ぎる位だよ。あと、これ……」

言葉を失い掛けているはやてに、ユーノはもう一冊の本を渡す。その本はファイルよりも薄く、「救世主伝説」と書かれていた。はやてはまたもや恐る恐る中を見ると、そこには何やら童話が書かれていた。

「世界が危機に瀕した時、世界樹は一人の人間を生み出す。世界を守護し、全てのモノに光を分け与えん勇者……
・「デイセNDER」……。なんやこれ？ただの童話やないか……」

先程のファイルに書かれていたものから一気に童話が書かれた本を見せられて、はやては何が変なのか分からなかった。だが、ユーノはその本の最終ページを見るように促した。

「はやて、一番最後のページを見てみて。」

「えっ?」

ユーノに言われ、はやては本の一番最後のページを開く。するとそこにはミッドの文字でこう書かれていた。

” 遙か古の世界の光を纏いし者。時を経て、再びこの世に生を受け、その身に眠りし大いなる光の力目覚めし時、時空を護りし法の者はその役目を終え、大いなる光の世界が全世界を統治す。”

271

「!?ユーノ君、これって!」

「うん。騎士カリムの預言と酷似している内容だよ。……もしかしたら、なにかとてつもない事が起きるのかも《ヴィー!!!!!!!!!!ヴィー!!!!!!!!!!緊急事態発生!……!!緊急事態発生!……!!》何だ!?!?」

「!?!?」

ユーノの言葉を遮るように、突如としてサイレンが鳴り響く。はやてはその音に驚き、持っていた本とファイルを落とす。

落ちた衝撃で開いたそのファイルには、「新暦元年・リュミエールにおける7・7事件について」と書かれていた。

一方、ミゼットに連れられ、本局上層の一室でフィリス相談役、キール元帥を交えて3提督と話していた龍児とセスタは、突然のサイレンに驚いていた。

「何事だ!?」「し、失礼します!!!!!!」「!?!」

龍児は突然の事態に驚いていると、ドアを開けて、一人の局員が息を切らしながら入る。

キール元帥はその局員に尋ねた。

「一体何があつた!!」

「はあ、はあ、そ、それが………。たった今、ミッドチルダ地上本部からの報告で、クラナガン沖に10隻の次元航行船と無数のガジェットが出現!!クラナガンに向かって進行中との事です!!!すでに地上部隊が船から進行を押さえようとしています、被害は拡大しています。」

「「「!!!」」」

管理局員の報告に、三人は驚く。すると龍児はその局員に尋ねる。

「おい。ここからすぐにミッドへ戻れるか?」

「えっ!?あ、はい。転送はすぐにでも……。」

局員の答えを聞くと、龍児はセスタにアイコンタクトを送る。

セスタはそれを理解したような表情を見ると、二人は部屋を出ようとする。

そんな彼らにミゼットは声をかける。

「あ………。どうか無理はなさらずに……。」

「……分かっていきますよ。ですが、このままでは恐らく一般人にまで被害が及びます。だから、手助けにいきます……。」

・・・・・・・・・・・・・・・・わざわざお話してただけた
事。誠に感謝いたします。・・・・・・行くぞ、セスタ!!」

「了解!!」

二人の行動の意味を知ったミゼットは二人にそう言うと、龍児は静かに微笑みながら感謝を述べ、セスタと共に部屋を後にした。

それを見送った三人は、小さく溜め息をつく。

「・・・・・・・・いずれ、真実を公表するべきだと思っていたが・・・・・・・・
・・・・今がその時期だろうな。」

「ああ。最高評議会が居なくなり、我々も自由に動けるようになった。
・・・・・・・・公表せねばな。」

「ええ。75年前に起きた時空管理局史上最悪の汚点・・・・・・・・
・・・・・・・・〔7・7事件〕を・・・・・・・・
・・・・・・・・。」

三提督は覚悟を決めたような目で、席を立ち、部屋を後にしていったのだった。

第14話 本局での真実（後書き）

特別企画・キャラクター交流会

龍児「どうも、主人公の夜御倉龍児です。」

フェイト（L）「こんばんわ、ヒロイン（仮）のフェイト・L・ムーンです。」

セスタ「相棒の頼れる右腕のセスタ・ベルセリオスだよー。」

スバル（L）「こ、こんばんわ……。月光院スバルです。」

龍児「今回も始まりました、キャラクター交流会。今回もまた、重要大事様の作品で、現在龍元の「光の軌跡」とコラボしていただいております「ユーノ・スクライヤ外伝」ならびに「ユーノ・スクライヤ外伝・絆」のキャラクター達に質問をぶつけていきます。最初は、俺からユーノへ。”コラボで、セスタを相手に見事に勝ったわけですが、実際に戦ってみてセスタの実力をどう思いますか？また、もし特殊能力を使われていたらどうしましたか？”です。確かに、セスタは戦いが粗いんだよな……。”

セスタ「うつ……。つ、次はオイラから恋次さんに。”リュミエールの世界国家騎士団の仕組みを見て、護廷隊隊長としてどう思いましたか？また、改善点や推奨点等がありましたらよろしくお願ひします”です。」

フェイト（L）「次は私から、向こうの私に質問ではなくメッセージを。」向こうの私。なのは好きなのはいいけれど、それは友達としてで留めておきなさい。本当に大切に思うなら、彼女の幸せの為に一歩引くの！！！」です。」

スバル（L）「最後は私からナーノ様にメッセージを送りますノノノ」リュミエールでの待ち合わせ場所は、・・・・・・
・・・・私の故郷のフレア連邦共和国の港町・フレイヤの灯台下でお待ちしています。白色のワンピースとベージュ色のカーデガンを羽織って、麦わら帽子を被っていますノノノあと、お弁当も持ってきますので、よろしく願いますノノノ」

龍児「では今回は坂本真綾さんの「プラチナ」でお別れです。今回のコラボトリبون篇頑張ってください！！！！！」

用語集（キーワード編）（前書き）

重要ワード集です。

こちらでも、進むにつれ更新します。

用語集（キーワード編）

・世界樹（または母なる大樹）

龍児達の世界・リュミエールに存在する、世界を生み出したとされる巨大な樹の事。

地図上ではほぼ中央に位置する世界樹島にある。

全ての生命の源であり、魔術の発動に欠かせないエネルギー「マナ」を生み出し、世界中に供給・循環させている。

神話や文献では、世界と全ての生命は世界樹の被創造物であり、世界樹は全ての生命と調和を成しながら成長するとされている。

今現在、世界樹とそれがある世界樹島、およびその周辺海域は完全保護区域に指定されている。

また、リュミエールの主な宗教である世界樹信仰の発祥地であり、世界樹の傍には4000年以上前に築かれた世界樹大神殿がある。

・マナ

世界樹から生み出される、全ての生命の源ともいえる非物質エネルギーの事。

大気や大地、生命体には必ずマナが存在し、それにより生命は生きていくといわれている。

通常、大気中のマナ濃度は1立方メートル当たり20〜35%の割合

合で存在するが、世界樹やその根付近では40〜50%程存在する。リュミエールは世界樹の根が地表に露出している箇所が多いためか、全体的にこの数値を示す。

(因みに、50%より高い濃度になると、肉体と精神の解離現象が起きやすくなる。現在それ確認されている場所は、世界樹近くにある「聖地モンドウ・クール」と呼ばれる洞窟である。)
また、魔術を使う上で欠かせないものでもある。

・デイセンドー

ユーノが無限書庫で見つけた古い文献に書かれていた言葉。

伝説の勇者、世界の救世主などと呼ばれる存在で、世界に危機が訪れる時、世界樹が生み出す人間をさしている。

デイセンドーの名の由来は、古代神官語で「光を纏う者」という意味の言葉からきている。

生まれたばかりのデイセンドーには世界や自分の経歴に関する記憶は一切無く、不可能も恐れも知らない無垢な存在であると神話で伝えられている。

世界各地にはデイセンドーに関する記録が残されているが、ほとんどが昔の人の空想や創作話であり、一般的には存在しない者と認知されている。

第15話 ミッド強襲・それぞれの思い（前置き）

今回は本格戦闘の前置きです。

ではでは……。

第15話 ミッド強襲・それぞれの思い

龍児とセスタ、はやてが本局に行っている同時刻。

第1管理世界・ミッドチルダ

首都クラナガンから10?程沖に行った海上で、一隻の巨大な次元航行船が宙に浮いている。

その船の側面にはx印がうたれた時空管理局のエンブレム、そして、抽象的な太陽の紋様が並んで描かれている。

さらにその周りには無数のガジェットが赤いコードのような触手をうねうねと動かしながら待機している。

「うふふふ、なかなか壮観どすなあ〜。」

「ああ。そうだな。」

その甲板に黒いドレスを来た女性ヴァルゴと、金髪に黄金の鎧を纏った男が並んで立っていた。

「これだけのガジェット部隊が作れるのも、ジェイル・スカリエツティは私が私らに協力してくださったお陰どすなあ〜」。おほほほほ

ヴァルゴは口に手を当てて高飛車気味に笑う。

すると二人の乗っている次元航行船の周りに、似たような次元航行船が9隻現れた。

そして、二人の前にモニター画面が現れ、4人の男女が映し出される。

《がはは！！おい、指示はまだか？暴れたくて仕方がねえぜ、がはははは！！！！！！！！》

《こっちは、いつでも準備出来てるわ。》

《そうなのである。いつでも構わないのである。》

《さっさとしろよ！！！！俺達に楯突いた奴等をじわじわ苦しめてやるんだからよ！！！！！！ひゃっは〜！！！！！！！！》

「まあ、そう急ぐ必要もない。まずは……、余興を楽しもう。

「。。。。」

モニター越しに言う4人に、金色の鎧姿の男は怪しい笑みを浮かべそう言つと、声高らかに宣言した。

「諸君！！我が王と、そのお方に選ばれた我らの意思を無視した愚か者達に、今、大いなる光の鉄槌を下そうではないか！！！！！今回の作戦は奴等に我々の力を知らしめる事だ。指揮はこの私、レオンが執る。さあ、行くのだ！！！！！！！！！！」

《うおおおおお！！！！！！》

金色の鎧の男・レオンの言葉に10隻の戦艦に乗る、剣や銃といった質量兵器やデバイスを所持した数多の武装兵は武器を高く挙げ、雄叫びを挙げる。

その数は1隻当たり約1000人程。

単純計算で約10000人近くの武装兵が挙げる雄叫びは、静寂を保っていた大海原を大きく揺らし、天地に隅々まで轟いていた。

そして武装兵達のうち、空を飛べる者はハッチから飛び出し、そう

でない者は戦艦に載せられていたのへりに乗り込み、首都クラナガンに向かって侵攻を開始したのだ。

「うふふ。私たちの出番はあるのやろつか……。」

《がはは！！俺達がなくても、彼奴等だけで十分だろ。》

《大いなる光の力を与えられたのよ。そこらの雑魚、相手にすらないでしょ？》

《その通りである。それが「全世界統括組織・天帝軍」なのである。》

《ケツ！！おいしいとこまで持っていったら、ぶつ殺す！！！！》

「まあ、我らはここで高みの見物といこうではないか。……ふふふ。騒動が起きれば、必ず貴様は現れる……。そうだろ。……。「光の守り人」よ……。」

5人が口々に言っている中、レオンは青く澄んだ大空を見上げながら、自身の脳裏に映った一人の青年の事を思っていた。

一方、ここは機動六課の隊員が普段デスクワードを行う部屋。ここでモニターを見ながらコンソールを叩くスバルは、手掛けていた仕事を終えると、両腕を上挙げ背伸びをし、隣で仕事をしているティアナに話しかける。

「あ〜っつ、資料整理終了つと。ねえティア。そろそろお昼だし、たまには外に食べに行こうよ。」

「そうね……。私の方も丁度終わつたし、午後の訓練まで十分時間もあるし、……。いいわ、行きましょう。」

ティアナはそう言うと手早く画面をしまい、椅子から立ち上がると、椅子の背もたれに掛けていた上着を着る。

スバルも椅子から立ち上がり、二人は部屋を後にする。

すると、丁度部屋を出た所で一人の女性と出会う。

「あれ、ギン姉。どうしたの？」

スバルがキョトンとした表情で女性を見る。

その相手の女性はスバルの2歳年上の姉で、陸士108隊所属の捜査官を務める魔導師、ギンガ・ナカジマ陸曹であった。

ギンガはスバルを見て笑顔で答える。

そして3人が丁度隊舎を出たその時……。

ドオオオオオオン！！！！！！！！

「「「!?!?!?」「」「」

突然隊舎の反対側、地上本部がある方向から轟音が響き渡る。まるで、ミサイルが着弾したような激しい轟音。それに混じって、大勢の人の雄叫びと悲鳴が聞こえてきた。

「何、一体何なの!?!?」

ティアナが突然の事に驚いていると、モニター画面が表示され、警告音と共に「アラート」と赤い文字で映し出された。同時に通信が開き、ロングアーチのルキノから告げられる。

《緊急事態発生!!今現在、地上本部及び首都クラナガンがガジェット・ドローン?型と武装した兵による攻撃を受けています!!各

り東部市民の避難誘導に加わりませす！！》

「了解。いいか、何としても持ち耐えろ！！……しかし、まずいなあ……。」

突如として多数のガジェットと武装兵の攻撃を受けていた首都クラナガンと地上本部。

その事態に対処するために、地上本部はミッドチルダにいる全ての陸士隊はクラナガンに急行するように指示を下していた。

今、事態に対処している陸士108隊を始めとしたクラナガンとその付近にいる陸士隊の指揮を執る108隊の部隊長のゲンヤ・ナカジマ三等陸佐は局員達の報告を聞きながら、焦りを募らせていた。

先のJS事件解決から2ヶ月程。

破壊された施設や町は大部分が修復・整備され、傷ついた局員や市民も殆ど回復している。

だが、それでもいまだに復興できていない箇所があり、また治癒しても人々の心の傷までは治癒していない。

現に管理局員の多くが事件後、ストレスが原因の不眠や食欲不振、倦怠感等の症状に悩んでおり、メンタルケアを週3回実施している程だ。

そのような状況下で襲撃を受けた事で、局員の中には絶望感が広がっている。

ゲンヤはそんな中で局員達をまとめ、市民の避難誘導と敵勢力の迎撃の指揮を上手く執っている。

「（俺達がここで止めねえと、今度こそミッドは壊滅だ。なんとかしても、凌ぎきるー!!）」ナカジマ三佐!! 大変です!!」! どうした!!」

指揮を鳥ながら一人考えていたゲンヤに、局員が慌てて近づき報告をする。

「はあ、はあ、…… たった今、地上本部から緊急連絡で……
…… 聖王教会本部周辺に複数のガ
ジェット反応を確認!! 本部に向かっているとの事です!!」

「な、何だと!!!!!!」

局員の告げた言葉にゲンヤは目を見開き驚愕する。

そう、ミッド北部のベルカ自治州にある聖王教会本部には今、クラナガン市民が避難している。
転送装置で大勢の人間を送っているので、教会にはかなりの数の人がいる。

その周りにガジェットが現れた。

あそこには教会騎士や局員がいるが、万が一斉攻撃を受けたら、一般人まで被害が出る。

そう考えたゲンヤは急いで局員に言う。

「現地に本局の魔導師部隊の派遣を要請しろ！！絶対に犠牲者を出すわけにはいかねえんだ！！」

「りよ、了解！！」

ゲンヤの指示を受けた局員は本局に応援を要請する為に急いで部屋を出ていく。

それを見届けたゲンヤは神妙な表情で机の上に置かれた1つの写真立てを手取る。

そこには紫がかった青いロングヘアの女性がこちらに微笑む写真が納められていた。

「……………また、大変な事になっちまったぜ。こんな時、お前ならなんて言っただけで励ましてくれたんだろうな……………」

「……………女房……………」

写真の女性を見て話すゲンヤ。

その瞳には悲しみと静かな決意が溢れていた。

一方、本局の通路を転送装置に向かって走る龍児とセスタ、はやてはミッドが襲撃されているにも関わらず、なかなか動こうとしない提督クラスの局員を見て、溜め息ながらに言う。

「なんだコイツら。ミッドが襲撃を受けているのに、なんで動こうとしないんだ？」

「だよね。同じ局員で、一般人まで巻き込まれそうなのに……」

「本局と地上本部は昔から仲が悪いんです。互いに主張を突っ張ったままで……。本局は自分達が優位だと言い、地上本部は魔導師を始め、優秀な人材と予算の潤沢を言っていて、それを互いに認めようとしません。」

はやてが管理局の実態を話すと、龍児とセスタは溜め息をつき、呆れた表情で言う。

「……なんという事だ。1つの組織で、世界を守護すると謳っておきながら、いざという時に互いに協力できないとは……」

「全くだよ。いがみ合っても何にもならないのに……。」

「取り敢えず、俺達は急いでミッドに戻ろう。はやて様、転送装置は？」

「もうすぐの筈ですわ。ミッドに戻り次第、お二人には六課の皆と一緒に戦ってもらいますが、よろしいですか？」

事態の収集に協力して欲しいというはやての問いに、龍児とセスタは大きく頷く。

「ええ、こっちはそのつもりです。」

「困っている人をほっといたら、リュミエールの皆に顔向け出来ないもんね。それに、人を助けるのに、許可も何もいらないよ。」

二人の力強く温かい言葉にはやては胸が暑くなる。

先程無限書庫で見たファイルの内容から、はやては二人がどう言うか不安だったが、二人の真っ直ぐに前を見て言った言葉に嘘はないと信じた。

「（あれが事実なら、私らは恨まれても仕方ない事や。でも、この二人はそれにも関わらず私らに協力してくれる。……私らも、頑張らないいけないな……）……、ご協力感謝いたします。ほ

な、急ぎましよう!!」

「ええ!!」

「おう!!」

頭の中でそう感慨にふけったはやては二人に感謝すると二人に急ぐように言う。

それに2人は真剣な眼差しで答え、3人は通路を必至に走るのであった。

第15話 ミッド強襲・それぞれの思い（後書き）

特別企画・キャラクター交流会

第9弾

龍児「どうも、世界国家騎士団2番隊隊長の夜御倉龍児です。」

フェイト（L）「こんばんわ。世界国家騎士団2番隊副隊長のフェイト・L・ムーンです。」

セスタ「どうも、世界国家騎士団5番隊隊長のセスタ・ベルセリオスだよ。」

スバル（L）「こ、こんばんわ。世界国家騎士団5番隊副隊長の、月光院スバル……です。」

龍児「今回で9回目を迎えたわけだが、まさかデビューからたった2ヶ月でここまで友好関係が築けるとはな……。実にありがたい。」

フェイト（L）「うん。読んでくださっている人も少しずつは増えているし、ホントに感謝します。」

セスタ「では、さっそく質問タイムだよ！！まずはオイラからシグナムに……。"世界国家騎士団の隊員達と戦ってどうでしたか？また、戦ってみたい人はいますか？"です。」

スバル（L）「次は私から向こうの私に……。」あの、向こうの私は格闘が得意みたいですが、私の戦い方はどんなものだと思いますか？”です。……あの、これって難しいのではないですか？私の戦い方、と言うより武器がかなり特殊みたいなので……。」

フェイト（L）「ああ……。だよ。まさかあれによって感じのものだからね……。えっと次は私から向こうの私へ……。」
向こうの私は、初めて私を見てどう思いましたか？できれば、これからどうしていききたいかも答えてください。”です」

龍児「はは。スバル（L）もフェイト（L）ももう一人の自分がやっぱり気になるか……。じゃあ最後は俺から、皆さんに……。」
”前話から「7・7事件」という言葉が出てきてますが、一体どんなものだと思いますか？また、敵対勢力と管理局との間に何かあると思いますか？”です。……それでは、今回はこれにて。今回はBACK-ONの「Fry away」でお別れです」

全員「「「「See you!!!!!!」」」」

第16話 開戦（前書き）

今回から本戦の開始です。

まだまだ序盤ですが頑張っていきます。

ではござい。。。

第16話 開戦

新暦75年11月4日午前11時58分

ミッドチルダ首都クラナガン

突如として現れたガジェットと武装兵の軍団の雨のような攻撃を、必至に迎撃する管理局陸士隊。
クラナガンの港地区を中心に戦闘は激しさを増していた。

「うおおおお!!」

「ぐっ!!この!!」

「待ってる、直ぐに援護する!!」

ドオオオオン!!ドオオオオン!!

《こちら第6班!ガジェットドローンの侵攻を受け、負傷者多数!
!至急援軍を!!》

「くそっ!!本局の魔導師隊はまだか!!」

「頑張れ！！今機動六課がこちらに向かっている。それまで持ち堪えるんだ！！！」

「手を緩めるな！！局員共を皆殺しにしろ！！！！！」

武装兵の容赦無い魔力弾の攻撃を辛うじてかわし、陸士隊と魔導師部隊はデバイスを用いて反撃する。だが、そこに大砲が打ち込まれる。

「てめえら、死ぬ！！！」

「何、ぐああああ！！！！！」

ドオオオオオン！！！！！！

数発の大砲から爆弾が放たれ、魔導師や局員のいる場所に着弾・大爆発を起こす。数多くの局員達の断末魔が聞こえ、だが虚しく砲撃で掻き消されていく。

「こ、こちら第9班……。武装兵の……。襲撃に合い……。か、壊滅しまし……。た……。た……。た……。た……。」

「部隊長……。申し訳……。ありま……。せん……。せん……。せん……。」

「おおおお！！！！」

魔導師を中心に迎撃した管理局側だが、無数のガジェットと武装兵の猛攻にあい、一人、また一人と倒れていく。それを見た武装兵は勝利を祝うかのように天高く雄叫びをあげる。

すると、彼らは倒れた管理局員を一人一人抱え、運んでは、港付近の広場の一ヶ所に置いていく。

そこにはガジェットのレーザーに貫かれ、武装兵の魔力刃や魔力弾、質量兵器などによって命を奪われた局員の亡骸が山のように積み重ねていた。

武装兵達はその亡骸の山の頂上に一本の旗を掲げる。

そこ描かれていたのは、魔法などで描かれるような太陽と、それを囲うように記された十二星座だった。

武装兵達は武器を高らかに掲げ、何かを祝福するかのように言葉を連呼する。

” 大いなる光の世界を統べる王と、12の星騎士様に栄光あれ！！！！！！！！！！”

その光景は、まるで革命が起き、積み上げられた瓦礫の山で勇ましく叫ぶ勇者とその同胞に酷似していた。

それを見ながら悠々と武装兵に近づく6人の男女。

1人目は金色の短髪に深紅の瞳、輝く金色の鎧姿の男性。

2人目は紫のショートヘアに黒色の瞳、足首まである漆黒のドレスを纏った女性。

3人目は白色の短髪に紅い瞳、上半身は筋肉質の裸に白の長ズボンを履いた大男。

4人目は群青色ロングヘアに水色の瞳、青色の水着姿に腰からは水色の半透明のベールを巻いたセクシーな女性。

5人目はスキンヘッドに黒の瞳、紫のTシャツと長ズボン、黒色の革ジャンを着、身体中にドクロや鎖を付けた人相の悪い男。

6人目は茶髪の長髪を後ろで纏め、青色の瞳、ハンターのような服装の長身な男性。

いずれの者も腰や背中に武器を持ち、手の甲や首には旗と同じ太陽の紋章が描かれていた。

そんな彼らを見て、武装兵達は彼らの両側に一列に並び膝を着く。そして、頭を下げ声を揃えて言った。

「……わざわざお疲れさまですー！星騎士レオン様、ヴァルゴ様、タウロス様、アクエリアス様、スコープィオン様、サジタリウス様！……！！！！！！」

武装兵達の叫びに星騎士と呼ばれた6人は怪しい笑みを浮かべると、兵に戦況を聞く。

「戦況はどうだ？」

「はっ。今現在クラナガン港地区の殆どを制圧。既に第2部隊、第3部隊は地上本部のある中心部に向かい侵攻中。いまだ管理局側の抵抗はあり、当初の予定より僅かに時間が掛かっていますが、問題はありません、レオン様。」

「そうか……。だが油断はするな。向こうにはエース部隊・機動六課がいるのだ。それに……。今回の我々の目的はあくまで、警告である事を忘れるな。」

「はっ！……！！」

金色の鎧姿の男・レオンは武装兵の報告を受け、理解した表情をすると、武装兵に指示を出す。

それを聞いた武装兵は頭を下げて了解すると戦闘が繰り広げられて

いるエリアに向かって走っていく。

すると隣に居た女性・ヴァルゴは微笑みながら手袋を嵌め直し黒い蝶を呼び出す。

「ほな、ちょっと様子を見てきてや。」

ヴァルゴは黒い蝶にそう言つと、空高く手を掲げる。

すると黒い蝶はひらひらと優雅に舞い、戦いが繰り広げられている場所に向かって飛んでいく。

タウロスはそれを見ると、ヴァルゴに話しかける。

「なんだ？戦いの様子でも調べるのか？わざわざ召喚しなくてもいいだろう？」

「いえ、的確に情報を得るには連絡蝶を使うのが一番効率がええんどす。それに、さつきから大きな魔力が複数感じますさかいに……その偵察の意味も込めて……どすえ……。」

タウロスの問いに対しヴァルゴは目を閉じてそう答える。

それを聞いたレオンや他の3人は揃って目を閉じ、ヴァルゴの言った大きな魔力を感じ取る。

「……確かにデケエな……。特に4つ……。ん？いや7つか？」

「もしかして、これが噂の機動六課かしら？」

「その可能性は十分あり得るのである。しかも、場所から考えてガジェット部隊がいる場所である。」

「…………ふっ。どうやら着いたみたいだな。……………
…見せて貰おうか、エース部隊と噂される機動六課の実力、そして……………
……………「貴様」の実力を……………」

それぞれが分析結果を言うなか、レオンは余興を楽しむかのように微笑を浮かべていた。

それより数分前。

クラナガンの港地区から中心部へ通じる道路でガジェットの大群を相手に交戦を続ける陸士隊の隊員達。

必至に魔力弾をガジェットに向かって放つが、アンチマギングフィールドAMFと呼ばれるフ

イールド系防御魔法によって打ち消されている。
その間にもガジェットはレーザーを発射し、管理局員を狙う。

「ぐっ!!ガジェットにこれ程まで苦戦するとは……!!」

「コイツら、JS事件の時より強くなつてないか?」

一人の局員が瓦礫を盾がわりにし、隣の局員に話しかける。
話しかけられた局員はその問いに首を縦に振り肯定する。

確かに、ガジェットの侵攻速度や攻撃能力、AMFの性能は以前のJS事件の時より格段に高くなつており、また殺傷能力も上がつていたのだ。

そのため、一発でも喰らえば魔導師で無い限り死は確実であり、瓦礫を盾がわりにしないといけない程になっていた。

「ぐわっ!!!!」

「がはっ!!!!」

そう話している傍から、局員が二人ガジェットの攻撃を受け倒れる。他の局員が慌てて近寄るが、心臓の近くに当たったらしく、傷口からは血が溢れでており、既に意識は無かった。

「くっ!急いで止血と担架を!!」

「は、はい!!!!………ぐあっ!!!!!!!!」

局員が担架を運ぼうと動いたその時、ガジェットの後方から3発のミサイルが飛んで来て着弾・爆発を起こす。

それにより多くの局員が吹き飛ばされ、負傷する。

その間にもガジェット、そして後方の武装兵達は侵攻をする。

まさに無慈悲、残虐極まり無い敵の攻撃に、管理局員達は言い様の無い敗北と絶望、無念さを感じていた。

「ま、負ける……………ものか……………」

そんな中、一人の管理局員であり魔導師でもあるシン・シュバルツは満身創痍になりながら銀色に輝く自身の長剣型のデバイスを手に取り、立ち上がる。

だが、すでに体の至る所からは血が流れている。

そんな彼を見た武装兵は不適な笑みを浮かべ言う。

「へえ、あの散弾型ミサイルを喰らってまだ立つ奴がいたとはな……………まあ、どちらにしる、ここで死ぬのは変わらないがな……………」

武装兵はライフルを構え、銃口の標準をシンの左胸に向ける。

「せめて、楽に逝かせてやるよ。死ね!!!!!!!!!!」

「くっ。(こっ、までか……………。)」

武装兵はライフルの引き金に指を掛け、引き金をゆっくりと引こうとする。シンは目を閉じ、自分の死を受け入れようとした。

丁度その時

「落ちよ、石化の槍。ミストルティン!!!!!!!!!!」

「舞え、水刃。アクアエッジ!!!!!!!!!!」

「何、ぐあっ!!!!!!!!!!」

突然、ライフルを構えた武装兵は空から来た槍と水の刃を受け吹き飛び、気を失う。

武装兵達が慌てて空を見ると、そこには二人の男女が浮いていた。

一人は騎士装甲を纏い、黒い翼を背中に生やした女性・八神はやて。もう一人は純白の服と鎧を纏い、足元に出来た小さな風の渦で宙に浮く男性・夜御倉龍児。

はやてはシュベルトクロイツと夜天の書を、龍児は龍王牙をそれぞれ持ち、ガジエットと武装兵、傷ついた局員を見渡し、地面にゆっくりと足を着ける。

「大丈夫ですか？」

「あ、はい……。ありがとうございます、ございます、八神二佐／＼／＼」

はやてはフラフラになっているシンに近付き、無事を確認する。それにシンは頬をやや赤く染め礼を言う。

それを見た龍児は表情には出していないが、内心驚いていた。

「!?(そんな……。まさか、母様だけでなく父様まで……。! いや、異世界の似た人か……。こんな事があるのか……。)。」

龍児はそう考えていると、武装兵達が騒ぎ始める。

「おい、見るよ。「最後の夜天の主」の八神はやてだせ。」

「マジか！こんな所で「歩くロストロギア」に会えるなんて・・・
・・・中々の上玉じゃねえか・・・ひひひ。」

「あの女を捕らえ、星騎士様のお許しが出たら、徹底的に楽しもう
ぜ。うししし。」

武装兵の何人かが下品な笑みを浮かべはやてをじろじろと粘っこい
視線を送る。

そして、はやてに向かって数人走り出す。

狙いは完全にはやて。

はやてはやや身震いし、シュベルトクロイツを構え、魔法を発動し
ようとする。

だが、

「「「「「「「「ぐあああー！！」「」「」「」「」

「「え？」「」

はやてとシンは目を疑った。

はやてに向かつて走り出した数人の武装兵が、一瞬にして斬り裂かれたのだ。

斬られた武装兵は血飛沫をあげ、物言わぬ屍となり地面に力無く倒れる。

その彼らの前には、純白の意匠を鮮血に濡らし、返り血を浴びた龍王牙を持つ龍児が静かに立っていた。

はやては恐る恐る龍児に話しかける。

「りゅ、龍児さん？」
「……………はやて様。そして、そこで戦つておられた貴方様。」
「……………」

「えっ……………」

はやての言葉を遮り、龍児ははやてとシンに向かつてこう一言告げた。

「……………あなた方の御命は……………俺が守ります。必ず……………」

龍児は少し潤んだ、しかしはつきりと読み取れる強い意思の目ではやて達を見ると、武装兵達に向き直り、龍王牙を構える。

」。

龍児の詠唱に伴い、空を暗雲が覆う。

はやてとシンは固唾を飲み、龍児を見守る。

「な、なんだ!？」

「おい、ヤバくねえか!？アイツから感じる魔力、尋常じゃねえ!」

武装兵が騒ぎだす中、龍児は静かに彼らを見、そして告げた。

「せめて、痛みも感じぬまま……………
・終わらせる……………
・降り注げ、裁きの鉄槌。ジャッジメント!……………!」

龍児は詠唱を終え、右手を天高く掲げ、そして勢い良く振り下ろす。

すると空を覆う暗雲から数多の光が武装兵達の居る場所目掛け降り注いでいく。

それはまるで、天から地に向かって伸びる光の柱のように、或いは

天より落ちる神の鉄槌のようにガジェット、武装兵を次々と呑み込んでいく。

そして数秒間降り注いだ光の雨が静かに消え、暗雲が去り、真つ青な空が蘇ると、光が落ちた場所には、確かに先程まで居たガジェットの大群と武装兵の一団が、跡形もなく消え去っていた。

大地には確かに何かがあった後はあった。

だが、およそ100のガジェットと200は居たであろう武装兵の姿は何処にも無かった。

そう、それはまるで神隠しにあったかのように、その場から蒸発してしまったのである。

龍児はそれを確認すると、龍王牙を自身の体の前に持っていき、目を閉じて言う。

「せめて彼らに……安らかなる眠りと、大樹の
加護があらんことを……。」

その表情は、何処か切なく、そして虚しい雰囲気醸し出していた。

第16話 開戦（後書き）

特別企画・キャラクター交流会

（祝）「ユーノ・スクライヤ外伝 リュミエール篇」

BGM「Welcome to the world！」

龍児「どうも、「光の軌跡」の主人公兼世界国家騎士団2番隊隊長を務めます、夜御倉龍児です。今回はいつもと趣向を凝らし、先週から始まりました、大先輩である作者・重要大事様の小説「ユーノ・スクライヤ外伝」とのコラボレーション企画。これからどんな物語が紡がれるのか、ますます期待に胸踊らす我々ですが、ここでそのコラボを祝って、座談会を開催したいと思います！」

手入れが行き届いた庭を眺められる部屋で、龍児は席の横に立ち話を続ける。

龍児「なので、本日は第1回目の客人として、「ユーノ・スクライヤ外伝」の主人公である青年、ユーノ・スクライヤにご登場していただきます。ではどうぞ！！！！」

襖が開き、ユーノ・スクライヤが登場。

周りのギャラリィから拍手喝采が起こるなか、ユーノは龍児と握手

を交わす。

龍「良く来てくれた。歓迎しよう、ユーノ。」

ユ「はは、普通にしてくださいよ龍児さん。そんなに大層な人間が来たんではないんですから。」

龍「……………それもそうだな。さっ座つてくれ。……………
……………ではまず、この度のコラボ企画。作者龍元とリュミエールの民に代わって礼を言う。ホントにありがとうございます。」

ユ「いえいえ。こちらこそ、いつもご丁寧なご感想を頂けて、ありがとうございます。」

龍「ふっ、まあなんだ。こうして出会えたんだから、色々話を聞こうと思うが、構わないか？」

ユ「ええ、どうぞ。」

龍「じゃあ、まずは今回のコラボ企画が決まって色々大変じゃなかったか？」

ユ「そうですね……………。やっぱり他作者様とコラボは大変ですよ……………。光の軌跡の作風をうまく表現できるか、というのがかなり厳しかったですね。あと、リュミエールには美人さんが多いと聞いて、浦太郎が暴走するのが予想できたのでどうしようと思ったんですが、案の定そうになってしまい、なんかすみません……………。」

龍「いいさ、むしろギャグ要素が薄い光の軌跡に新しい一面を与えてくれたんだ。こちらとしては感謝の限りだ。あと、なのはとはど

うなんだ？」

ユ「うっ！／／／／／やっぱり聞きますか．．．／／まあ、順調ですね．．．．．／／／／／」

龍「そうか．．．。まあ、早く身を固めて、なのはとヴィヴィオを守ってやれ。」

ユ「はい．．．。でも、それは龍児さんも．．．。ですよ。」

龍「ぐっ／／／／／痛い所を疲れたな．．．。まあ確かにな、フェイト（L）の母様や総隊長、使用人にまで”早く結婚しろ”って言われているしな。8歳に許嫁になってからもう15年も経つし．．．．．そろそろ考えないといけないな。」

ユ「そうですね。僕よりもまず貴方ですよ。」

龍「まあ、努力しよう．．．．．／／／／／という訳でお時間が来てしまいました。今回はありがとなユ一ノ。」

ユ「いえいえ、僕も楽しかったです。これからもよろしく願いますね。」

龍「ああ。次回はユ一ノの婚約者でヒロインの高町なのはが来ます。では最後に質問を送ります。」

質問：

ユ一ノ君と一護さんに。

本作品において、気になる単語、又は事柄はなんですか？
理由付き、複数回答有りですのでどんどん言ってください。

龍「ではまた次回、お楽しみに……！」

第17話 謎の声（前書き）

予定を変更して六課との共闘前の出来事です。

ではどうぞ。

第17話 謎の声

龍児の光属性広域殲滅系魔術「ジャッジメント」の威力を目の当たりにしたはやてとシンは腰を抜かしていた。

「な、なんや今の……。あの数の人を一瞬で消し去ってしまっただ……。!!!!!!」

「彼は……。一体……。」。

あれだけの数の敵が、たった一人の人間にたった一撃の力で消滅する。

そんなとても信じかたい光景を目の当たりにし、驚愕と恐怖を抱く。するとそこにガジェットと武装兵の集団が再び現れ、その場の惨状を見、愕然とする。

「な、何!?!」

「この一帯には第3部隊が展開していた筈だが、何処に?」

「おい、あそこ見ろ!!!」

ざわざわと騒ぎ始める武装兵だが、一人が龍児を指差す。

そう、彼の周りには先程はやてに襲いかかろうとし、龍児に一撃で倒された数人の武装兵の亡骸がいたのだ。
それを見た武装兵達は各々武器を構え臨戦態勢を取り、龍児に話しかける。

「おい、貴様！！ここにいた我らの同志をどうした！！！！」

武装兵の中でも、かなりの恰幅があり、衣装も他の武装兵の甲冑姿と違い、将校を思わせるような格好の男が銃剣片手に声を張り上げて言う。

それに龍児は鋭い目付きでその男を見つめ静かな口調で言う。

「俺が魔術で……………殺した。」

「な、んだと……………！！」

龍児の言った言葉に将校姿の男は衝撃を受ける。

ここにいたのは推定200人近い武装兵とガジェット部隊。

しかも、一人当たりA〜Sクラスの魔力値や陸戦能力を持つ者達だ。

それらを相手を、通信が途絶えてから自分達が到着する僅か2分で倒した。

そんな事が可能な局員がいるのか、と思っていたのだ。

驚き、動揺する彼らを余所に龍児ははやてに言う。

「はやて様。ここは俺が食い止めます。あなたはなのは達と合流して指揮を執ってください。」

「な、何を言うてんですか！？私も一緒に……。」

「いえ、まずは六課の前線部隊と合流し、事態の收拾を急ぐべきです。そのためにも、部隊長であるあなたが指揮を執らなければならぬのです。それに……。」

龍児は視線をはやてからはやてが抱き抱えている局員シンに移す。

「深傷を負った彼を一刻も早く手当てする必要があります。ですので、ここは俺に任せてください。後にセスタも来る筈なので心配には及びません。」

「でも……。」

龍児が淡々と言葉を述べるのを聞いて、はやては少しずつは納得しているが、やはり一人この場に残して行くのははやて自身気が引ける思いがした。

それではやては言葉を濁すが、龍児ははやてを見て優しい笑みを浮かべる。

「大丈夫です。何とかしてみせます。」

何処か暖かく、それでいてスゴく切ない……
……そんな感じを思わせるその優しい微笑みは、まるで10年前の闇の書事件で自ら使命を全うし消えていった初代リインフォースのものと酷似していた。

それを見たはやては何とも言い難い気持ちになる。

出来る事ならここに残り、共に事態の收拾に務めたい。

しかし、抱えているシンをほっておく訳にもいかない。

龍児の言う通り、シンの状態は深刻だ。

バリアジャケットはボロボロに裂け破れ、そこから血が流れ出ている。

所々何かの破片が体に刺さっていて、一部皮膚が変色している箇所もある。

頭からの出血も酷く、左腕は骨折しているのか通常なら有り得ない方向に曲がっている。

はつきり言っただけでも治療をしなければ、確実に死ぬ可能性がある。

しかし、だからと言って龍児一人におよそ1000人程の武装兵の相手をさせる訳にもいかない。

一体どうすれば良いのか、はやては困惑している。

すると、見かねた龍児は左手をはやての方に向け、白色の魔法陣を出す。

一瞬呆気にとられたはやてだが、次第に自分とシンの体が消えていくのを感じる。

「えっ!?!」

「さあ、行ってください!?!?!」

驚くはやてに龍児はそう言うと、転移魔術を発動させ、はやてとシンはその場から完全に消えた。

それを静かに見届けた龍児は武装兵達の方を向くと龍王牙の剣先を兵に向け、言い放つ。

「覚悟は出来ているな……。掛かって来い!?!?!」

その声と同時に武装兵とガジェット、合わせておおよそ1000近い大群が龍児目掛けて襲い掛かる。

龍児は龍王牙を構えたまま武装兵達に向かって走り出していく。

はたして、この戦いの結末はいかに!!

一方、龍児によって飛ばされたはやてとシンとはある隊の隊舎前に居た。

はやては慌てて立ち上がり周りを見渡す。

そこには突然の攻撃に対抗しようと懸命に戦う局員や魔導師とその後方で情報収集と指示を出す局員達の姿があった。するとその局員がはやてとぐったりとしているシンに気が付くと、慌てて近づいてくる。

「や、八神二佐!!それにシュバルツ三佐!!どうされたのですかその怪我は!!」

「敵の攻撃を受けて重傷なんです!!早く病院へ!!」

「あ、はい!!!!!!」

局員数名によりシンは担架に乗せられ、聖王教会の病院に運ばれていった。

「ここは……陸士108隊の隊舎前……。」「はやてちゃん！
！！！！」「！？」

はやては隊舎を見て自分が何処に居るの把握すると同時に、上から自分を呼ぶ誰かの声を聞く。

すつと振り返り空を見ると、その声の主・高町なのはがバリアジャケット姿で現れ、ゆっくりと地面に降り立つ。

なのははやての無事を確認するとほっとした顔をする。

「良かった、無事で。セスタさんから龍児さんと二人で何処かに飛んでいった……って聞いて心配してたんだよ。」

なのはの言う事にはやては納得する。

確かに、本局から戻ってすぐ龍児と一緒に爆発が起きた先程の場所に飛んでいった。

その時セスタはガジェットと戦闘していたのだから、なのはの言っている事は正しい。

はやては苦笑いすると、なのはに状況を聞く。

「ごめんな。で、状況はどうなってるん？」

「あ、うん。クラナガンの港地区は完全に制圧されて、今はその地区と接する大通りを中心に陸士隊や魔導師隊で応戦。敵の勢力は推定1万。ガジェットも数多く確認しているよ。フェイトちゃんやシグナムさん、ヴィータちゃん、FWのみんなも食い止めているけど、結構な数でかなり苦戦しているよ。」

なのはの報告を受け、はやては頭を抱える。

いくらフェイト達でも、流石に数が多いと苦戦するのは仕方ない。だが、となると状況はかなり悪い。

住民の避難は順調に進んでいるようだけど、なんとか打開しなければならぬ。

そう考えていると、突然はやてに通信が入る。

通信の相手はどうやら108隊のゲンヤ・ナカジマのようだ。

《八神!!!聞こえるか!!!》

「どうかしましたかナカジマ三佐?そんなに慌てて.....」

《ついさつき避難先の聖王教会から連絡があつてな。ガジェットの大群が向かっているそうだ!!!》

「ほ、ホントですか!?!」

《ああ。局員や教会騎士がなんとか押さえられているみだが、そう長くは持たねえみたいだ.....。悪いが六課から誰かわかせてくれねえか?》

「はい!!!分かりました。すぐに向かわせます!!!!!!.....」

「……なんちゅーつちや……。なのはちゃん、悪いんやけど向かってくれへんか？」

通信が切れるとはやてはなのはに聖王教会に向かうように言う。それになのはは首を縦に振る。

「うん、いいよ。急いで行ってくるね。ヴィータちゃん。」

はやての頼みを聞き入れたなのはは、通信を開きヴィータに話す。

《あつ、どうしたなのは？》

「聖王教会の方にガジェットが現れたみたいなの。これからそれを迎撃に行ってくるけど、戻ってくるまでの間、指揮をお願いできる？」

《マジか！？じゃあ行ってこい！！その間、あたしがしっかり押さえてやる。》

「うん、ありがとうヴィータちゃん。……………」
「それでは八神部隊長、行ってきます。」

「うん。気を付けてな。」

ヴィータから許可をもらい、なのはとはやては互いに敬礼すると、

なのはは空高く飛び上がり、聖王教会のある方角に飛んでいった。はやては一呼吸入れると、局員達が戦闘を続ける中に向かい、援護と指揮を始めるのであった。

「はああ！！！！」

「ぐああああ……。」

そんな中、一人残って1000人近い敵の相手をしている龍児は確実に一人一人仕留めていた。本当なら気絶程度で済ませるのが龍児の戦い方の根幹なんだが、数が多く、また時間的余裕も無い為、今回はいつも付けている無属性補助系魔術「アンチ・キル」を解除して戦っている。

故に龍児の足元には斬られた武装兵達の亡骸が倒れている。

「怯むな！！敵は一人だ。数で畳み掛ける！！」

先程の将校姿の男が武装兵達に激を飛ばして言うと、武装兵は銃を構え、一斉掃射する。

それと同時にガジェットはレーザーを連射、魔導師は魔力弾を撃ち込み、龍児を仕留めようとする。

だが、龍児は二重に防御魔術を張り全弾防ぎ、その隙に相手の懐に潜り込み龍王牙で次々と切り裂いていく。

武器を真つ二つにし、急所を的確に狙い仕留めていく。

その身のこなしの早さは、歴戦の戦士を思わせる無駄の無い滑らかな動きだった。

「くっ、死ね！！！！」

3人程の兵が魔力刃と剣で龍児の背後を取り、その背中を狙うが、それに反応した龍児は身を翻し、華麗に避け、距離を取り術詠唱に入る。

「澄み渡る明光よ、罪深き者に壮麗たる裁きを降らせよ……………」
「……レイ！！！！」

詠唱完了と同時に、武装兵の頭上に光の球体が現れ地上に向かって光線が降り注ぐ。

それを受けた武装兵は飛ばされ、気を失う。

更に龍児は術を発動させる。

「魂をも凍らす魔狼の咆哮、響き渡れ。……………」
「ブラッディハウリング!!!!!!」

その叫びと同時に武装兵の居る地面が黒くなり、そこから真っ黒の流れが天高く生じる。

それを受けた武装兵達は中空に打ち上げられ、地面に勢い良く落ち気を失った。

「お、おい……。なんだコイツ！めちゃくちゃ強えじゃないか！？」
「しかも局員にしては、使ってるの質量兵器だぜ……。」
「一体どういう事だよ!？」

武装兵達は龍児を見て口々にそう言う。
すると龍児は龍王牙を肩に担ぎ武装兵に向かって言う。

「……勘違いしているみたいだが、俺は管理局員じゃない。リュミエール国際平和維持組織・世界国家騎士団2番隊隊長、夜御倉龍児だ!!」

「……な、なんだって!!!!!!」

龍児の勇ましい名乗り武装兵達は揃って驚く。
そして、少しずつ一人、また一人と後退りしていく。

「じよ、冗談じゃねえぞ……。なんでこんな所にリュミエールの、しかも騎士団隊長がいるんだよ!!!」

「しかも、夜御倉って……。魔術を使わせたら右に出る奴はいないって言うあの……!」

「こいつが、陛下や星騎士様が仰られていた……。」

武装兵は体を震わせ、目を見開き、中には完全に腰を抜かした者もいて、全員龍児を凝視する。

まるで、見てはいけないものを見てしまったように、その顔は完全に強張っている。

「……。なんだ、その化け物を見たような目は……?」

《仕方有るまい。リュミエール最強の魔術師と戦うとなれば、並みの精神ではこうなるのが当たり前だ……。》

龍児がやや不機嫌気味に言うと、何処からともなく龍児に話しかける女性の声が聞こえてくる。

「なんだ、起きていたのか?」

《ああ、このような騒ぎに寝ていられるほど、私は図太くない。》

「それもそうだな……。」

龍児は小さく微笑むと、腰ベルトに装着してある夜天の書に手を当て、話を続ける。

「あの3人はどうだ？」

《3人も久しぶりに暴れたらしい。特にレヴィは興奮したままだ。》

「出してやりたいのは山々なんだが、まだ気付かれるのは遠慮したいんだろ……。」

《……ああ、まだその時ではない。お前だってそうだろう。》

「ふっ、まあな。」

謎の声と親しげに話す龍児は一回微笑むと、武装兵の様子を見る。ぱっと見ただけでおよそ数は800人。

さつきから斬つたり魔術で攻撃したりして200人程は始末できたが、それでもかなり残っている。

微かに向こうから感じる六課メンバーとセスタの魔力を感じながら、龍児はもう一度謎の声に話しかける。

「向こうの方がどうやら本隊らしい……。」

《あの小さな勇者達がいる方がか……。確かに相当数の魔力を感じる。》

龍児は言う事に、謎の声は肯定で返す。すると龍児は溜め息をつき、謎の声に言う。

「さっさと片付けて、向こうに行く。制御頼めるか？」

《分かった。一撃で仕留めろよ。》

「ふっ、了解。」

そう言うと龍児は龍王牙の切っ先を前に向け、黒色の魔法陣を展開し、詠唱を始める。

「……響け、終焉の笛。天・地・人を穿つ三叉の槍とかせ。」

龍王牙の切っ先に黒いエネルギーが集まり、次第に大きくなっていく。

それを見た武装兵達は慌てて逃げようとするが、時既に遅し。

《魔力安定。標準オールクリア。今だ！！！！》

「ああ！！受けよ、終焉を刻む槍。ラグナロク・トライデント！！！！！！」

龍児の叫びと共に切っ先から黒い巨大なエネルギーが放たれる。

それはやがて3つに分かれ、逃げ行くガジェットと武装兵を呑み込み、あるいは貫き轟音と共に駆け抜けていく。

彼らの断末魔すら悉く掻き消し、最後に大爆発を起こす。

それが通り過ぎた後には、ただ武器だけが虚しく落ちているだけだった。

「……………ふう……………行くか。」

《ああ。》

攻撃を終え、戦場を見渡した龍児と謎の声は六課とセスタが戦っている場所に向かって行ったのだった。

第17話 謎の声（後書き）

特別企画・キャラクター交流会

座談会編

BGM「Welcome to the world!」

龍「どうも、夜御倉龍児です。日々寒さが厳しくなる中、皆様どうお過ごしでしょうか。くれぐれも体調管理万全にお願いします。というわけで始まりました座談会。今回のゲストは、リリカルなのはシリーズの主人公で、ユーノ・スクライヤ外伝ではヒロインでユーノの恋人。高町なのはです!!!!!!」

拍手喝采の中なのはが照れ臭そうに登場。

な「にははは／＼みなさんこんにちわ、高町なのはです。」

龍「まあ、楽にして座ってくれ。……えっと、早速お話を伺っていくわけだが、座談会に出てみてどうだ？」

な「やっぱり緊張しますね。教導の時とかと違って、どんな事話せばいいのかなって思いますね。」

龍「まあ、仕方ないな。慣れるしかないって事だよ。最初はユーノが来てくれた訳だが、やっぱりなのはにとってユーノは特別な人か

？」

な「あ、はい／＼／＼もし子どもの時にユーノ君に逢ってなかったら今の私はなかった訳ですし、それで皆に知り合えたんです。ユーノ君は私の……で、今コラボ中のリュミエール篇について……切な人です／＼／＼／＼」

龍「なるほど……。良かったなユーノ、そう言ってもらえて……。まあ確かに、無印の時のあの出会いが全ての始まりだった訳だもんな……。で、今コラボ中のリュミエール篇について……。まず、リュミエールについての感想を。」

な「そうですね。今まで私が知っている世界とは全然違った感じで、フェイトちゃんやスバルそっくりなフェイト（Ｌ）さんやスバル（Ｌ）ちゃんがいて驚きました。なんというか、「すごくファンタジックな世界」だなと思いましたね。」

龍「ああ、それはテイルズの影響を受けて作ったものだから……。……少しびつくりするのは仕方ないさ。で、この前龍元が世界樹島立ち入り許可証を送ったわけだが、やっぱり行きたいか？」

な「はい！！それはもう！！！！ユーノ君と二人つきりになれるなんて最高です！！！！それでマーテルって精霊に会えばいいんですよね！！あ~~~~早く行きたい」

龍「やれやれ、すっかり盛り上がっているようだな。という事で本日はここまで。次回はユーノの師匠の一護さんとユーノの息子のナーノが登場します。お楽しみに。最後に皆さんに質問を送ります。」

質問：

リュミエールは世界樹とマナによって世界が維持されています。では、そんな世界樹から生み出されると言うディセクターとその存在の為だけの武器レディアントについて、リュミエールに存在すると思いますか？

また、世界樹島にもし入れるなら入りたいですか？

以上、龍元でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7855w/>

光の軌跡 ~ The track of shine ~

2011年11月23日15時46分発行